
AngelBeatsM y So n g

姫龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats My Song

【Nコード】

N0064M

【作者名】

姫龍

【あらすじ】

この物語は岩沢まさみ成仏後の日常を淡々と描くモノです。過度な期待はしないでください。また、この物語には自由に作者の設定が足されています。アニメとは、まったくの別モノとお考えください。

8 / 26

感想の制限がなくなりました！ アドバイス等ありましたらどうぞ
よろしく願います！

episode zero ~Where is my hope?~

(前書

初投稿です。

何か気になる点があったらご指摘よろしく願いいたします。

episode zero ~ Where is my hope ~

ずっと捜していた、自分の生まれてきた意味を。

『……………どうして、私ばかり……………』

病室で自分の不幸を呪った。

動かない体、いつそ舌でも噛み切って死のうとさえ思った。

まあ……………思うだけで動かなかったけど。

そして結局、死んでしまつてやってきたこの世界。

意味もわからず、どうしていいかもわからず座り込んでいた私に、
ゆりが声をかけてくれた。

ねえ、もしカミサマに復讐できるっていったらどうする？

へー、あなた歌えるの……………そうだ、バンドをつくりましょ？

たのんだわよ、今夜のライブ……………期待してるからね。

……………楽しかった。

ホント、ろくな事がない人生だったけど。

ここにきてからは、毎日が楽しかった。

死んだ後のほうが楽しいだなんて思わなかった。

カミサマ……………ずるいよ。

これじゃあ、恨めないじゃん。

なんで、生きてる時は厳しくせに、死んだ後はこんなにやさしいの？

ああ……いきたくない。

まだ……ここにいたい。

でも……もういれない。

だって……私は見つけたから。

もう、ここで燻っている訳にはいかないんだ。

カミサマ、次もどうか、ニンゲンにしてください。
もう一度同じような家庭環境でもかまいません。

次は必ず、つかんでみせる。

だから……さよなら、みんな。

『……………岩沢？』

どこかでひさこが私を呼んだ。
だけど、もう振り向かない。

その日、私はこの世界にサヨナラした。

Where is my hope? ……End

episode zero ~ Beginning Place ~

ゴトン！

「……………ん？」

軽い揺れだったが目が覚めた

「……………ここは？」

どうやら気を失っていたらしい。
目をあけて、周りを見る。

……………どうやら私は電車に乗っているようだ。

しかもローカル線。

「……………なぜ？」

どういう事だろう……………

私は、確かにあの世界から消えたはずだ。

ここはどこだろう……………まさか死後の世界の死後の世界とか……………まさか……………ないよね？

だんだんと焦りが出てきた。

ここは……………どこだ？

とりあえず、別の車両にいこう。

きっと誰かいるはずだ……………

私は立ち上がった……………と、その時、扉が開いた。

「目が覚めた？」

……

……

……冗談だろ。

そこに立っていたのは、手に飲み物を抱えた天使だった。

それから……

軽くパニックになった私は現在、天使と合席中だ。

手には、天使から渡されたおいしい水（……なんで私の好きなのし
ってんだろ？）

かの天使は私に水を渡した後、電池が切れたように動かないし、し
やべらない。

………気まず！

私も何を言っていないか分からず、数分悩んだ末、とりあえずお礼を
言おうと勇気をもって天使に話かけてみた。

「……………あの」

「おめでとう、岩沢さん。貴女はしっかり見つけられたようね」

………お礼を言う前に天使に無表情で淡々とした祝福の言葉をかけら
れたんですけど。

「ああ、そりやどうも……」

とりあえず、お礼を言った後、

「あ、やっぱり私消えたんだね」

天使の言葉から私は確かに消えたことを確認した。

「ええ、今いるここは『死んだ後の世界』ではないわ……かと言って生きていた世界でもない……ここはその狭間の世界……私は『幻想世界』と呼んでいるところよ」

「そうなんだ……あつ……じゃあ、私はこれから生き返るって訳？」
「そう」

……正直に言うと、よく意味はわからなかったのだが、どうやら流
れる的になると、私は生き返れるらしい。

「じゃあ、何？ あんたは見送りに来てくれたの？」

「そういうことになるわね」

「そりやどうも……まさか最後に天使が見送ってくれるなんて思わ
なかったよ」

まるで、これから死ぬみたいじゃん……

「一応、あの世界の生徒会長だから……最後に見送るのも仕事」

「ああ、善意でやった訳じゃないって？」

あくまで、仕事か……だよな、さんざんやってきたからな……そり
や、嫌われるか……

「……あのさ……えっと……ゴメンな？ 今まで……」

とりあえず謝った。

さすがにこれを言つとかないと目覚めが悪くなりそうだ。

今までさんざんマシンガンとか、グレネードとか、ロケランとか……思い出すといろいろこいつに撃ち込んだな。（もちろん、私はやってない。面白がつてやったのはひさこ達だ）

「……大丈夫、私は気にしてない」

「お、大物だな……」

あれを気にしないとは……

そんな事を考えていると、今度は天使が自分から口を開いた。

「……貴女は本当に満足した？ 別に今からでも戻れるわよ？」

「……ホントに？」

おもわず、食いついてしまった。

数秒、見つめ合う。

「……………」

「……………（フツ）」

すると天使は可笑しそうに微笑んだ。

「……………本気にした？」

「いや、ここでまさかの冗談オチ!？」

おもわず、音無しのようにツツコンでしまった！

「……だって、もし本当に戻れるとしても貴女は戻らないでしょ？」

「いや、確かにそうだけどさ……………」

天使の言葉で、思い出した。

……そうだな、簡単に決めた訳じゃない。
悩んで悩んで悩んで……そして手に入れた答えだったじゃないか。
この程度で揺らぐような決意じゃない……

「……………本当に大丈夫みたいね」

「ああ、悪いな……………もう、大丈夫だ」

天使は私を試しているんだ……………ホントに大丈夫かどうか……………

最終確認をしているんだ。

だったら、弱いところなんて見せられない。

私は新たに決意を固めなおした。

ポーン

『ご購入ありがとうございます。次は……………でございます。お忘れ
モノのないよう……………』

アナウンスが私の生前住んでいた町を告げた。

「……………そろそろね」

「ああ、しかも……………どうやらまた、人間みたいだな」

たぶん、予想だと姿も変わらないだろう……………私はあの病室からやり
直すのだ。

「再スタートって訳か……………」

そういうとなぜか、天使は表情をくもらせた。

「どうした？」

「……………いえ、別に……………ただ、いいの？ 貴女にはこのままここを通り過ぎて、全てを忘れて一からやり直す道もあるのよ？」

天使は暗に『辛さを抱える必要はない、最初からやり直せ』と言っているのだと理解できた。

だからこそ……………私は、こう、天使に言葉を返す。

「上等だよ、むしろ好都合だ。最初からどん底なら、もう、失わない。後は……………掴むだけさ」

私の言った言葉に天使は一度目を開いた後。

「そう……………よかった」

微笑んだ。

ポーン

『ご乗車ありがとうございました。』

駅

駅で……………います』

「じゃあ、行くか……………」

私は立ち上がった。

そして、天使の方をむく。

「えっと……じゃあな」

「さよなら」

「あー……最後に名前聞いてもいいか？」

最後の最後で何失礼な事を言ってるんだろ思ったが、これだけは確認しておきたかった。

……天使、ちよつと涙目……ごめん。

「立華……立華奏」

でも……天使、いや奏はちゃんと教えてくれた。

「そう……奏、ね。いい名前……覚えておくよ」

音を奏でる、か……

「じゃあね、奏。最後にあんたと話せてよかった」

「そう」

「……戦線の奴ら、あんま嫌わなくてくれな」

「わかったわ……じゃあね……rebels against
the god」

「？」

最後の言葉は聞き取れなかったが、まあいいか。

私は奏に背を向けると歩き出した。

左手を上げて別れの挨拶。

もう振り返らない。

私は、ローカル線から降りた。

プレゼント、大切に。

最後に聞こえたのは奏の声。

……… 意味はわからないけど……… ありがとう。

私を光が包んだ。

見送った、手を振った、よかったね……と。

B e g i n n i n g P l a c e …… E n d

episode zero 〈Morning awakening〉

目を開けば、そこは一面真っ白な空間だった。
すぐにここが病室だと理解する。

（そうか……戻ってきたんな……）

声は……出なかった。

でも、私には確かにあの世界で掴んだ答えがある。
だから、絶望はしない。
どこまでやれるか……

「……………」

無意識で天井に向かって手を伸ばしていた。
そして……手を伸ばせることに気づいた。

なるほど……

（これが、プレゼントってやつか……）
奏……あんた最高にいい奴だよ。

声は出ないけど、体は動く。
これだけで……十分だ。
私はまだ……戦える。

後は、掴むだけだ。

私は、コールブザーを掴んで、連打した。

さあ、来い。

ここからだ……

ゲームスタート！

M o r n i n g a w a k e n i n g E n d

病室。

そこは普通なら、病人がおとなしく寝て傷を癒す場所なのだろう。

しかし……

「ふ、ふ、ふ………」

いつもは無音な空間も今は規則正しい息が響く、ジムのようになってる。

私はベットの上で腕立て伏せに励んでいた。

何もおかしくなった訳じゃない。

ただ、あの世界にいたころ高松が

『腹筋や腕などを鍛えてはどうですか？ 肺活量が上がれば、歌の幅が広がりますでしょうし、腕が丈夫になればスピードは勿論、耐久力も上昇しますから、さらにレベルの高いパフォーマンスが可能になるのでは？』

と言っていたのを思い出したのだ。

あの時は、メンバーと一緒にになって笑い飛ばしたが、今になって思うと確かに一理あるのかもしれないと思う。

（高松……悪いな、あの時は笑い飛ばしちまって……）

少し、反省しようか……と一瞬思ったが

『いえいえ、今活かされてるだけで十分です』

と言う、高松の声（妄想）が聞こえたのでやっぱりやめた。

だいたい、後悔したところで仕方ないし、高松ならまあ、気にしないでらうと思ったからだが……（ちなみに、高松は笑いにされた事を気にしていた。これが後のテスト妨害作戦に繋がっていくのだが、正直なところ、岩沢には関係ないし、知る事もないことだった）

（97、98、99……200、よし、腕立て伏せ終了）

起き上がると、近くに置いておいたタオルで汗を拭きながら水を飲む。

まだ、私は病院の中だ。

目覚めてから、一週間がたっていた。

後で聞いた話だが、最初、私がブザーを連打した時、ナースステーションは大混乱に陥ったらしい。

なんせ『身寄りのないほぼ、植物状態の少女が一人眠る部屋』から、突然の連打コールだ。

病院側から見たら、最高に恐ろしかったのだろう。

三十分後に来た若い看護師（山田さん・25歳・女・独身）は人身御供にされた娘のようにこの世の終わりみたいな顔をしてやって来た。

あの顔を見た時は悪いが大爆笑だった。

その後、精密検査を受けて出た結果は私を驚かせた。

私は植物状態から回復しただけでなく、失語症ではなく失声症と診断されたのだ。

難しいので、説明は割愛させてもらうが要は私の病気は『いつか治るもの』になったのである。

……………奏のプレゼント恐るべし。

ほぼ、完治と診断された私を見て、医者は「俺は……………神を信じるかもな」と話していた。

つまるところ、私的には万々歳名な結果という訳だが……………世の中、そう上手くは廻らないらしい。

今の私は、確かに健康になりつつある。

しかし忘れていけないのは、私は一週間前までは、ほぼ危篤の患者だったということだ。

そう……………あまりに悪すぎて両親に雲隠れされるくらい、私は重症だった。

先生が言うには親権者が行方不明で、見つかるまでは病院にいてくださいね、という事らしい。

……………あの馬鹿ども、ゆるすまじ。

そんな訳で、私は病院から出れずにいる。

まあ、私としては三食しっかり出て、寝るところも住むところにも困らない（そして何より料金が両親負担な）ここは意外と住みごこちがいいのだ。

おかげで、私はただいま病院に無銭衣食住状態のparasite状態だ。早く……両親が見つかるといい、そして苦しむがいい……

「岩沢さん、検温ですよ」

そんな事を考えていると看護師の山田さんが部屋に入ってきて、体温計を渡してきた。

私は黙って、検温することにする。

数分後、体温計を山田さんに渡す。

「はい、どうも。……36・5、思いつきり平熱ですね」

……最近、白衣の天使の仮面がはげかけてるな……ちょっと怖い。

「早くご両親見つかるといいわね」

コクン（ええ、まったく。そうしないとそろそろ私の命が危ないかもしれないし）

「やっぱり寂しい？」

ふるふる（いいえ、まったく。……再開はドロップキックって決めてますから）

「無理して……強がらなくていいのよ？」

コクン（強がってませんから……というよりここまで意思疎通が難しいとは……）

まったく、会話が噛み合わない……手話でも覚えた方がいいのかもな……

山田さんの話を聞きながらそんな事を考えていると……

ポーン

（あっ……放送？）
なぜか、放送がなった。

「おかしいわね……今検温やったばかりなのに……」

山田さんも首をかしげている。

どうやら、緊急放送らしい。

なんだろう……熊でも出たのかな。

『あー、テストス……124号室の岩沢さん、お荷物です』

やる気のないおっさんの声が響く……なるほど、お届けものね。 1
24号室に……って私じゃん！

「へー、お荷物ね……まってて、とってきてあげるから」

山田さんは、そう言って病室を出ていった。
いい人だ……しかし、誰からだろう？

（まったく、思い浮かばない……）

両親からだつたら、速効破棄……そんな事を思っていると山田さんが戻ってきた。

なんですか？ その横40？高さ1m長さ2m弱はあるつかという
超巨大ボールは……

大人8人がかりで持つてこられたそれは、私の病室の4分の1を占

めるくらいの大きさだった。

これ……いったいどうしろと？

『これ、なんですか？』

さすがに今回はしっかり意思疎通が必要とマジックボードに文字を書いて山田さんに見せた。

「何って……お届けものよ？」

『いや……それはわかりますから……誰からですか？』
「それがね………」

山田さんが領収書を見せる。（しっかり親名義）
その差出人の名前を見て、私は固まった。

「立華奏さんからよ」

それは、死後の世界の……奏からの贈り物だった。

P r e a c h e r ' s W i f e …… E n d

episode eins 〔Treason〕

私は速攻で山田さんを追い出すと、ダンボールを開けた。

中には……死後の世界で使っていた私の私物、そして茶封筒が入っていた。

私は茶封筒を開いた、中身は戦線メンバーと撮った写真、そしてゆりからの手紙が入っていた。

拝啓

ひさしぶり……とういうのもおかしいわね

元気にしてた？ 岩沢さん

もしかしたら、この手紙が貴女に届くことは無いのかもしれない

滑稽よね、私達が思い出にすぎるなんて……

あのね、天使が来たの……

『岩沢まさみの使っていた部屋を早く開ける』

って言うてきたのよ？

思わず、全面戦争になる所だったわ……

でもね、彼女……

『捨てる何て言っていない……彼女に渡すものがあれば私が送ってあげるから』

って言ったのよ……

当然、最初は渋ったわ……でもね、ガルデモのみんなが、送ろうって言うから

こうして送ることになったわ

何でも、天使が言うには書いてある住所に送れば、こっちの世界にも届くらしいの

まあ、期待はしてないけど……暇な時はたまに連絡ちょうだい？

じゃあね

ゆりより

「……………」

我慢しようと思ったんだけどな……

私は、一週間ぶりに泣いた。

手紙を読み終わり、他の荷物を見える。

ギターが三つにアンプ、チューナー、楽譜といった音楽関係のもの、SSSの制服、そして……………『コイツ』

……………いける。

これがあれば、また私は音楽ができる。

それに、これからはあっちの世界ともやり取りができるらしいし……………

(……………いけるぞ)

かなり幸先いいスタートが切れる。

(……………造るか)

Girls Dead Monster……………ガルドモをもう一度。

(……………そういえば、あっちでも最初は一人で勧誘してたんだよね……………)

とりあえず、初めに一人、ずっといてくれる……………ひさこのような仲間を探そう。

そこから徐々に大きくしていこう。

大体のプランを練った私は、パジャマを脱いだ。そして、SSS制服に着替えた。

(……………さあ、始めようか)

私は病室を出る……………ついでに手にはマジックボード。

rebels against the god.....神への反逆を
もう一度始めよう.....

Treason.....End

これは岩沢が仲間を探し始める2日前の話。

それは、岩沢さんが消えてから4日目の事。

本来なら下っ端の私が来れる所ではないのだが、今日、私は戦線の本部に来ていた。

理由は一つ。

私は次期ガルデモのメンバー候補に選ばれたのである！！

「ありえねえ……」「ガルデモはロックバンドですよ？」「アイドルユニットにでもするつもりか」

などと、散々先輩方からダメ出しをくらったが、持前の根性（雑草精神ともいう）と技術で何とかガルデモのメンバーに選ばれた。

し・か・し

敵は思わぬところから現れたのである……………！！

「まあ、後はメンバーにまかせましょ」

「いやったー！ ひさこさんと組めるうー！！」

隊長さんの一声で皆がなっとくしかけた時

ブーン！ 鉄球の音

（あつ……誰か引つかかった……）

シュパン！ 何かが切れた音

（????）

後ろの扉で何か音がした。

みんなが振り返るとそこには………天使が立っていた。

「臨戦態勢！」

隊長さんの声で、一瞬停止した思考が呼び戻される。
な、なんで天使が……もしかしてこれって……

ピンチってやつですか？

「……………待つて」

無数の銃に臆することなく平然と構えている天使。

お、大物だ……………などど、どうでもいい事が頭をよぎる……………私、
動揺してんだな……………

「……………何の用？」

隊長さんが代表して天使に問いかける。

怖いなあ……………あんな顔と声で問いただされたら漏らしそう……………
それでも、天使は無表情のポーカーフェイスを崩さない。
そしてこう言った。

「岩沢さんの話」

場が凍りついた。

「やっぱ、てめえの仕業かよ！」
やさぐれあんちゃん先輩が叫ぶ。

「一人で来るとはいい度胸だな……………今度こそ千回死なせてくれる！」

「お、おい！ やめろつて！」

「そうだぜ！ お前じゃかなわねえから！」
「うるせえ、はなせえ！」

いつつもオノ持つてる先輩が先走ろうとしてひなつち先輩とえつと……………音無？先輩におさえられた。

ほかに、にんじゃ先輩がいつもより焦った声で「あさはかなり」
つてつぶやいたり、めがね先輩が二人揃ってめがねクイツ！ つて
やったり、TK先輩が「Carnival of Despair
……………」て言ったりと、みんな反応はいろいろだけど、天使のセリフ
が気になってるみたいだ……………

代表して隊長さんが天使と話している。

「どういう事？ まさか貴女が……………」

「違う。それは貴女にもわかるはず」

「……………そうね」

「おいっ！ ゆりっぺそいつの話なんて聞かなくても！」

「ちよっと、黙ってて！」

「でつ、何？ 岩沢さんの話って？」

「彼女が使ってた部屋、空けてもらえるかしら？」

「なぜ？」

「ほかにも使いたいって生徒がいるのよ……それにもう、彼女はいないわ」

「……………無意味だと？」

隊長さんの声にかすかに怒りが混じる。

でも、天使は全く気にしない。

そしてこう、言い放った。

「ええ、正直な所、早く部屋開けてくれないかしら」

……………コイツ。

みんな、いつせいに押し黙る。

「貴女一体……………」

隊長さんが切れかけな口調で言葉を吐こうとした時

「別に捨てるとは言っていないわ」

「じゃあ……………」

「彼女に必要なだと思うものがあるなら、私が送ってあげる」

天使が……………そう言った。

みんな今度は別の意味で黙る。

私は、天使が言った言葉の意味を考える。

（それって……）

「……………渡せるって事ですか？……………こつちの世界からあつちに……………」

つぶやきが口から洩れた。

「ええ、そういう事」

天使が認めた事で、考えが正しかったと知る。

「そんな事……………一体どうやって？」

隊長さんが天使に質問する。

「それは秘密」

「なんで!？」

「だって……………もし、あつちの世界……………生きていた世界の方に銃や槍や刀がいったらどうするの？」

「そ、それは……………」

「おこらない……………とは、言い切れない……………いつの時代も間違いはある……………どんなに結束しても」

「わかったわ……………」

隊長さんの諦めた声。

だけど確かに……………お母さんのいる世界でそれはイヤだな……………

「いいのかよ……………ゆりっぺ」「そうだぜ？ そんな事あるわけが……………」

「仕方ないでしょ？ 私たちのわがままで、あつちに迷惑をかける

訳にはいかない」

「わかった」「りょーかい」

隊長さんの声で一応、みんな納得した。

「わかったわ……お願いする。少し時間をくれない？」

「いいわよ……準備ができれば教えて」

そう言つて、天使は出て行こうとしたところで……なぜか立ち止まり、振り向いた。

「どうしたの？」

「……………そのあなた」

隊長さんの声を無視して天使が指さした先には……………

「……………へ？」

私^がいた。

「えっ……………わ、私？」

「そう」

「え、えつと何かな？」

何かしたかな……………

「この間のライブの時に張ったポスター……………ちゃんとはがしてね？」

「み、見てたんだ……………」

どこかで、おい……注意しろよ、とつつこみが聞こえた。

「わかった……しっかりはがします」

ついでに部屋の壁に貼りまくろう。

「あと……」

「まだ何か？」

これで終わりかと思ったが、まだあるようだ。

「貴女……ガルデモにはいるの？」

「ええ、まあ……」

き、聞いてたんだ……

「そう……」

あ、やっぱり注意くらう？

そう思って身構えた私に天使が言った言葉は……

「もっと、練習しなさい……このままじゃバンド死ぬわよ？」

「なっ!？」

まさかのダメ出しだった……

天使は後は何も言わず本部から出ていった。

後に残ったのは、新た発見に驚くメンバーと

「おい……天使にまでダメ出しくらったぞ?」「やっぱり、ダメじゃ

ね?」「しっ……可哀そうだよ」「

「あーあ」「あさはかなり」「Is discouraged,
the next is」「修行あるのみだな」

「うにやあああああああああああ!!」

屍となった私だけだった……

やっぱり、天使なんて嫌いだあああああ!!!!

Angel attack ……End

とりあえず私は街に出た。

ばれたら、山田さんに怒られるだろうが、別にたいしたことはない。
今は、メンバー集めが大事だ……

それから、数時間。

私のメンバー勧誘は熾烈を極めた。

とりあえず、声が出ないので基本相手を叩いてから話しかけるのだ
がこれにキレられたのが、20回。

何とか話を聞いてもらっても、声が出ないんじゃ……と断られたの
が42回。

変なおっさんに話しかけられたのが8回。（この制服はコスプレじ
ゃない！）

と、こんな感じである。

現在、私は意気消沈して公園のブランコで揺れていた。

さすがに何時間もやって疲れた……

おいしい水片手に、溜息をつく……

（世の中、そう上手くいかないか……）

みんな忙しいのだ。

生きることに必死なのだ。

赤の他人に……私なんかにかまってるヒマはないのだ……

わかってる……わかってるけど。

（あきらめない）

やめるわけにはいかない、その内声も戻るのだから、頑張らなくては……

「ねえ」

（よし、またがんばろ）

「ねえってば」

「……………」

右手のこぶしを握り、決意を新たにしていた私は、話しかけてくる人に気がつかなかった。

顔を上げると目の前に少女が立っていた。

まだ、少し幼いようだが、顔立ちはなかなか端正なかわいい子で緋色の髪が印象的だった……おっと、思わず見とれてしまった、一応この子も勧誘してみるか……

すばやく、マジックペンをはしらせる。

『なんかよつか？』

「なんで、それで話すの？」

『私は、声が出ない』

「そ、そうなの？ ごめんなさい……………」

『気にすることはない』

「ありがと……………」

『それで？ 何かよう？』

「えっと……なんだか暗い顔してたから……大丈夫？」

そうか……こんな子供に心配されるほどの顔になってたのか……

『大丈夫だ……ありがとう』

「い、いえ……こちらこそ、余計な事を……」

……引っ込み思案なようだが、今時珍しいくらいやさしい子だな……
……ほしいな。

『……名前は？』

少し、欲を出して切りこんでみた。
案の定、少女は答えてくれる。

少女よ……私が言えないが人をもっと疑うべきだな。

「えっと……初音………音無初音つています」

なるほど……音無初音ちゃんね……

「ああ、呼び捨てでもかまわないです」
『どうも』

何かが、引っかった気がしたが気にしないことにした……まあ、
無関係だろう。

『あのさ』

「はい？　なんですか？　えっと……名前は？」

『ああ、ごめん……岩沢まさみだ、よろしく』

「なるほど……まさちゃんさんですね」

(………)

………まさちゃんさん。

ゆりっぺ並にひどいあだ名だ。

（センスの悪さは日向並だな）

「どうかしました？」

『いや……別に』

「そうですか……あー、まさちゃんさんはどの学校に通ってるんですか？ あんまり見かけない制服ですけど？」

『まさちゃんさんはやめない？』

「へ？ ……そうですか、わかりましたじゃあ岩沢さんで」

うん……そっちの方がしっくりくるな。

『私は、今学校には通ってない、この制服は……前の学校のもの』

「そうなんですか……すいません」

正確にいうのなら一応、まだ学校には入っているのだろうが……
そういえば、初音は何年生なのだろう？ 『何学』だけど。

『初音は何年生？ というより小学生以上だよな？』

「し、失礼ですよ？ 岩沢さん……初音はこれでも高校生ですよ？」

なんとまあ……予想外。

これが噂のロリ属性持ちというやつなのか……

と、不意に頭にある可能性が浮かんた……まさか……

『悪いな……ちなみに何年生？』

「……まだ一年生です」

よかった……タメだ。

「どうしたんですか？ 何か安心してみたいですけど……」

『いや、別に？ ……………なあ、初音？』

「なんでしよう？」

私は、気合いと祈りを込めて……書いた！

『バンドをやらないか？』

届け！ 私の想い！

初音は一瞬「へ？」と間が抜けたような顔をした。

「バ、バンドですか……」

『やらない？ やろうよ、というかやって！ 楽しいよ？』

「私、経験無いんですけど……」

よし……嫌がつてるわけじゃない。
いける……

『大丈夫！ 私が一から教えるから！ こう見えて人に教えるの得意だよ？』

精一杯書く。

「でも……」

マズイ……渋り始めた。

こうなったら……

『わかった……』

「すいません……」

『聞かせてあげる』

実力行使だな。

「えっ……？」

てつきり、諦めたのだと思っただろう。
初音は驚いた顔をした。

『聞かせてやるよ……私の音楽』

「そんな……悪いですよ氣を使ってもらっでは……初音はやってもいいですよ？」

本当にいい子だな、初音。

氣が利いて優しくて……でもね、私は無理やりじゃなく、初音自身の意志で私に共感してほしいんだ……
これがわがままだって事はわかってる。
でも……この想いは止められない！

『いいから、来て』

「あっ……ちよつと、岩沢さん」

私は初音の手を引いて歩きだした。

確かな一歩を歩きだした。

Where a child of this child?
…

∴
E
n
d

「ちょっと岩沢さん！？ いいですよ、私やりますよ？」

「……………」

「こういう時だけ、無言になるのずるくないですか!？」

しばらくこうして手を引いて歩いている。

その内、初音が「わかりましたもう逃げないのではなしてください」と言っただけで手を離れた。

「もう…………意外と強引ですね、岩沢さん」

『ごめん…………反省してます』

「もし岩佐さんが男の人なら通報してますよ」

あれから初音はご立腹だ。

しかたない…………今回は私が悪い。

『ホントごめんなさい』

「もういいです……………ホントこういう所はお兄ちゃんそっくりです」

『…………ん？ 何か言った？』

「ホントそっくりです!」

うつ…………何か余計怒らせた。

しばらくの間、初音は無言だった。

それから、数分後。

「岩沢さんの家って結構初音の家に近いですね」

無言に堪えれなくなったのか、初音の方が先に折れた。

『いや、私の家はこつちじゃないよ?』

「はい? じゃあなんでこつちに来たんですか?」

『いや、私現在入院中だから……』

「なるほど……納得です」

「しかし、病院でギター鳴らしていいんですか?」

『大丈夫、完全防音だから……』

なぜかね……

ふーん、と初音は納得した後、また黙り込んだ。
結構、恨みは長いらしい。

それから更なる気まずい無言空間をへて、病院についた時、私は一息ついた。

「あら、岩沢さんおかえりなさい……お友達?」

『そんな所だよ……山田さん』

山田さんに挨拶をした後、病室に入る。

「一人部屋なんですか……さびしくないですか?」

『いや……快適だよ?』

さまざまな機械をセットしながら、会話をする。

そして……

『よし、できた……』

「わあ……中々すごいです」

軽いモノだが、特設ステージみたいなかんじだ。

初音に歌詞カードを渡す

歌う曲はもちろん……

「2曲ですか……えつと『Crow Song』と『Alchemy』
『』でいいんですか？」

『ああ、そうだよ、歌詞は今はないけどな……じゃあ、聞いてくれ
……』

ジャン！

私は弾き始めた。

『Crow Song』には過去の苦い思いを混ぜて……

『Alchemy』には過去の幸せと満ち足りていた思いを乗せて

……

私ができる最高の演奏をした。

「……………」

『……………どうだった？』

演奏が、終わってしばらくしたが、初音は無言だった

……………ダメだったんだろうか……………ダメだったんだろうな

（そう、調子よく事は進まないか……）

だが、それならせめて感想でも聞こうと、私は初音の肩を叩いた。

ビクン！

……痙攣しましたけど？

『……どうだった？』

「あつ……えつと……その……」

『ダメだったか……』

「いや……えつと……すごく心に響きました、最初の歌は人生の理不尽を呪っているように聞いていて吸い込まれそうでしたし、次の歌はすごい幸せそうで……それでもなんだか自虐的で……えつと……すいません、うまく言葉にできないです……」

……すごいな、そこまで感じて聞いてくれたのか。

「あの岩沢さん……？」

『……ありがとう』

「えっ？」

『ありがとう……』

なんだか、涙がでそうだった。

私はそれを必死にこらえる。

まだ、泣くのは先だ。

今は……聞かなきゃな。

『あのさ……』

「岩沢さん、私に音楽教えてください」

一緒にやらないか？ と聞く前に初音がいいと言ってくれた。
やりたいと……

「ちよっ……どうしたんですか？ なんで泣いてるんですか？」

こらえきれなかった……

私は、少しの間、初音の腕で泣いた。

なんだか、とても温かった。

その後。

初音が「友達になってくれたお礼です。今日は初音がおごっちゃいます」と晩御飯に誘ってくれた。

一応、山田さんに聞くと「いつてらっしゃい……」と言ってくれたので、今日は初音の家で晩御飯を御馳走になる事する。

初音の家は病院のすぐ近くだった。

「えっと、家にはお兄ちゃんがいますけど、大丈夫ですよ？ 怖くないですから」

『そう、なんだか悪いね』

「いえいえ、全然かまいませんよ……ただいま！」

私は声が出ないので『おじやまします』と書かれたマジックボードを掲げて家におじやました。

「少し、まってください」

初音はそう言って、家の中に入ってしまった。

数分後。

「紹介します、おにいちゃんです」

「兄の音無ユズルです。こんばんわ」

出迎えに来てくれた初音の兄貴は……『記憶なし』にそっくりだった。

L i s t e n t o m y s o n g s ! E n d

これは、まだ私が『死後の世界』にいたころの話だ。

私が『消えた』ライブの練習をしている時、あいつ……音無が覗きに来ていた。

いつもなら、無視するところだが、その日はたまたま、メンバーの中で演奏中に弦を切った奴がいたので、貼りなおすまでの間、私はそいつと少しおしゃべりをしたのだ。

「あんたも……辛いことがあったのか？」

「そうか……あんた記憶ないんだっけ？」

音無は不思議な奴だった、普通の……『記憶』がある奴なら、絶対に聞いてこない事を聞いてきた。

正直、話しちゃダメなんてルールはなかったが、誰も話さないようにしてたから、そんな暗黙のルールを破ったイレギュラーな存在が私には新鮮だったのかもしれない。

私は、いつの間にか音無に自分の過去を話し始めていた。

家庭のこと……歌に出会ったこと……歌い始めて……そして倒れたこと……

音無は私の言葉一つ聞き漏らすまい……とでも言うくらい集中して私の過去を聞いていた。

今にして思うと、あいつは暗くても……どんなに辛くても、『生きる目的』を持っている私達がうらやましかったのではないか、と思

った。

だって……私には『音楽』という死んでも持てる希望があった。しかし、音無にはそれもない、『後悔』がないのだ。

悔しかったことも、楽しかったことも音無にはない。

あったのは、『戦う』という選択肢だけ

そんな音無が不憫だな……と勝手に思った私は、話のあと、飲みかけだった「おいしい水」をくれてやった。

普通に音無は飲んだ。

……やっぱ、こいつ記憶ねえんだなと思った。

たく、知らない女の子と今のおまえにとっては『初めて』の間接キスだぜ？

せっかく『思い出』与えてやったんだから、少しは喜べよな……

……これは音無が知る事のない岩沢の裏話。

K n o w t h e s t o r y b e h i n d h i s E n d

episode eins ｝ Happy Landscapes

「岩沢さんはバンドやってるんだ？」

『はい……一応』

「とっても上手なんですよ、岩沢さん」

「へー、今度ぜひ聞いてみたいな」

『ありがとうございます……』

初音の家で、私は夕飯をごちそうになっていた。

しかし……記憶なしのやつ、年上だったのか……

初音の兄貴、音無ユズルはあっちの世界にいた「音無」にそっくりな奴だった。

……これが世界の可能性というやつなのだろうか？

違うのは、髪型くらいであっちの世界の音無が短髪だったのに対しこっちの音無は長髪。詳しく説明するなら……まあ、そんな詳しくはないのだが……全体的に長く、正面から見た時、右側の目が隠れるようになってる。

………なんとつかまあ……バンドでもやってそう。

『音無さんはバンドとかやってないんですか？』

「えっ、俺？ まさか……やってないよ」

そうなんだ………なんかがっかり。

そんな私の表情を読んだのか、なぜだか初音はジト目になっていた。

「………岩沢さん、何だか失礼な想像してません？」

『いや……まあ……』

だって髪型アレだしな……ひきこもり？ 違うよね？

「……………これでも医大志望の優等生さんなんですよ？ 国立ですよ？」

『……………は？』

なんですと！？

そんな……あいつ実は頭良かったのか……

「まあ、初見じゃそんな風には見えないよね……………ひきこもり……………とか思ってたでしょ？」

『……………ええ、まあ……………すいません』

「失礼です岩沢さん……………でも……………さすがにその髪型はなんとかした方がいいと初音も思います」

（（思ってたんじゃない））

まあ……………なんだかんだ言うけど兄貴があんな髪型じゃね……………音無は「その内切るか……………」と少しさびしそうにつぶやいていた。

「へえー、そうなんですか……………やっぱり少し難しそうですね」

『まあね、最初は少し大変だけど、すぐになれるよ』

「そうなんだ……………俺もやってみようかな」

食後、私は音無兄弟とおしゃべりを楽しんでいた。

初音も音無も合いの手が上手く、話していても楽しい。

私は時間が過ぎるのも忘れて、すっかり話し込んでしまった。

「……岩沢さん、病院に入院中なんだよね？」

『……ええ、まあ……もういつでも退院できるんですけどね』

「あ、そうでした！ 岩沢さん、時間大丈夫ですか？」

……あつ

『しまった！』

忘れてた！

私はこれでも入院中の患者だったんだ……しかも入院費滞納者！

(まずい……)

逃げたとか思われたら都合悪いな……

『…………すみません、そろそろ帰ります』

「そう？ …………初音、送ってけ」

「了解です！」

『…………えっ……いや……』

結構です……と言いたところだったが、初音がぜひ行きたい！
という目をしていたので断れなかった……

夜道はあんまり好きじゃない。

でも……隣に誰かいて、一緒に歩いてくれるのは、うれしい事……
なのかもしれない。

私と初音はおしゃべりしながら、夜道を歩く。

明日から、私は初音と音楽を始める。

ガルデモは再び歩き始めたのだ。

H a p p y L a n d s c a p e E n d

出会ってから数日がたちました。

初音は毎日、がんばって岩沢さんと練習しています。

でも……

『初音……ここはこう……こうして、こうやって……忘れたっ。』

「はっ……すいません。がんばります」

『ゆっくりやってこうぜ？』

「……………はい」

中々、うまくはいきません……

やはり、そう簡単にできるものではないらしいです。

でも……あきらめませんよ！

だって……岩沢さん、私に期待してくれてますから……がんばらないといけません！

『よし……今日はこれくらいにしておくか』

「……………ありがとうございました……………」

『おいおい……そんな気、落とすなよ……簡単にいくもんじゃないさ……………』

岩沢さんが慰めてくれますが……

「……同情はいらないのです……出直してきます……」

今の私には……逆につらい……

『そ、そうか……』

「岩沢さん……家で練習するので、貸してください……」

『あ……ああ、いいぜ?』

「ありがとうございます……」

私は、岩沢さんがいいと言ったギターを掴むと立ち上がった。

『帰るのか?』

「はい」

『送るよ……』

「いえ、今日は結構です。初音は……今日は自分のこれまでを反省しつつ帰る事にします」

『そ、それは……』

「心配しないでください……明日には不死鳥のように蘇ってきますから……」

『そうか……』

「では、さようなら」

『ああ……がんばれよ……』

岩沢さんに挨拶することもなく、私は病室を出た。

「はー……どうしたら、うまく弾けるようになるんでしょう……」

独り言をつぶやきながら私は歩いている。

毎日、朝から夕暮れまで練習しているがあんまり上達していない気がする……いや、別に岩沢さんの指導は悪くない。

習い事の先生みたいに怒らないで丁寧に教えてくれるし、なにより私を見捨てたりはしない。

もつと……もつと頑張らなきゃ……

決意を新たに、私は家へと急いだ……の、だが……

「……………鍵がありません……………」

岩沢さんの病室に家の鍵を忘れてしまいました。

しかもこんな日に限って、おにいちゃんは今日、遅帰りです。

……………しかたありませんね。

「取りにもどりましょう……………」

実に間抜けなんです……………」

病院に戻ると、辺りはもう、すっかり暗くなっていました。

「あら？　初音ちゃん……………今日は遅いのね」

「いえ……………初音はちょっとわすれものをしたです」

山田さんに事情を説明したりしながら、岩沢さんの病室へ急ぐ。

そして……………岩沢さんの病室近くに来た時、私はある違和感に気がついた。

（あれ……………誰かお見舞いに来てるのでしょうか？）

岩沢さんの病室から……声が聞こえる。

「……………初音は随分頑張りものだな」

それは……とても綺麗な……女の人の声だった。

（私を知ってるみたいですね……………誰でしょう？）

「でもな……………あんまり焦ってもいい事はないんだぜ？」

「ゆっくり……………少しずつ、上手くなっていけばいい……………」

「それにしても……………いつまで……………ここにいるんだ？」

……………全然、会話がつながりませんね。

これは……………

（会話というより……………独り言ですね……………）

（誰が、話しているんだろう……………気になるな）

少し、あつかましい気もしましたが、私もそろそろ鍵を持って帰らないとおにいちゃんが帰って来てしまうくらい遅い時間になってしまいました。

ちよっと悪いですがお邪魔することになります。

コンコン

「岩沢さん、初音です。失礼しますよー」

私はそう言って、部屋に入った。

「……………！！！」

「あれ？ 誰もいませんね？」

部屋にいたのは、岩沢さん一人だった……

H e r s e c r e t E n d

episode eins 〔My Secret〕

日常が壊れるのは一瞬だった。

「岩沢さん、初音です。失礼しますよー」

……私はとつさに「待つて！」と言いそうになった口を慌てて押える。

その間にもう初音は入って来てしまった。

「……！！！」

「あれ？ 誰もいませんね？」

……失敗した。

初音はもう……聞いてしまっていた……誤魔化せるか……

『どうしたんだ？ ……忘れものか』

「あ、はい……家の鍵を……って、さっきまで誰と話してたんですか？ お姿が見えませんか？」

『……なんの事だ？』

「なんの事だ、って……さっき誰かと話してたじゃないですか？」

初音は私が誰かと話してたと思いこんでる様子だ………いつつも音が漏れないようにするために窓も閉め切ったままだし………誤魔化せないか……

『……そうか、聞いてしまったのか………』

「ん？ どういう事ですか？」

意外と、早かったな……

「……………こういうことだよ、初音」

「えっ……………」

「あんたが聞いたのは、私の声だ」

私は、順を追っては話し始めた。

「2日前、声が戻ったんだ」

「はあ……………よかったですね、あんまりきれいな声だったので誰かと思っちゃいましたよ……………でもなんですぐ言ってくれなかったんですか？」

「なんでだと思う？」

「わかりませんよ……………誤魔化さないでください」

「悪い……………それはな、初音……………あんたに私の歌を聴かせるためだ」
「……………どういう事ですか？」

だよな、そう思うよな……………でも大切なんだぜ？

「最近……………悩んでるだろ？」

「……………そんな事ないです」

初音……………無駄だよ、あんたは思ってることが顔に出るんだ。

「だからさ……………あんたに音楽の楽しさを改めて教えたいな……………思ってたんだ」

「……………」

「でも……………いきなりは歌えなかった……………だからこっそり訓練してたんだよ」

この2日寝ないでな……………

「……………だけどさ、ばれちゃったからもう隠さない」

「聞いてくれない？ 私の歌を」

私は初音に問いかけた

初音はしばらく無言になった後

「いいんですか？ 私なんかで？」

そう言った。

あいな……………

「あんたじゃなきゃダメなんだよ……………初音」

この世界に来てから初めてできた私の友達。

いきなり誰とも知らない私なんかのために一生懸命になってくれた
あなた。

だから……………

「あんたに聞いてほしいんだ……………」

私は、そう言って初音の手をとった……………

My Secret ……End

岩沢

とりあえず、初音の手をつかんだ私は、病室を出た。

「えっ……どこ行くんですか？」

「……………秘密」

「なんですかそれ!？」

すでに場所は決まっている。

公園だ……あの公園に行く。

あそこは私たちの始まりの場所だ。

あそこで……私は初音に聞いてもらいたい。

私は歩き続ける。

「あれ？ 岩沢さんどこ行くの？」

「散歩だよ、山田さん」

「そう……………え？」

驚いた山田さんを置いて私は病院を出た。

初音

病院から、出て少し歩いたところで、岩沢さんは手を放してくれた。
……………これから、歌を聞かせてくれるらしいが、一体どこに行く

んだろう？

「岩沢さん？ どこに行くの？」

私が改めて聞くと岩沢さんは短く「公園」と答えてくれた。

公園？ …… あっ！

「もしかして始めてあつた所？」

「そうだよ」

「遠くないかな？ ちょっと……」

「でも…… あそこは、初音が私に初めて声をかけてくれた場所だ。だからあそこで聞いてほしいんだ」

そう言われたら、何も言えない。

私に岩沢さんが歌を聞かせてくれる…… 岩沢さんの本当の実力が見れる。

そう思うとどこからか、抑えきれない何かが溢れ出してくるのが私にはわかった。

「わかった……聞かせて。貴女の歌を」

「ああ、見てろ」

岩沢さんはそう言って前を向いて歩きだした。

私もそれに続く。

彼女はどんな歌を私に聞かせてくれるのだろうか？

音無

すっかり遅くなってしまった。

初音……待ってるだろな……一人で。

俺は家路へと急ぐ。

でも、もう前ほどは急いでいない。

なぜか……

それは最近、初音に友達ができたからだ。

名前は岩沢まさみ。

最初に会った時は、なんて皮肉なんだと思った。

彼女は声が出ないと初音は言っていた。

医学大学志望の俺にはわかる。

彼女は失語症ではなく、失声症だった。

『失声症は、主に家庭環境が悪く、多大なストレスを与えられた人間が発症する精神病』

俺にはわかった……

初音は、無意識のうちに同族の彼女を友達にしていたのだ。自分と同じような境遇の彼女に引き寄せられているのだ。

彼女が、来た時なぜ俺と初音しかいなかったか……

彼女はうすうす気づいていたはずだ。

俺たちには、親がないのだ。

小さい時、俺と初音を残して親は消えたのだ……

あれから、初音はあまり笑わなかった……

俺しか世界にいないかのように、友達もつくらず、ずっと俺と一緒にしようとしていた。

でも……

彼女が『初音の世界』に来てから、初音は変わったのだ。
毎日のように彼女と遊び、毎日笑うようになっていた。

彼女は、初音に救われると同時に初音を救っていたのだ……

これから……もっともっと……よくなっていけばいい。

そう、思い歩いていると……

（あれは……）

目に岩沢と歩く初音の姿が映った。

（まったく……）

元気になったとたん夜遊びかよ……

俺はすぐに話しかけることはせず二人の後を追った……

山田

どうして、黙っていかせてしまったのだろう……
それはきつと岩沢さんが「散歩」としゃべったからだ。

彼女は……失声症がいつの間にか治っていたのだ。

彼女は不思議な患者だ。

植物状態から奇跡の復活を遂げたと思ったら、親に逃げられ、わけのわからない友人から巨大な荷物が届いたりして、毎日この学校の制服か分らない制服を着て、ギターを病院で弾きならして、無銭衣食住を要求してくる……………

でも、そんな彼女をなぜか憎めないのだ。

奇跡をおこした彼女は自分の夢に向かって猛然と挑んでいる。

その姿がなぜか……まぶしいのだ。

うるさくてたまらないはずのギターも結局一度も苦情が来ない。

彼女のがんばっている姿は……この病院に希望というものを与えているのかもしれない。

でも……だからと言って、このままにしておくわけにもいかない……

「彼女……どこ行ったのかしら？」

彼女を探さなければ……しかし、どこに？

しばらく考えた私は……

(……………あそこだ！)

一つの場所が頭に浮かんだ。

一度だけ、岩沢さんがうれしそうに話していた。

……………最近よく来る初音ちゃんと出会った場所。

(……………公園だ)

きっと彼女はそこにいる可能性が高いだろう。

私は、院長に許可をもらい、病院を出た。

岩沢

歩き始めて、数十分。

私達はついに公園についた。

「さあ、聴かせてやるよ……………私の歌……………Girls Dead Monsterの歌を……………」

「Girls Dead Monster?」

「私がやってたバンドの名前だよ……………Girls Dead Monster……………略してガルデモってな」

私は作業しながら、さまざまな事を初音に話す。

自分が閉じこもってた日のこと……………ゆりが声をかけてくれたこと……………

…そして彼女たちと別れたこと……………

死後の世界のことはさすがに割愛したが、ほぼ真実を私は話した。

初音

「……………こんなところかな、私の今までの人生ってやつは……………」
「……………やっぱり凄いです、岩沢さん……………」

岩沢さんの過去の話を聞いて、私が思った感想と言えば……………随分と陳腐なものだった。

……………自分の人生にしっかりと向き合っている『ニンゲン』と向き合っていない『モノ』ではこんなにも差が出るのだ……………」

「別に凄くなんかないよ……………私は、逃げて逃げて逃げて……………その先で偶然答えを見つけただけだ……………私は初音と同じ人間さ……………神に見放されて……………それでも抗い続ける人間なんだ……………」

「……………神には……………運命には勝てませんよ……………」

だって私はもう……………負けているのだから……………
その言葉を聞いた岩沢さんは……………なぜか笑った……………」

岩沢

神には……………運命には勝てませんよ……………」

初音の言葉は、私にある光景を思い出させる。
それは、ゆりと私の初めての会話だ。

「はは……………」

「何がおかしいんですか？」

「いや……………今の言葉、ゆりに聞かせてやりたいなと思っただけ……………」

「ゆりって……さっき言ってた、お知り合いの？」

「ああ……なあ、初音」

「………なんでしょう」

「私もな……初めはそう思ってた……でもな、ゆりが言ったんだ」
「そうね……確かに私たちは無力なのかもしれない……でもね、だからってあきらめていい訳じゃない……抗い続ければ、いつかその支配者ぶった大バカ野郎の顔面に一発くらわせてやれるかもしれない……あきらめず、戦い続けられね……」
「ってな、傑作だろ？ あいつは……ゆりはな……神をいつか殴ってやるって……本気で言ってるんだぜ？ 本気で神に……人生に抗っていたんだ……」

本当に……強い奴だよ、あいつは……

「凄いです……その人」

「だろ？ だから、もう少しもうちょっと……あと少しだけ……っらい時に努力するようにすればいいんだ……」

さて……話している内に準備は整った……やるかな……

「さあ、準備は整ったぜ？」

私は初音の方を向いた……

初音

「さあ、準備は整ったぜ？」

岩沢さんが、私の目を見る……

ついに……岩沢さんの全力を見ることができるようだ……

「……お願いします」

さあ、やろつ……そう言つて前を向いた岩沢さんの、目が変わつた。

岩沢さんが、私に何かのスイッチを投げ渡した。

「なんですか？ これ」

「ん？ 見ての通りスイッチだけど？」

「……いや、それはわかりますけど……」

「ああ、曲の始まる時、押してくれない？」

なんでも岩沢さんが言うところによると、これを押すと仲間だったサイドギターさん2人とドラムさんの音が流れるそうだ……

「つて、流れる音に合わせて弾けるんですか？」

「おいおい……何万回弾いたと思つてんだよ……じゃあ、頼むわ……」

「了解です……ポツチつと……」

私はボタンを押した。

最初は……Crows song……

The place I feel like with this
forever... who says it was a
also

If you just say... it is
annoyingly raven feathers wash

ed away , get away !

歌詞が、付くことでこの歌は、音楽に出会って一人で歌い始めたころの曲だとわかった。

(うるさいことだけ言つなら……漆黒の羽根にのまれて消える……)

大人の助言も友のアドバイスも……このころの歩き始めた岩沢さんにとつてはただの雑音でしかなかったのだろう……そして彼女は一度、全てを奪われた……

I 'll be here forever because

I like singing on stage darkness closed in , I will sing
You're tired because you !
You can reach the back . . .
The back light . . . like a
song , a song . . .

……ふと周りを見ると、たくさんの人が、足を止めてこちらを見ていた。

……たしかに、気になるよね……すごくきれいでいい声だもん……

『

! ! !
』

独特の始まりかたをする2曲目の歌はAlchemy……

I want to . . . can live ind

efinitely on living indefinitely
ly all come true

（無限に生きたい……そうできたら、全て叶う）

再び、音楽を始めた岩沢さん。

仲間と出会い、彼女は……満たされていた時の歌……

Looking back and walked wa
y . . . It was also really bad a
t , I'm already tired . . .
Beaming it touches goes . . .
I go on living the way the so
ng was so . . .

そして彼女は、なぜか仲間と別れたのだ……なぜ？

（つて、わあ！　すごい人ばかりです！）

……いつのまにか、私の後ろに……大勢の人が……つて！？　警察
！？

しまった、忘れてた……そりゃこんな遅い時間にゲリラライブなん
てやったら、警察も来る……

私は、岩沢さんに目で合図を送る。

（今のところは引き上げましょう……）

私の合図を受けた岩沢さんはちらりと、警察を見た後……

「……………My song……………」

……歌い始めた……

音無

ついて来て驚いた。

「さあ、始めましょうか……」

彼女……声が戻ってる！
なるほど……完治したのか……

しかし……なにをするつもりだ？

そう思いながら、見守っていた俺の前で、彼女は歌い始めた……

普通の歌とは何かが違う……いつもTVで見るような安い歌手たち
とは比べ物にもならない……

その歌には信念が込められていた。
この歌は、彼女の人生そのものだ。

辛くても、悲しくても……必死に生きてきた彼女の証なのだ……そ
う理解できた。

だからだろう……警察が来た時、俺はとっさに周りの人に「押さえ
ろ！」と言ってしまった。

そして岩沢が最後の歌を歌い始めた……

岩沢

W e l c o m e . . . y o u c r y i n g , y o u
u ' l l c o r r e c t w h a t I h u m a n l o n e
l y
I s a y , d r o p p i n g a t e a r , n o
t a l i e s o b e a u t i f u l . . .
I ' l l g i v e y o u a r e a l w o r d .
. . .

この歌は、私の答えだ。

これを見つけたから、私はあの世界から去る事が出来た……

ゆっくり観客を見まわしながら歌う。

みんなは……茫然とこの歌を聴いていた……私を取り押さえにきた
警官も今はこの歌に聞き入ってくれている。

C o n f i d e n c e a n d s t r e n g t h a n
d f i g h t a g a i n . . . T h i s s o n g . . .
I t s a y s s o m u c h . . . t e a r s
f e l l . . . d i r t y , u g l y i n t h e w o
r l d m e t i n m i r a c l e s . . .
T h a n k s . . .

そうして、私は歌い終わった……

T h e i r f e e l i n g s i n m y h e a r t . . . : E

nd

……………岩沢さんが歌い終わった。

私は茫然と立ち尽くしている……………ダメだ……………この想いを何と表現すればいいのだろう……………

（言葉に……………できない）

それほど、岩沢さんの歌は……………神がかっていた。

どんな歌でも、彼女のの前では劣つてしまっただろう……………そこらへんの歌手では話にならない……………彼女の歌はそんな領域だ。

周りを見ると観客も……………警察官もみんな、固まっていた

（ああ……………みんなも同じ思いなんだな……………）

人間は自分の処理能力を超えたものを見ると、脳がフリーズしてしまうんだ……………

そんな事を考えていると誰かが私の手を引いた……………

「どうした？……………ずらかるぞ」

「えっ……………はい……………」

岩沢さんは私の手を引いて歩きだした。

その後、病院に戻るには気まずいという岩沢さんの意見により、今日は私の家に泊めていくことにした。

「それで……どうだった？」

「えっと………凄すぎて言葉にできません………」

「そうか………そりゃありがとう」

「そうだね………すごかった………」

「ありがとっございます………」

どうやらお兄ちゃんも聞いていたらしい……

「しかしすごいよね………もしかして本業は歌手さん？」

「違いますよそんなものじゃないです………」

そんな風に話をしている内に時間は過ぎ……

「そろそろ初音、眠いです………」

「そうだね………寝ようか？」

「そうですね………」

………私の記憶はここまででした。

A f t e r l i v e …… E n d

「あーあ、こんなところで寝ちゃって……」

少し目を離れた際に初音は寝てしまったようだ……

「ごめんね、岩沢さんすぐに……」

「……………別に大丈夫です……………結構うれしいので」

岩沢さんの膝の上で寝てしまった初音を俺はどけようとしたが、岩沢さんがいいなら……

「じゃあ、もう少し、そのままでもいい？」

「ええ、かまいません……………」

このままにしておくとする……………と、なぜか岩沢さんがまじめな顔をしていた。

「ん？ どうした？」

「あの……………少しお話しませんか？」

「うん？ 俺はいいよ？」

「……………大切な話です」

その表情から、本当に重要な話をするのだとわかった。
俺も表情を正す……………

「今日は、初音さんを遅くまで……………すみませんでした」

「いいよ、初音にはちょうどいいんだ……………あいつはまじめな奴だから……………これくらいの茶目っ気があったほうがいい……………それより、今

日のライブは本当にすごかったね……びっくりしたよ?」

「ありがとうございます……でもまだまだです。もっと上手くならないと……」

「そう……無理しないようにでね?」

「……はい」

「それで本題に入ろうか?」

「……はい」

彼女はもう一度自分の言う事を整理するように少し、黙った。そして顔を上げる。

「あの……私をここに住まわせてくれませんか?」

「……なかなか難しいね、そもそも俺や初音がいいと言ってもご両親がいいと言わないだろう?」

なんだかんだ言っても家族だ。

彼女がどんな経験を積んで何を思ったところで、この関係だけは絶対に崩せるものではないだろう。

「俺達、兄妹はあんたなら大歓迎だよ。でも……君のご両親はなんて言うかな?」

「両親のことなら大丈夫です……もう、いませんから」

我ながら、墓穴を掘ったものだ……彼女は初音と同じだと言ったのは自分なのにな。

「それは……すまん、でも……いいのか?」

「音無さんは……なぜ私が病院で暮らしているか分かります?」

「……それは、失声症だから……だろ?」

「違います。私は……本当は目覚めてすぐに退院できるはずでした。でも……親が……親が逃げたんです。私はもう目覚めないだろうって……そもその原因を作ったのは自分たちのくせに……私の足を引っ張り続けた拳句、私にお金をかけたくなくて……逃げたんですよ！」

……なんだと。

（そんな……なんて親だ。こっちは……一緒にいたくてもいれないのに……ずっと一緒にいたいと初音がどんなに泣いても……一緒に入れないのに！）

それを見捨てて、逃げただと？ ……狂ってやがる……

「………わかった、いいよ」

「ホントですか！？」

「ああ、別にかわいそうとか思ったわけじゃない………って事はわかるよね？」

「はい……これからよろしくお願いします！ ……ユズルさん！」

「ああ、こちらこそよろしく……まさみさん」

分かっているとは思って言うとおこつ……

俺が彼女に感じたのは同情や未練などといった気持ちじゃない。

俺が感じたのは……怒りだ。

この世界に対する怒りだ。

俺は俺たちに対する当てつけに怒りを感じた。

だから……抗ってやろうと思ったんだ……

「………一つ、約束してくれ」

「なんですか？」

「初音と一緒にいてやってくれ」

「はい……喜んで」

……これは、妹が知る事のない俺と彼女の約束の話だ。

P r o m i s e E n d

episode eins Today, I start walking

But . . . I will sing Let me
see . . . destiny . . .

.....夜明けだ。

温かさがある場所で目覚めるのはあの世界以来な気がする.....今日、
私は退院しよう。

そして.....ここで、新たな生活を始めるんだ.....

「.....おはよう、まさみさん.....」

「おはようございます、ユズルさん。.....さんは付けなくていいですよ？ 年下ですから、呼び捨てでもかまわないです.....」

正直、さん付けは、はずかしい.....

「そう.....じゃあ、俺も呼び捨てでいいよ？まさみ？」

「そうですね.....ユズル」

.....って、なんか新婚夫婦みたいなんですけど？

互いにそんな事を思ってしまったのか.....私たちは少し赤くなっていた。

「おはようございます.....岩沢さん、お兄ちゃん」

「おはよう、初音.....今日から、この家に住むことになったから」

さらりと告白してみる.....

初音は寝ぼけ眼をこすりながらも、意味を理解したようで.....

「ふえ……？ ……はい！？ ほ、ほんとうですか！？」

「ああ、まさみは今日から俺たちの家族だよ」

「まさみ！？ ……い、いつのまにそんな親しく……ま、まさか……昨日初音が寝た後……お兄ちゃんと岩沢さんは……ここを二人の愛の巣に！？」

「「なっ！？」」

呼び捨てが変な誤解を招いた！

「違うよ初音！ そう言う意味じゃないから！ ただ、同じ家に住んでるのに苗字は少し変だろ？」

「ああ、そう言う事ですか……安心しました」

「そういうこと……ね？ お兄さん？」

「あれ？ ユズルじゃなくなった訳？」

「ああ、実は恥ずかしいんで……」

すこしさびしそうな顔をする音無……まあ、悪いな。私にも羞恥心というものはあるんだ。

さて……話はこれくらいにするか。

「飯にしようぜ？」

「あっ……はい、そうですね」

「……どっちが家主なんだか……」

………私は歩き始めたのだろっ。

Today, I start walking………End

episode eins final New step (前書き)

とりあえず……一区切り付きました……

これから、繋げるかどうかは……少し考えることにします

皆さんの意見……お願いします

ご飯を食べた後、私は二人と一緒に病院へ向かった。

……さて、病院側……とくに山田さんには何と言おうか？

「あ……山田さん！」

病院に着いてすぐ、私は山田さんを見つけた。
声をかけると……山田さんは

「あ、岩沢さん……退院するのね」

「……」

何か一発で当ててきやりましたけど？

いつから、属性にエスパーがついたんですか？

……話を聞くと山田さんは、昨日のライブを見ていたらしい……それで帰ってこない私がその内、退院するのだろうと思った、と山田さんは話した。

しかもご親切なことに、荷物も大方、まとめてくれてたらしい……もし、私が退院しなかったらどうしたのか……と聞くと、山田さんは少し苦い表情を浮かべ……

「別によかったわよ……実は近いうちに強制退院になる予定だったし……その前に新しい生活が見つかってよかったわね……」

「……私、その内無一文で放り出されるとこだったんですね……」

よかった……住居が見つかって本当によかった……

それから、担当医の先生とも話をした。

……主に病気じゃなくて、料金の話だったが、私は消して譲らず、親負担で話を押し通した。

「……………お願いします。これしか認めませんから」

「……………わかったよ……………絶対、ご両親見つけなきゃね……………絶対に」

ごめん先生……………

私は、青い顔して「とばされる……………このままじゃ、とばされる……………」と呟く先生を背に病室を後にした。

「あ、まさみ？ 荷物積み終わったよ！」

病院の外に出ると、トラックに私の荷物がすでに積んであり、脇で音無と初音と何人かの知らない人たちがコーラ片手に話し込んでいた。

「すみません……………迷惑をかけてしまつて」

「いえいえ、初音は全然平気ですよ？」

「別にたいした量じゃなかったし……………岡崎たちが手伝ってくれたから」

「岡崎？」

「ああ、学校の友達」

そう言つて音無が知らない人たちの自己紹介を始めたのだが……………なんだか見てくれが悪いというか……………やさぐれているというのか……………そんな友達が多いんだが……………

音無の話によると、金髪の頭悪そうなのが、春原陽平。隣にいる目付きは悪いが顔をはそこそこ整つていて、頭の悪い女子に受けそう

なのが、岡崎朋也。その岡崎の隣で笑っている線の細い気の弱そうな少女が

古河渚……って、おい大丈夫か？ いいのかこんな悪そうな二人と一緒にいて……そして最後に煙草をくわえたやさぐれあんちゃん風な男が古河秋生……渚さんのお兄さんだろうか？

「すみません皆さんにもご迷惑をおかけしてしまつて……」

「何……いいつてことよ……小僧の友は俺の友、つまりお客様だからよ」

「何言つてんだ？ おっさん……」

「それよりさ……キミ、かわいいよね？ どう？ これから、僕とさ……何か食べにいかない？」

「……いいえ、結構です」

……何か、一筋縄ではいかなそうな人達だ……この春原は馬鹿らしいが……

ちよつと露骨に顔に出てしまったのだろう、女の人……渚さんが話しかけてくれた。

「ごめんなさい……えつと……」

「岩沢です」

「岩沢さん……春原さんは悪い人ではないんです……その、ちよつと頭が弱いだけで……」

「地味にヒドイこと言うよね！？ 渚ちゃん」

「あ！？ てめえ……このキンピカ小僧……俺の娘がひどいだと？」「ひiiiiiiiiい！」「ご、ごめんなさい！」

む、娘つて……

このやさぐれあんちゃん2号（1号は藤巻）は保護者？ ……しかも渚さんの？

不覚な事にその疑問が顔に出てしまったらしい。
渚さんは……

「まあ、始めての人にはよく言われます……気にしなくても結構です」

「あ、ありがとうございます……すみません」

何か、さっきから、ありがとうとか、すみませんとか言っただけだ。ばかりだ……

その後、私は岡崎軍団（なんかもう集団。岡崎本人とはしゃべってないけど）に音無家……今日から、私が住む家に送ってもらい、引越し作業を手伝ってもらった。

さすがに悪ぶってるだけあって、みんな体力には自信があるらしく、作業は昼前には終わってしまった。

「じゃあ、俺たちはいくぜ……また呼びな岩沢の姉ちゃん？」

「はい……その内お礼に行きます。今日はありがとうございました
渚さんのお父さん」

「お父さん……いい響きだぜ……」

「何言ってるんだ？ おっさん……」

「てめえも見習えって事だよ！ 小僧」

「言ってるないだろ……」

そうして、岡崎軍団は去って行った……

「はあ……なんか疲れる人たちですね」

「そう？ ……まあ、最初はそうかもしれないけど、いい奴らだったでしょ？」

「そうですか……」

「初音もあまり……得意ではないかもしれません」

「初音まで？」

「……だって、あの人たちとなると初音は薄くなってしまうから……」

「……」

「何か言ってくださいよ！？ 岩沢さん、おにいちゃん！？」

悪い……初音、何とも言えないぞ……それに関しては……

そして、夜。

音無家の食卓で……

「さて、それでは……岩沢まさみさん……我が家へようこそ」

「ようこそ！」

「ありがとうございます……これから、よろしくお願いします」

私は音無兄妹に迎えられ、この家で暮らし始めた……

これは、出発になるのだろうか？

……それはまだ、わからない……でも。

これだけは……言える。

これが……この光景が……笑い合う人たちと食卓を囲む光景が、私
がこの世界に戻って来て始めて掴んだものだということだ……
戦いはこれからだ……

私はもっと多くのものを掴んでみせる……

New
step
⋮
End

ゆりへ

そっちの世界はどうだ？

ガルデモはちゃんとやってるか？

私なら大丈夫だ……神への復讐、任せたぜ……

岩沢

（おかしい……）

どう考えても、おかしい。

なぜ、死んだ後の世界に手紙が届く？

なぜ、彼女は転生後も同じ人生を歩み続けられる？

天使が嘘を付いているとは思えない……彼女は嘘を付けないだろうから。

ならば、導ける答えは一つ。

（この世界にはカラクリが存在する）

不老不死でいられ、土くれから武器を生み出せるカラクリ……

それを探る必要がある……・

『はい、なんでしょう?』

『遊佐? ちょっと私の部屋に来てくれる?』

私は動き始めた。

W h y i s s h e t h e r e ? E n d

この世界に神はいない……なら僕が神になろう。
この腐った世界を僕が癒そう……

「直井くん……この書類お願い」
「はい、わかりました会長」

普段僕は、会長と一緒に生徒会で活動している……正直、あんな人間もどき（ゆり達が言う所のNPC）の為に僕が働く理由は無いのだが、仕方ない……

なんせ、今の僕はNPCの生徒会副会長なのだ……

偽装は完璧だ……普段ちゃんと授業に出て、テストでも全教科90点以上（当たり前だ……何年も同じテスト受けていれば、そりや暗記できる）誰にでも親切で365日ほぼ、同じ言動と行動しかない。

しかも、会長こと天使様は、現在SSSとか言う奴らの相手で精一杯だ。

これほどの幸運……やはり神に相応しいのは僕だ。

……Angel Player。

会長が使っているソフトのダミー……コイツさえあれば、若干性能は落ちるが、会長と同じ力を得ることができる……

催眠術と地下牢獄……準備は整った……

さあ、後はSSS……あいつらが馬鹿をするだけでいい……

それで、全てが変わる……

僕が、神になる！

I was young back then
……End

episode zwei You Never surprise people

第二期始動です

これからもどうぞお楽しみください

朝、目が覚めると同時に頭が痛くなった。

「……………なんですか？ これ……………」

それは、私の目の前に高く積み上げられていた…………

現文、古文、数学1、数学A、理科、現社、保体、家庭、情報…………

「見てわからない？」

「わからないですか？」

いや……………そんな不思議そうな顔すんなよ……………

それは、参考書の山だった。

先ほどあげた教科の参考書が一教科につき平均5冊くらい積み上げられている……………

「正直……………わかんないんですけど……………お兄さん？」

「まさみには……………学校に通ってもらおう」

「Why? I do not know the meaning? (なぜ？ 意味がわからないんだけど?)」

「That's, I know you promised?

I stay with me the other day at night Miku? (それはね、約束しただろ？ こな

いだの夜に初音と一緒にいてくれって?)」

「……………」

あの約束って、一緒に学校に通えって事かよ！

「A p a r t f r o m m e , I ' m n o t m y b r o
t h e r t o g o t o s c h o o l ? (別に私、学校に
行く必要無いんだけどお兄ちゃん?)」

「T o b e s u r e . . . g r e a t E n g l i s h .
. . . I r e a l l y m i n d ? (確かにね……凄い英語力

……実は頭いいの?)」

「N o , n o . . . (いえいえ……)」

「あの……さつきから何を話しているんですか？ 二人とも……初
音にわかるように話してください！」

………初音、お前………兄はこんな頭いいのに………不便なやつ。

「三苦？ 但我？怎麼？？兄弟？ (初音はああ言ってますけど、
どうします？ お兄ちゃん?)」

「這令人感到驚訝 . . . 我已經習慣了中國 . . . (本当に凄
いね………中国語まで使えるんだ………)」

「さらにわかりにくくなった!？」

驚く初音………まあ、悪いが私は人より勉強できたからな………

………真実を言うなら、音楽に出会う前は勉強とバイト以外やる事が
なかったからだが。

「 ,

. . .

, . . . (まあ、前の学校も事実

上クビになっちゃいましたからね……わかりました勉強します……」

「

……

？
)

そう……じゃあ再受験でことでもいいのかな？」

「……？（できるんですか？）」

「

……

Tsute（ああ、大丈夫……ツテはあるから……）」

「……（じゃあ、お願いします）」

「それじゃあ、朝ごはんにしようか……」

「はい……おい、初音どうした？ ご飯だぞ？」

「はっ……初音は何を……」

どうやら、朝から限界を超えちゃったらしいな……

「飯だぞ？」

「は、はい準備しましょう！」

すぐに復活したかな。

その後、飯を食ってる時。

「ああ、そうだまさみ？」

「なんですか、お兄ちゃん？」

「そのまさみって止めませんか？ 初音何かおかしくなりそうです……」

「今日、俺達と一緒に学校に行ってもらってから」

「……何ですか？」

「学校見学、今日しか時間ないんだって……」

……正直、行くかどうか迷った。
でも……

「わかりました」

「やったー！！ まさみちゃんと学校ですう！」

初音……その目は反則だ……

そんな理由で私は今日、学校に行くことになりました。

You Never surprise people?
nd ……E

episode zwei (Dead World Front) (前書き)

前回3番目に使ったのはロシア語です

音無は設定上、勉強が出来なくてはいけないので……

ついでにこれからもクラナドは登場します

keyキャラクターは物語上、重要な役割を担っているので外せないんです

ご了承ください

では、姫龍の群像劇、引き続きお楽しみください

episode zwei (Dead World Front)

「じゃあ、後でね……生徒会長が玄関で待ってるはずだから」

「わかりました……10時ですね、しっかり行きますから……」

「残念です……初音、せっかくまさみさんと一緒に学校に行けると
思ってたんですが……」

「大丈夫だよ、学校で会えるかどうか掛け合ってみるから……」

「じゃあ、行つてらっしゃい」

「行つてきます!」「S i z d e m ? k !」

「何語!?!」

私と初音のツツコミが玄関に響いた……やるな……音無。

二人を見送った後、食器を洗い、洗濯物を干して……シャワーを浴
びる。

「さて、どの制服を着ようか……」

前の学校の制服とSSS制服……私は少し迷ったが、SSS制服に
袖を通した。

やはり、新しい学校には「希望」というものを背負っていきたい……

(よし……準備完了)

玄関に鍵をかけたのを確認し、私は家を出た。

さて……新たな学校とは一体どんな所だろう……楽しみだ。

D e a d W o r l d F r o n t E n d

Another episode Okazaki } Will this

今回からクラナドキャラ本格参戦です

賛否両論あると思います

感想待ってます

この町はキライだ……

忘れたい思い出が染み付いた町だから。

……この町は嫌いだ。

「あ、おはようございます生徒会長さん!!」

「おはよう」

「岡崎、今日書類持っていくから」

「ああ、持ってこい……」

「岡崎……」

「誰か助けてくれ!! 春原だー!!」

「僕の扱い酷くないですか!？」

なぜなら俺は生徒会長だからだ……

はじめは、ほんの冗談だった。

春原と一緒に冷やかして生徒会長選挙に出たのだ。

結果は予想通り、惨敗………となるはずだったのだが……

「しかし意外だよねー、岡崎がまさか生徒会長になっちゃうなんて

……」

「まったくだ」

「しかも『生徒会長になったからには無断欠席や遅刻は絶対ダメだ』

……って、副会長の女の子が朝家に起こしに来てくれるんでしょ?

はたして、それが幸か不幸か……うらやましい」

「不幸だよ……親父には誤解されるし、同棲疑惑は湧き上がるし……

…一体どんな嫌がらせだ」

「でもさ、その子かなり美少女じゃん！」

「めっちゃ、強いけどな……」

「ウソだろ？」

「一回部屋に鍵をかけたなら、親父の許可を取ったと言って、ドアをぶち破りやがったんだ……」

「……大変だな」

「ああ、まったく……じゃあな」

「どこ行くだよ？ 教室こっちだぜ？」

「今日は、生徒会長として接待の仕事だ」

「ああ……ご苦労だね」

「じゃあな」

俺は春原と別れて生徒会室に向かった。

一応、生徒会の仕事はまじめにやっている。

成績も、内申も生徒会長になってからは悪くはない。（というより、悪くさせてくれない）

これはこれで悪くないかもな、将来的に……そう思っている自分もいた。

バスケットを無くしてから、無気力だった俺は悪ふざけから始めたこの大役を見事こなせるだろうか？

そんな事を考えながら、部屋の戸をあけた。

「おはよう、生徒会長……今日はずいぶん粹なマネをしてくれたな」
「な……なんの事かな」

中には生徒会副会長、坂上智代様が全身から悪鬼の如きオーラを出しながら鎮座しておられた。

「とぼけるのか……自分の部屋と親父さんの部屋を入れ替えただろ……」

「き、記憶にないな……」

「ならば、思い出させてやろう……今日の朝、お前がまた部屋に鍵をかけていると思った私はリビングにあつた『智也君が寝ていたら起こしてあげてください坂上さん』と書かれた置き手紙に従い、扉を蹴り破った……そしたら、中で寝ていたのはお前の親父さんで……私は見られる前に気絶させて、お前よりも早く登校してここでお前を待っていたという訳だ……どうだ岡崎？ 私の話の感想は？」

「不法侵入して器物破損の拳句、暴行に脅喝か……ダメじゃね？」

俺は正直に感想を告げてやると……智代はさらに怒る……

「……殺す」

「残念だけどな、今回そりゃ無理だ」

「なぜだ？」

「俺は今日、編入希望のある少女の学校案内をしなきゃならないんだよ……だから、今気絶すると学校が困る」

「くっ……卑怯だぞ」

悔しがる智代……まあ、普段さんざんやられてるからな、これくらいは許されるだろ

「今回は見逃してやる……そのかわり学校案内しくじるなよ」

「ああ、任せとけ」

「そうだな、信じてやる」

そう言つて、智代は生徒会を後にした。
……今回は生き延びてやったぜ。

「さて……確か来るのは10時だったか……」

後、1時間半つて所か……

「何して過ごそうかな……」

正直ヒマだ。

でも、授業には出たくないしな……しかたないな。

（寝るか……）

俺は寝た。

「……………ん」

時計を確認すると9時55分。

「そろそろだな……」

我ながらグットタイミング。

俺は、玄関に向かった。

校門前には紅色の綺麗な髪をした少女が立っていた。

Will this change anything?
……E

nd

その学校は、坂の上にあった。
電車で30分揺られ、言われた通りの道を歩く。
なぜか死ぬ前の事を思い出す……

あの頃は、毎日学校に行くのが苦痛で仕方がなかった。
別に友達がいなかった訳じゃないし、勉強ができなかった訳でもない。

ただ、生きるのが苦痛だったただけだ。
目的もなく希望も持てずただ諸々と生きていたあの日。

あの日から……私は歩き出しているのだろうか？

校門の前に着いた……

音無が言うには生徒会長とやらが出迎えてくれるらしいが、まだ姿はない。

まあ、生徒会長も授業があったりと忙しいだろう……少し待つか。

五分くらい待っただろうか？

「すいません！ お待たせしました！」

「あっ……いえ全然そんな事ないで………すよ？」

「どうかしましたか………って、あっ………」

走ってきた生徒会長はこの間、引越しの時、手伝ってもらった……

「岡崎さん？」

「ああ、そうだ……じゃねえ、そうです、生徒会長の岡崎朋也です」
「生徒会長だったんですか……」

びつくりだ……この容姿で生徒会長……世の中は広いな。

「驚きました、まさか生徒会長とは」

「俺も驚いたよ、この間手伝った……えっと」

「ああ、岩沢です」

「悪いな、まさか岩沢だとは思わなかったよ、何転校でもしてくんの？」

「ええ、まあ……そんなところです」

実際は約束を守るためであって、正直学校なんかどうでもいいのだが。

「やめとけ、ろくな奴がいねえぞ？ この学校……大体、俺が生徒会長やつてる時点で予想つくだろ？」

「確かにそうですね……岡崎さん見た目より優しそうですし、学校も特に落書きあるわけじゃないし、まあ……大丈夫かなって……それより岡崎さん私が知人と分かったとたん、敬語じゃなくなりましたね……気にしませんけど」

「普段、散々無理させられてるからな……まあ、学校案内はちゃんとするからさ、じゃあついて来い」

そんな適当生徒会長、岡崎に連れられ、私は学校を見学することになった。

外見もそうだが校舎の中も目立った傷や破損はなかった。

しかし……

「なんでこの校舎、所々人型に凹んでるんですか？ 怖いんですけど……」

「ああ、それは春原が飛ばされたり、めり込んだりした後だから気にするな」

「春原さんって……あの馬鹿そうな金髪の健康低能児さん？」

「ああ」

ああって、随分簡単に肯定するな、この人……

「岡崎さんって自分の友達が馬鹿にされてもなんとも思わない人ですか？」

「友達……ああ、一応俺の友達と……本人は信じてるからな、あまり蔑まないでやってくれ……喜んじまうから」

「……そうですか」

まあ、友情の形って人それぞれだよ……

そう思った私と岡崎が校舎を歩いていると何処からか「筋肉筋肉！」という声がした。

「………なんですか？ 今の声」

「この学校の名物『革命キンニクンの咆哮』だ。聞くと筋肉の量が5%アップするらしい」

「意味分かんないんですけど……」

「噂なんてそんなもんだ」

なぜか受け流されたんだが、いいか……どこの学校にも一人いるよな……そんな奴
学校見学は続く。

途中、チャイムが鳴った。

どうやら休み時間のようだ。

教室から生徒達がわらわらと出てくる。

彼らは私と岡崎を興味深そうに見てきた……正直あまりいい気はしない。

「会長！ 誰ですかその人？」

「まさか……彼女ですか？」

「一体、なんまたかけるんですか？ 会長」

「うるせえな……お前ら、学校見学者が見てるんだぞ？ しつかりしやがれ……そして俺はそんなダメ人間じゃねえよ」

「えっ……そうだったんですか？」

「ああ、当たり前だ……って、岩沢お前まで言うか？」

「すいません、つい……」

……どうやら、岡崎は随分、生徒から好かれているらしい……これは実力とかそういうのじゃなくて、人望だな。

かつてゆりがそうだったようにこの少年には一種のカリスマがあるらしい。

うらやましい事だ……

「あー、うぜーぞ！ お前ら！ さっさと戻れ！」

本人はあまりうれしくないようだが……

こつした事を2、3度挟みつつ、私は学校見学を終えた。

その夜、我が家にて……

「どうだった？ なかなか面白い学校だろ？」

「ああ、なかなか面白かったよ」

「残念です、学校ではまさみちゃんに会えませんでした……」

「気にするな初音、学校に通い始めたらいつも一緒だ」

「本当ですか？」

「ああ、本当だ」

岡崎に初音と同じクラスがいいと言ったら、軽くオーケーしてもらったのだ……うれしいがそれでいいのか？ 生徒会長？

「やったー絶対……絶対ですよ？」

「ああ、わかったよ……」

……初音は笑ってくれたのでいいとするか。

「じゃあ、飯食ったら勉強してその後、ギター練習しような」

「はい！」

私達二人は音無の注意する声を無視してご飯をかき込んだ……

Element of surprise …… End

かつて銀髪の魔女と呼ばれていた。

全てがどうでもよくて、何もかも……世界の全てが気にくわなくて、何も考えず拳を振るっていたあの時から、私は変わっただろうか？ いや……変わらなければならない。だって今の私には全てを失っても叶えたい願いがあるのだから……

きっかけは同級生に聞いたある噂からだった。

「ねえ副会長、知ってる？ 最近編入してきた人の話んだけど」

「いや、よくは知らないが……何かあったのか？」

「それがね……」

なんでもその編入生、岩沢まさは随分といろんな噂があるらしい。

編入時のテストが全科目100点だったとか体育の時間に全ての種目で陸上部以上の記録を出したなど、よく聞く勉強、運動共に凄い万能人間だ、などという『良い噂』から、三年生の男子と同棲している、夜中にストリートライブをやっているなどという『悪い噂』まで、実にさまざまな噂が流れているらしい。

「別にだからどうしたいって訳じゃないんだけどね……一応さ、真実だったら困るじゃん？ なんか最近その子三年生グループに目つけられてるみたいだし……」

「わかった、調べてみよう……感謝する」

「ごめんね」

このままでは、たとえ噂が嘘でも三年生に目をつけられるかもしれない……

それはあまりその子にとっても良くない事だろう。

そんな理由もあり、私　坂上智代はしばらくの間、岩沢まさを監視することにした。

「おい、初音いくぞ」

「待ってくださいまさみちゃん！」

彼女　岩沢の噂の一つに『三年生の男子と同棲している』という噂があったが……どうやらこれは真実だったようだ。

しかも、その同棲中の相手は同じ生徒会役員の音無ユズルだった……まあ、妹も一緒に住んでるし、二人きりで同棲という訳じゃないのだろうが……はたしてこれは許されるのだろうか？

後日生徒会でこの話を議題にあげてみると音無ユズルは「学校と役所から既に許可はもらっている」と言っていたので、これはオーケーだったらしい。

次の勉強&運動万能伝説については、別に悪いことではないが、個人的に気になったので調べた。

結果は……噂どりの万能ぶりだった。

……予想以上だ、7カ国語も使える高校生がこの世にいうとは……私もまだまだだな。

以上が岩沢を監視した結果なのだが、とくに悪いところもなく彼女は別に問題なしというのが結論だ。ストリートライブについてはこ

れはあくまで個人の趣味なので私は調べはしなかったのだが……せめて忠告はしておくべきだったのかもしれない「最近、目をつけられてるから気をつけろ」と……

それが起こった時にはもう遅かったのだが……

Silver-haired witch ……End

episode zwei Guerrilla Live

学校に通いはじめて一週間がたった。

……正直、学校というのは退屈だ。

なぜ、みんなこんな巨大な立方体の中で寿司詰めにされて過ごせるのだろう？

というか、死ぬ前の私はよく、こんな箱の中で過ごせたものだ。

……誰も気づいていない。

私たちの人生はこんな箱の中で紙きれに名前を書き殴ってるだけで決まるようなものじゃない。

迷って探して悩みぬいて、始めて答えが得られるのだ。

こんな所にいるのは、ハッキリ言って時間の無駄だ。

私は初音にばれない様に教室を抜け出した。

授業をボイコットした私は、一人緑溢れる中庭をぶらぶら散歩中だ。

「いい天気だな……寝ながら歌でも考えるか」

どこかでチャイムが鳴ったが私は気にしない。

大体、こんな天気の良い日に暑苦しい教室という密閉空間で数学教師の長話を一時間聞くとか、正気の沙汰とは思えない。

「数学が人生の役に立つ時なんて、釣り銭数えるか家計簿つける時だけだろが……」

あんなもの聞いただけ人生の無駄だ……生涯をかけて最終定理解きたい人とかだけ頑張って勉強すればいい。

私はとりあえず木漏れ日を浴びながら新曲でも考えることにしよう。そう思い、適当な木に腰かけようとした時……

(……………ん)

ふと、私は違和感を感じた。

なぜか誰かに見られている気がしたのだ。

(……………これは、アレだな……初めて椎名に会った時みたいだ)

椎名というのは死んだ世界にいた時の知り合いでいつも忍者の格好をしていた少女の事だ。

詳しい説明は省くがかなり現代から離れた忍者っ子だったと説明しておこう。

そんな彼女から聞いたのだが『誰かに見られていると思ったら、後ろを見る前に視線と反対の方を見るがいい。素人なら無理だろうが達人などは自分の立つ反対の方向から殺気を送る事が可能だ。聞いていて損はないだろ』そう言っていたのを思い出したのだ。

正直、半信半疑だったが言われたとおりに視線とは反対の方向を見してみる。

(……………椎名、お前凄え奴だったんだな)

……………本当に人がいた。

背が高い女子生徒が木の陰に立っていた。

「……………驚いたな、見破られたのは初めてだよ」
「そう……………そりゃ残念だったね。で……………何か用？」
「いや、そう言う訳じゃない。ただ、こんな所まで見に来る物好き教師もいたのだな……………」
「と思ってな、少しからかってやろうと思っただが、そしたら君が歩いてきたという訳さ、一年の岩沢まさみ女史」

女史って……………なかなか珍しい言い回しをする人だな……………
ただ、あやしき爆発なんだが？

「名前まで覚えてもらってるとは光栄だね。あんた……………名前は？」
「二年の来ヶ谷唯湖だ……………別に覚えてもらわなくても結構だが」

……………そんな事言われると余計覚えるのだが。
しかし二年生か……………見えないな、三年生かと思った。

「それで、来ヶ谷先輩はなんでこんな所にいるんですか？」
「君と一緒にサボっているだけさ……………どうだ？　これからお茶にしようと思ってるんだが、一緒にいかがかね？」

「いや……………わるいんですけど」
「なに、遠慮は無用だ。来たまえ」

それだけ言うとか来ヶ谷先輩は私に背を向け歩きだした。
少し考えたが、結局ごちそうになるうという考えに行きついた私は彼女の後を追った。

彼女を追ってさらに奥にきた私は丁度よく木漏れ日が当たるテーブルセットを見つけた。

「さあ、座りたまえ」

「よく、作りましたね。こんなもの……結構サボるんですか？」

「まあな」

彼女に勧められるままに私はイスに腰掛ける。

「さて、紅茶は何かいい？ 結構種類はあるが？」

「あんまり紅茶には詳しくないので、先輩のお勧めをお願いします」

「了解だ」

彼女は慣れた手つきで紅茶を入れていく。

「さあ、飲みたまえ私のお勧めだ」

「ありがとうございます。いただきます」

差し出された紅茶に口をつける。

ちょうどいい甘さと熱さが口の中に広がった。

「……………おいしいです」

自然と顔がほころぶ。

「そうか、それは光栄だ」

彼女も少しうれしそうに紅茶を口に運んだ。

それからしばらく、彼女とおしゃべりを楽しんだ。

「へー、じゃあもう先輩は卒業分の単位は揃えたんですか？」

「ああ、あの愚かな数学教師に感謝しないといけないな……ありがたき事だ。そういう君も結構余裕だな、自分の頭脳に中々自信があるようだ？」

「ええまあ……そんなたいしたモノではないですけど……高校程度なら余裕ですね」

「……君も中々、癖がある人間なのだ」

「何か言いました？」

「いいや……そのクッキーはどうだ？ 私のお勧めなんだが……」

「凄くおいしいです…… Kukkipakupaku」

「君も好きなんだな、Sesame Street……」

そしていつのまにか話は私がバンドをしている話になった。

「意外だな……君のような可憐な少女が髪を振り乱して歌う姿はあまり想像できないが？」

「可憐と言われたのは初めてですけど……そうですか？ 私そんなキャラに見えませんか？」

「実際歌う姿を見ないと……さすがに信じられん」

そうか……バンドやってるようには見えないか……

彼女の言葉が意外と胸に来た……見えないか……

「じゃあ、ゲリラライブいきますか？」

気づくと私はそんな事を言っていた。

「……なに？」

「だから、ゲリラライブです。放課後、みんなが下校しようとしている時にギターかき鳴らしてやりますよ」

「……意外と直情思考なんだな」

彼女は少し啞然とした後、少々意外そうな顔をして私を見た。
そんな彼女に私は言う。

「なに、他人事みたいに言ってるんですか？」

「いや……実際、他人事なんだが？」

「はは……先輩、嘘ついちゃいけませんよ？ 指を見ればわかりますから……先輩はギター弾けますよね？」

少しの間彼女は沈黙する……そして折れた。

「……少しは……な、だが人に聞かせられるようなレベルじゃないよ」

「大丈夫です……弾けってことじゃありませんから」

「……どういう事だ？」

「だから……何にも知らない素人に聞いてもらうよりは私のレベルが伝わりやすいよな……って話です」

「……そう言う事が……まあ、手伝うくらいなら私も協力するが？」

「先輩は話が早くて助かります……じゃあ……」

それから、しばらく打ち合わせをした後、私は彼女と別れた。

教室にて

「あー！ まさみちゃん！ 何で授業サボったんですか！」

「悪いな、初音……ちよつと気分が悪くてな……」

「そ、そうなんですか？ ……じゃあ、仕方ないですね」

「ウソだけだな……」

「はい？」

「いや……なんでもないそれよりさ………」

私は初音から生徒が一番多く帰る時間帯を聞いた。

そして……放課後。

「本当にやるのか？」

「ええ、なんですか？ 先輩、実は臆病ですか？」

「馬鹿な事を言うな………私は後輩の未来を案じているからここに
いるんだ」

「じゃあ、最後まで見ててください」

そう言つて、私はギターを一度、鳴らす。

みんなが突然響いた音に驚いてこつちを見た。

じゃあ……始めようか。

私は歌い始めた。

C o m e o n ! H e s i t a t i o n R u n ! B
e l i e v e i n y o u r s e l f , y o u u n l e a s
h a s t r o n g i n t i m a t e d r e a m s !
P e n e t r a t e t h e w h o l e , s p r e a
d s a c r o s s t h e l i g h t . . . i s c e r
t a i n l y a d i f f e r e n t w o r l d
S o j u m p K o e r o ! R u n t h r o u g h
t h e c r i t i c a l s p i r i t b u r n i n g !

今日歌うのは新曲だ。

この世界に来てから作った曲。
走り出した私の未来を歌ってやった。

演奏が終わる。

少しの間生徒たちは茫然としていたが1人……また1人と拍手をしてくれて、最後にはその場にいた全員が拍手をしてくれた。

ただ……残念だ。

私にそれを聞いている暇はない……風紀委員が走って来ているのが見えた。

早々に立ち去らなければ……

私は茫然としていた来ヶ谷を捕まえてその場から走りさった。

「……で、どうでしたか？」

「……素晴らしかった……あんな演奏を聞くのは久しぶりだ……君の実力は本物のようだな」

「それはどうも……先輩にそう言ってもらえるとうれしいです」

「……来ヶ谷だ」

「……はい？」

「来ヶ谷と呼んでくれ。キミにはその権利がある。呼び捨てで構わない……私は来ヶ谷だ」

「……どうやら、予想以上に感動してくれたらしい。

先輩から呼び捨て許可を貰ってしまった。

「じゃあ……来ヶ谷、私も岩沢と呼んでくれ」

「ああ、わかった……岩沢、キミの演奏は私の胸を打った私も君に何か恩返しをしなければな」

「いや……別に私はいいよ？」

恩を着せるために歌ったわけじゃないしな。
私が遠慮していると……

「いた！ その二人、止まりなさい！」

突然そんな声があたりに響いた。

「その生徒、あなたを校則違反の現行犯で拘束します」

現れたのは長いクリムゾンレットの髪をなびかせた一人の女子生徒。

彼女の腕には髪の色と同じ腕章が掲げられていた。

そこに書いてあるのは黒で書かれた『風紀委員』の4文字。

……どうやら私は、風紀委員に見つかってしまったようだった。

G u e r r i l l a L i v e …… E n d

e p i s o d e z w e i } V i c e P r e s i d e n t o f c h a r

最近、調子悪いです……

「その生徒、あなたを校則違反の容疑で拘束します」

その風紀委員はそんな事を言った。

「おいおい、拘束って……大袈裟だろ」

「大袈裟じゃないぞ……」

以外にも私の言う事に異論をはさんだのは来ヶ谷だった。

「……どういう事？」

「彼女は、そのくらいの権限を学校から与えられているという事さ

……そうだろ？ 風紀委員長？」

「ええ、その通りよ来ヶ谷さん」

……って、この子が風紀委員長！？

以外……確かに真面目そうだけど……

「あー、ごめんなさい……あの、私その……最近編入してきたばかりでそういう事よく知らなくて……」

「いい訳は結構です。話しは反省室で聞きます」

おいおい、問答無用かよ……

さすがにそれはないだろ……

「あの……ごめんなさい、次はもうしませんから……見逃してくれ

「ません？」

「ダメです。次があると思ってるんですか？」

「……ダメみたいだな。」

「……来ヶ谷」

「なんだ」

「……逃げていいか？」

「……奇遇だな、私もそう考えていたところだ」

「……逃げれるとでも？」

「「……無理か……」」

今回はダメらしい……私は来ヶ谷と一緒に反省室に連れていかれた。

二時間後……さんざん詰問された挙句、なぜか牛丼を差し出されたりなんかもして、私達はやっと解放された。部屋を出ると……来ヶ谷が話しかけてきた。

「災難だったな……まあ、私は完全に無罪だったが」

「ズルイよ……来ヶ谷、まったくフォローしてくれないし、私は怒鳴られっ放しだったよ」

「まあ、中々めずらしい体験ができて良かったじゃないか……次、捕まらない様にすればいい」

「簡単に言っとなよ……まあ、次もやるけどさ」

「……私はジョークを交えつつの反省を促したはずなのだがな……」

「無駄だって事は分かってんでしょ？」

「まあな……短い時間だがキミの性格はよく理解したからな」

「そんなこと………って、あ………」

「どうした………そう言う事か」

私と来ヶ谷は二人揃って押し黙った。

目の前には……音無が仁王立ちしていた。

「まったく……何を考えてるんだまさみも来ヶ谷も！」

「ごめんなさい」「うむ、今回はお姉さんに非があったかもしれない」

「特に来ヶ谷……お前は生徒会役員だろうが！ 恥ずかしいだろ、

また……智代に怒られるぞ」

「うむ……智代君はなかなか可愛いが怒ると手が付けられないからな………わかった反省することにするよ」

「まさみは後で……初音に怒ってもらうから」

「それは……勘弁してくれないかな？」

「それじゃ、罰にならないだろ」

マジですか……初音の説教は長いんだよね……

「しかし、音無君……キミは岩沢とずいぶんと親しいようだな？」

大体の説教が終わった時、ふと来ヶ谷がそんな事を聞いてきた。

「はっ？ まあ……一応、同居人だからな」

「そうか………同居中か、生徒会役員が女性と同居………」

「おいっ！ 勘違いするなよ、二人でじゃないぞ？ 妹も一緒だからな？」

「なるほど………家族公認か………」

「いや、違っって………」

なんだかだんだん来ヶ谷のペースになってきた。
もしかしたら押し通せるかもしれない。
がんばれ来ヶ谷！

私は心の中で応援をしたが……

「そこまでだ……来ヶ谷、まったく君という奴は……」
「……………智代君か」

残念ながら、音無側に応援が来てしまったようだ。

「だれだ？」

私は来ヶ谷に尋ねる

「生徒会副会長さ……………名前は坂上智代」
「そうだ、副会長の坂上智代だ」
「はあ……………」
「まったく、岩沢君キミは……………監視を解いた次の日に問題を起こす
とは……………」

……………監視を解いた次の日？

「私、監視されてたの？」
「ああ、最近キミの周りでいい噂を聞かないのでな……………悪いとは思
ったつが少し監視させてもらった」
「……………私ってそんな問題児なわけ？」
「いや……………あくまで噂だったから私本人としては信じてなかったが
……………噂とは時に真実を呼ぶからな」
「そうですか……………」

さつきも思ったがこの学校の役員とか委員会って積極的だよな……

「今回の事は反省してます。次は……極力やりません」

「それは……反省してるのか？ まあ、いい今日はもう遅いしな、だが、次はちゃんと許可をとれ……生徒会長いや……朋也ならすぐオーケーを出してくれるさ。……それじゃあこの話はこれで終わるだ……音無」

「……なんだ？」

「来ヶ谷言い負かされてるな……副会長の名が泣くぞ、大体、来ヶ谷に言い負かされるようじゃ、こいつらのリーダーを制御なんてできないんだからな」

「ああ、善処するよ……」

「それと来ヶ谷」

こっそり逃げようとしていた来ヶ谷が呼び止められてビク！と震えた。

「………何かな、智代君」

「お前は生徒会室に來い。説教だ」

「………分かった、お姉さん反省するよ」

来ヶ谷も大人しく捕まった………なんか格好悪いぞ。

「それではな」

来ヶ谷の手を引いて副会長は去っていった。
後に残されたのは私と音無だけ……

「………何と云うか、嵐のような人だな………それでいてうるさいとは思わない」

「ああ、あれが彼女の持ち味なんだ。一方的な言いかただが彼女が言つと嫌みじゃない……常に正々堂々正面から行つて状況を解決する……それでついたあだ名が『突撃副会長』さ」

「『突撃副会長』………どっかで聞いたことあるな」

「ああ、岡崎が漫画見て決めたあだ名だからな………」

「………なんか疲れた」

「そつだな、帰るか………」

私と音無はとぼとぼと学校を後にした。

それから家で……

「まったくまさみちゃんは………」

私は初音にたつぷりと絞られた。

………今日は疲れた………始まりはサボった事にあるんだよな………
しばらくサボりはやめよう。

私はそう思った。

d Vice President of charge! ……En

episode zwei } I believe the people

質問いただきました来ヶ谷……下の名前は「ゆいこ」です

読み仮名付けなくてすみません

風紀委員長様に説教くらってから、数日後のこと。

前回の非を反省する事もなく、今日も私は授業をサボっていた。

ちなみに説教の次の日、私は罰としてなぜかテストを受けたのだが、結果は全教科100点。

教師たちの引き攣った笑顔は中々、面白かった。

さて……今日はどこへ行こう？

そんな事を考えながら私はぶらぶら歩いていた。

ふと、図書室の看板が目に入った。

(……………たまには図書室で静かに本でも読みながら歌を考えるのもいいかもしれない)

最近忘れがちだが、もともと私の歌う曲のジャンルはバラードなのだ。

死んだ後の世界にいた時はNPCの気を引く、という目的もあったのでロックを歌っていたが、ここはもうあの世界じゃない。

(……………バラード作曲してみるか)

私は、図書室の扉を開けた。

部屋に入ると同時に本特有のカビ臭いにおいが鼻の周り覆う。

この閉じた世界の匂い……………私は嫌いじゃない。

「……と、とりあえず、本の話はおしまいにして……ことみちゃん
は音楽は好き？」

残念だけどこの先輩と趣味を共有するのは不可能だ……と私は感じ
たので自分の得意分野に話題を変えた

「……んー、むずかしいの……クラシック？」

「クラシックか……私のやってる音楽とは見事に正反対だな」

「そうなの？ ……でも私はロックとかバラードとかデスメタルと
かも好きなの」

「いや……無理しないでいいから、その困った顔でデスメタル好き
とか言われても困るから」

「……ごめんなの」

……しまった、先輩がうつむいてしまった！

私は何か言おうとしたがうまい言葉が見つからない。

「あ、あの……」

「大丈夫なの。「冗談なんの」

「って、「冗談かよ！」

思わず突っ込んでしまった……マジで焦ったんですけどね？
そんな私を見て先輩は少しおかしそうに微笑んだ。

「ふふ……まさみちゃんおもしろいの……朋也君そっくり」

「へっ？ ……朋也って生徒会長の岡崎朋也ですか？」

「……知り合い？」

「ええ、まあ……」

「……また、朋也君あたらしい女の人増やしてるの……な

んだかゆるせないの……………」

「先輩？」

なんか急に先輩の周りに嫌なオーラが漂い始めたのだが？

「どうしましたか？」

「……………別に何でもないので……ただ……ニュートン力学を使えば、朋也君により効率よく攻撃できるとか思っただけなの……………」

「いや！？　せっかくの頭を復讐につかつたらだめですよ？」

この先輩が本気出したら完全密室犯罪になっってしまう！

「大丈夫なの……………死にはしないの」

「それ大丈夫じゃないから……………」

そこからしばらく先輩を宥めてた。

20分後、やっと先輩の調子が元に戻った……………疲れるな。

「ことみちゃんと生徒会長は知り合いなんですか？」

「幼馴染なの」

「へー、そうなんだ……………会長って昔からあんな感じだったんですか？」

「うん……………朋也君は口は悪いし見た目は怖いけど実はとっても優しいの……………みんな、そんな朋也君を知ってるから朋也君は生徒会長になったの」

「……………あの人、意外と信頼されてるんですね」

そんな感じで話をしていたが、その時はやってくる。

……どこかでチャイムが鳴った。
そろそろ帰らなければ。

「ことみちゃん……私はチャイムが鳴ったからもう教室に戻るね」
「うん……また来てほしいの」
「わかった……じゃあね」
「さよならなの」

私は立ち上がって図書室の入り口に向かう。

「……Pyes veten? se me karakt
er privat p?r gra p?r k?t? bot
?」

途中、先輩が何か呟いたが……意味が分らなかった。

(もっと……勉強しなきゃな)

私は図書室から出た。

図書室からの帰り。

作曲はできなかったが何となく曲のイメージはできた。
歌詞をつけるならこんな所だ。

I wonder nobody in the coun
try met her
She smiles, smiling person
in the world . . .

(……いい感じだ、バラードできそう)

私は、中々の収穫に結構上機嫌になっていた。

ホント、人生油断は禁物だ。

上機嫌になっていたおかげで、私はいつもなら気にならない喧騒がこの時はどうも気になった。

そして……喧噪のなかに近づいてしまったのだ。

そこにいたのは……

「勝負だ！ マスク・ザ・斉藤！」

「はりゃほれうまうゝ！！」

音無と謎のマスクマンだった……

I believe the people he …… End

episode zwei } Battle Rankings }

「勝負だ！ 今日こそ決着をつけてやる、マスク・ザ・斉藤！」
「はりゃほれうまう！！」

大勢の人に囲まれた中で音無は謎の変態マスクに向かって熱く叫んでいた……あの馬鹿……

（恥ずかしくないのかよ……………）

自分でも珍しいと思うくらい顔が赤くなっていた。
大体、何だ勝負って？ こいつら高校生だよな？

私の羞恥心に火を点けてるとも知らないだろう……音無は相変わらず熱く叫ぶ。

「さあ、みんな！ 武器を投げてくれ！」

（投げる訳ないだろ……って、ウソだろ！？）

私のツツコミとは裏腹に

「これを使え！ この日のために準備しといたんだ！」 「私の命を力に！」

とか何とか言いながらみんな何かを投げ始めた……この学校の生徒は頭がおかしいのか？

投げ入れられる武器は様々だ……消しゴム、トランプ、ギター（こらあ！！）、カセットテープ………二又槍………って、あれはロングヌス！？

ほかにもアイルランドの光の御子が使った槍とか、めっちゃ禍々しい大剣とかが投げ込まれる。

ここの生徒はどれだけキャラが広いんだろう……

そして……

「見えた！」 「はりゃほれうまう！」

音無が蠅たたき、マスク・ザ・斉藤が……団子大家族を手に取った！

「わお、あんだけいろいろ投げてたくせに武器ショボ！」

なんだかんだ安全は考慮してんだな……

私は先ほど投げ込まれたギターを胸に抱えながらそう思った。

「じゃあ、始めようぜ……」

「はりゃほれ……」

武器を構えにらみ合う二人（第三者視点から見ると音無が蠅たたきをマスクマンが団子のぬいぐるみを持って突っ立てるだけなのだ）

そして……

見ているだけでも正直、イタイ戦いが始まった……

バトルランキング

実は秀才

音無ユズル

V S

謎の仮面男

マスク・ザ・斉藤

「一応……努力してるからな」
「はりゃほれ」

マスク・ザ・斉藤の攻撃！

斉藤は団子大家族を空に掲げた！

空（天井）があやしく曇り始める……

「超常現象！？」

音無の攻撃！

音無は蠅たたきで斉藤を叩いた！

「はりゃほれ（汚！）」

斉藤に500のダメージ！

斉藤の攻撃！

斉藤は天井から団子大家族を召還した！

団子大家族が音無の上に漂い始めた……

「どうなってるのこれ！？」

音無の攻撃！

「おら！」

音無は蠅たたきで斉藤に殴りかかった！

「はりやほれうまうゝ（甘いな！）」

大量の団子が降り注ぎ斉藤の身を守る！
ついでに音無の頭の上に何個か落ちた！

音無に500のダメージ

「くそ、もうもたない……」

斉藤の攻撃！

「はりやほれうまう（Gate of Babylon!）」

団子が一斉に音無の上に落ちた！

「いたたたたた……」

音無に一個50×20のダメージ！

「うぎゃあー」

音無は潰れた！

マスク・ザ・斉藤の勝利！

（あーあ、負けちゃったんですけど？）

なんだかよく分からないうちに、音無が負けた。

マスク・ザ・斉藤が団子大家族の下敷きになった音無に近寄る。

「く、来るな……俺はまだ……」

「いい試合だったぜ？ 音無」

……………マスク・ザ・斉藤が普通に喋った。

「「「しゃべれんのかよ！」「」「」

周りが一斉にツツコム。

「当たり前だろ？ こんな飾りだよ」

そう言って、マスク・ザ・斉藤が仮面をとった……

B a t t l e R a n k i n g s …… E n d

e p i s o d e z w e i } W h a t k i n d o f , I ' m a t r

アニメ終わったな……面白かった

アニメは面白いけど、この話は正直面白くないかもしれません

それでも、見てくれる全ての人々へ姫龍はありがとうと言いたい

最近、暴走気味です……感想ならぬ『指導』をよろしく願います

それではどうぞ

「当たり前だろ？」

仮面の下から現れた男子生徒の素顔は……まあ、中々整っている部類に入っているだろうが、正直……あんなものを見せられた後に見てもアホにしか見えない。

「ま、まさかお前がマスク・ザ・斉藤だったなんて……」

前回から頭のネジが外れてしまった音無が驚いた様に呟いた。
というか……誰かもわからず戦ってたのかこいつは……あの世界の音無よりアホになってるな……

「しかし、なにゆえ!？」

「何故はお前の頭だよ、馬鹿兄貴……勉強のしすぎでおかしくなってるのか？」

音無は『お兄さん』から『兄貴』にランクダウンした！

私がそうツツコムと音無は勢いよく振り向き、そして悪さしてた所を親に見つかった子供……みたいな顔をした。

「……………いたのか、まさみ」

「ああ、割と最初からな、馬鹿兄貴が惨めに負ける所しつかり見といたぜ？」

「馬鹿兄貴って……そりゃ、負けたけどさ……」

「いや、問題は負けた所じゃなから」

「ほう……あんた音無の妹なのか？」

途中、変態仮面先輩（仮）が会話に割り込んできた。

「そうですけど……それが何か？」

「いや、苗字が違うなと思ったんだよ？ ……………一年の岩沢まさみだよな？」

なんでこの先輩、私の名前知ってたんだ？

……………まさか。

「……………ストーカー？」

「ちげえよ！ 何でそうなるんだよ！？」

「だって……変態仮面先輩が一年生の名前覚えてるって……………」

「なんだよ、変態仮面先輩って……………俺の名前は棗恭介だ！」

棗恭介……………知らないな、そんな人。

「やっぱりストーカー……………」

「いや違うからな！？ そんなに俺が信じられないか！」

「……………もしもし、警察ですか？」

「……………音無、説明してやってくれ」

変態仮面先輩（棗恭介）は泣きながら音無に弁解を求めた。

その後……

音無の捕捉によるとこの棗恭介という男は音無や智代と同じ副会長でこの学校のナンバー2らしい（ナンバー2は3人いるが）……………信じられんが

「じゃあ何……この人偉いの？」

「ああ、一応な」

なぜか胸を張る恭介。

私は冷たく対応する。

「ホント、一応だね」

「……………理樹以上に冷たいツツコミだぜ……………」

「そして、何か口調も変わってるよな、まさみ」

「うるさい」

「「すいません」」

目の前で正座する、先輩2人……しかも生徒会役員……なさけな！
私は、そんな2人をイスの上から見下しつつ、お茶を啜った。（ちなみに現在、私たちは生徒会室にいる。お茶は勝手に拝借した）

「でっ？ 説明してもらえるか？ 何なんだ、さっきの騒ぎは？」

「それが先輩、いや兄に対する態度か？」

「……………こいつはとんだ無礼者だぜ編入生」

「説明」

「「はい……………」」

馬鹿2人の話すところによると、この学校でごくまれに起こる喧嘩を解決する手段としてさっきのアホな戦いが行われるらしい。ルールは単純。お互い観客が投げ入れた物を武器に、それを正規の使用法で使い、先に相手を倒した方が勝ちらしい……………なんだそのシステム……………確かに誰も怪我しないのはいいかもしれないがそれを学

校が認めてるってどうなのよ？

「この学校は教師もアホなのか？」

「それは違うぜ、編入生？……………誰もケガしない様にと願う俺達生徒会の善意が上を動かしたのさ」

「はいはい黙れ」

「……………理樹、お前のやさしいツッコミが恋しいぜ……………」

恭介は折れた。

再起不能になった恭介を尻目に私は音無に問いかける。

「それで？ 何か弁解するアホ兄貴」

「いや……………悪い事はしてないから、説明してなくてゴメン……………
としか言いようがないんだけど」

「はあ……………まあ、そうか」

「いや！？ 納得するのかよ！」

途端、恭介は起き上がった。

「ああ、棗先輩？ 復活早いなだな」

「お前のテンション戻るスピードには負けたけどな！」

「褒めたって何も出ないぜ？」

「褒めてねえよ……………もういい。しかし……………編入生はなんで……………」

……………」

「岩沢様でいいぜ、別に」

「様は付けねえよ……………岩沢は何で俺と音無がただバトルしてただけでそんな怒ったんだ？」

恭介にとってはそれが一番の疑問なんだな……………まあ、理由くらい話してやるか。

私は怒った理由を話し始めた。

「それは……………投げられる武器の中にギターがあったからだよ」

「何？」

その答えが意外だったのだろう……………2人は少し、驚いた顔をした。

「私にとってギターはとても大切なものなんだ……………兄貴ならわかる
だろ？」

「ああ……………」

「……………そうだったのか」

恭介も相槌を打つ……………分かってくれるかは分からないが私は話し続ける。

「そのギターが……………誰のかは知らないが、投げられていた……………
それも喧嘩の道具に……………それを見た時許せなかったんだ」

私は立ち上がって、壁に立てかけてあった……………投げられていたギター
に手を触れる。

「こいつはさ……………喧嘩の道具なんかじゃない。……………少なくとも、
私にとっては『希望』なんだよ……………どんなに古くなくても、もう使
わないとしても……………そんな理由でこいつを投げるなんてふざけた根
性した奴が一緒の学校にいる……………それが私には許せなかった。
……………これが理由だ。……………兄貴と先輩には八つ当たりしちま
ったな……………ごめん」

私は素直な想いを2人に打ち明けた。

……2人は黙っている。そりゃ、いきなりこんなこと言われて納得できるわけないよな。

「あのさ……………」

「いいよ、謝らなくて」

「…………先輩？」

「悪いな……………今までそんな事思ってる奴がいるなんて考えたこともなかった……………そうだよな、自分の大切なものが蔑にされてたら怒るよな」

「……………分かってくれるんですか、先輩は？」

「ああ、悪いな岩沢……………みんなにもこれからはギターは禁止だって言っておくよ」

……………棗恭介に私の想いが通じたようだ。

話せばわかるとはよく言うけれど、本当に伝わるもんなんだな。

「ありがとうございます」

「……………その代わりだ」

「はい？」

「その代り、投げられたギターは……………そいつはお前が使ってやってくれ」

「……………分かりました」

……………こいつは、大切にしよう。

この気持ちを忘れないために。

「じゃあ、そろそろ俺はいくぜ」

恭介は納得したように立ち上がった。

「大切に……するから」

私は恭介と約束した。

帰り道。

私は音無と家へと帰る。

「……なあ、まさみ」

「……なんだ」

「お前さ……恭介と話してる時、地だったろ？」

「……わかった？」

「ああ、まあな……」

「……ごめん」

「いいよ別に……ただ、約束は破るなよ？」

「わかってるよ」

新たなギターを腕に抱えつつ、私はそう言った。

What kind of , I'm a treasure!
……End

『報告します、ゆりっぺさん。手紙を渡してから数日の間、天使を24時間態勢で監視しましたが天使に特別な動きはありません』

「そう……ありがとう。何かあったらまた連絡をちょうだい」

『了解しました』

私はトランシーバーの電源を落とした。

なぜだ……なぜ、天使はすぐ手紙を出さない？ 出せないのか？

（あー、わからないわ……というよりあの手紙って本当に岩沢さんから届いたものなのかしら？ もしかしたら天使が嘘をついてる？ ……まさかね、あの子は嘘つけるような子じゃないし……そもそも嘘をつく必要がない……もしかして天使が知らないうちに勝手に送られて届けられるとか？ ……まさかね、それなら私たちにだつて送れるはずだわ……）

いくら考えても答えは出ない。

一体、天使はどうやって手紙を送るのだろうか？

（いつその事、本人に聞いてみようかしら……って馬鹿か私は……天使が教えてくれるわけがない）

そんな感じで私がどうどう巡りをしていると……

トントン

誰かが扉を叩いた。

「あいてるわよ?」

私は何も考えず返事をしてしまった。

「お邪魔するわ」

「えっ……………ええ!」

……………天使が入ってきた。

S h e t o g e t h e r , h o w ? …… E n d

岩沢さんへ

本当に手紙が届いたようね……驚いたわ

……一体、この世界って何なのかしら？

実は私達、死んでないとかそういうオチはないわよね？

まあ、そんな訳ないだろうけど……

岩沢さんも何か気付いたことがあったら教えて？

あと、そっちの世界じゃ死んだら生き返れないって事忘れないようにね？

それじゃあね

ゆり

「やっぱりゆりも思ったか……」

手紙を読むうちに、私はそう呟いていた。

確かにおかしいのだ……あそこが死後の世界なら、この世界にモノを届けられる訳がない。

……そう考えるとある一つの仮説を造る事が出来る。

それはあの世界が死後では無いという仮説だ。

思えば、私が一度『死んで』から次の『人生』が始まるまでの間は1年しか空いていなかった。

私は……………あの世界で最低、10年は過ごしていたはずなのに。

(……………時間の流れが違う?)

それも考えられる。

しかし……………そうなるとあの世界の意味とはなんだ?

なぜ……………後悔を払拭させたり、生きる意味を見つけさせる必要がある?

ま・だ・生・き・て・る・と・い・う・の・に?

何かがあるのか? 一度死ぬ必要のある何か……………
それを調べる必要があるかもしれない

「まさみちゃん、練習しようよ?」

「ああ、わかったよ……………ちょっとは上手くなったか?」

「なってるよ!」

初音に返事をしつつ、私は思った。

この世界の秘密を暴いてやろうと。

……………私は動き始める。

S t r a n g e n e s s …… E n d

Another episode I was a {Stranger

M? n m? n i m k i m i b a? q a m? ? l l i f
l? r i n ? s? r l? r i . . . o x u m a q i s t?
d i y i n i z f i k i r d i g? r g? n v? l a z
? m l? t r a i l e r ' s . M? n v? z i y y? t i
y e r l? ? d i r i l m i? v? ? s a s x a r a k t e
r i t? ? k i l , x a r a k t e r i d a t a v? y
a z? l? , y a z m a . . . B u t r a i l e r i n
d i g? r? t e z - t e z , m? n d? x a r i c i
d i l t r a i l e r . . . e t m e k l a z? m d
? r

Flow g? l i b

日本語訳

先日、他の作者様の作品を読んで思ったんですが……後書きって便利ですね。主人公の置かれてる状況を整理したり、キャラクタ―のデータ書いたり、次回予告書いたり……そんな訳でこれからはちよくちよく、後書きも入れていこうと思います……外国語で。

姫龍

「お邪魔するわ」

「えっ……………ええ！」

……………状況を整理しよう。

私は部屋で遊佐と連絡を取りながら、なぜ天使は手紙などを遣り取りできるのかを話し合っていた。

……………結局、答えはです、天使が手紙を送る方法も分からずじまいで、もう今日は寝るかなー、とか思っていた所、天使が私の部屋にやって来た、というのが現在の状況である。

「な……………なんで、貴女が私の部屋に来るのよ？」

「……………ダメなの？」

「いや、ダメだから！ 私と貴女は敵同士だから！」

「……………そうなの？」

「そうなのって……………ん？ 何で貴女そんな顔赤いの？」

「ふえ……………？」

慌てた私は、銃を抜くのも忘れて天使と話していた……………そこで、天使の違和感に気づいた。

なぜか……………天使の視線が微妙に定まっていけないのだ……………しかも、制服が妙に着崩れている。

これではまるで……………酔った人みたいではないか。
私は、腰の銃に手を伸ばしつつ、会話を続ける。

「……………貴女、お酒でも飲んでるの？」

「な……………ん、で？」

「だって……顔赤いし、千鳥足じゃない……………」

「そ、そんなにや事ないわぁ……………（ボタン!）」

「わっ！だ、大丈夫？」

「ふにゅ……………」

突然天使が倒れた……敵ではあるが、一応は人間の形をしてるし、
大体こんな所に放置しておくわけにもいかない。

「……………これは、どういう風の吹きまわしなのかしら？」

私は天使を自室へと運んだ。

D o y o u d r u n k ? …… E n d

それは、私が珍しく授業を受けていた日の話。

一時間目の数学を終えた後……私は机に突っ伏した。

「どうしたんですか、まさみちゃん？」

「あー……うー……」

不思議そうに初音が声をかけてきたが、私はまともに答えられない。
理由は………そう、暑いからだ。

季節はまだ梅雨明け直後だというのにこの町の最近の平均気温は25度。もはや夏じゃね？ ……地球もそろそろ終わりだな……と、なんだかしみじみ思ってしまうくらいの暑さだ。

しかも……そんな暑い日に熱い教室で無駄に厚い数学教師の顔を見ながらの授業である。まわりのNPC……じゃなかった、生徒もみな一応に机に突っ伏したり、団扇で煽いだりと私と同じような行動をとっている。………それほど今日は暑かった。

「……………初音は暑くないのか？」

「いえ……そんなに暑くはないですよ？ 汗とかはさすがに少し掻きますけど……」

「だよな……ああ、やる気でないな……………逃げよっかな……………」

「ダメですよ？」

「分かってるよ……冗談だよ、冗談」

口ではそう言いつつも、半ば本気で私がプランを練っている事を初

音は知らない。

というか知られたら困る。この暑い日に3時間弱の初音の説教を受けたら……それこそ私の精神が崩壊してしまう。

（それにしても……暑いのに初音は元気だよな）

そんな初音を見て、私はふと思う。

いつも一緒に授業受けてるわけではないが（サボってるので）初音は何でこんなに真面目に授業を受け続けられるのだろうか？ 将来やりたいことでもあるのだろうか？

「……………それにしても初音はいつも真面目に授業受けてるよな……」

「いや……まさみちゃんは不真面目過ぎますからね？」

「いいんだよ私は……このまま音楽の道に進むから」

「……………思ってたんですけど、まさみちゃんは入院する前、バイトしながら音楽関係の仕事の面接を受ける生活だったんですよね？」

突然、初音が私の過去話を持ち出した。

「ああ、そうだったが……それが？」

「言いたくはないんですけどね……まさみちゃんのためですからね」

……初音、鬼になります」

「なんだよ、訳わかんないよ？ もったいぶってないで話してよ？」

私の言葉に初音は一息ついた後、こう言った……

「まさみちゃんが面接からなかったのって………技術が足りないとかじゃなくて学歴が中卒だったからじゃないんですか？」

.....なに!?

「そ、そんな訳.....ないだろ? だって世のアイドルなんか、それこそ中卒してるかどうかすらあやしいのばっかなのに.....」

「.....なんで、アイドルが基準なんですか? 言っておくと彼女たちは私達、一般市民とはかけ離れた存在ですからね?」

初音の言葉が今、始めて私の胸を貫いた.....そんな.....私が面接受からなかったのって.....中卒だったからなのか.....

(そんな馬鹿な.....一理あるかも知れない.....そうだよな、中卒で社会に出る奴なんかはそれこそ才能に溢れてる奴か、家庭に事情を抱えてる奴だもんな.....)

「.....盲点.....だった。まさか.....そうなのか.....」

「だって、初音が聞いている限りですけど.....まさみちゃんの歌唱力も演奏力もTV出ている人なんかよりもずっと上手ですし.....ケチのつけようがないんですよ.....このレベルでも面接受からないとしたら.....もう、経歴に問題あるとしか.....」

「.....わかったよ初音.....もう何も言わなくていい」

「.....落ち込まないでくださいね?」

心配そうに初音が声をかけてくれる。.....大丈夫さ初音、原因がわかったのならもう私は迷わない!

「.....必ず、高校卒業してやる!」

「.....わー、高校に毎日通ってる人が今さら言うセリフじゃないよーそれ」

なんだか初音のツツコミが雑になったが、そんなこと気にしてる場

合じゃない。

「……………とりあえず、定期考査は必ず受けよう。目指すは全科目100点だ」

「それができるまさみちゃんの頭脳がこの時ばかりは憎たらしいですね」

なんだか教室中から嫉妬と殺意の視線を受けたが、そんなもの毎日死にかけていたあの世界で過ごした私には怖くない。

「さあ、そうと決まれば、少しは真面目にやるかな……………一時間の黙想」

「いや……………それ真面目に授業受けてるって言いませんかね？」

「次は音楽だな……………ラッキー、めっちゃ楽じゃん」

「聞いてくれませんね……………」

「よし、行くぞ初音」

素早くものを準備した私は初音の手を引いて教室を後にした。

そして、現在私達は音楽室を目指して歩いている訳だが問題が1つある。

それは……………

「……………音楽室はどこだっけ？」

「知らないんですか？」

「だって、まだ受けたことないんだもん」

私が音楽室の場所を知らなかった言う事だ。

弁解させてもらえるなら、音楽の授業はもつとギターを取り入れて

いくべきだ……

だいたい現代っ子の中に「バッハ大好き！」と言える子がどれだけいるか……お門違いなのは分かるがもつところ……ロックなんかも取り入れていくべきだと私は思う。

「分かりました……音楽室ですね……」

「悪いな……初音」

「いえ、もういいです……」

結局、初音に案内してもらった事になった。

この学校の音楽室は2年生の教室が並ぶ階の一番奥にある。

1年生は通る時なんかは結構ドキドキらしいが2年生にしてみれば3年生が通る時はもつとドキドキらしい

まあ……私には分からない感覚だが。

「大体、この学校の先輩って怖くないだろ？」

「それはそうかも知らないけど……まさみちゃんはちょっと怖がらなさ過ぎなんだよ……」

「……………それはもしかしてじゃないけど褒めてないよね？」

そんな会話をしていた時だった……

『なんでお前は、イチゴオーレとプロテインを間違えるんじゃ、ボケえー!!』

ドカン！

「「うわあああああああ!!」」

突然、2年生の教室の壁が吹き飛び、1人の生徒が飛んできた！
その生徒は廊下側の壁に当たった後、動かなくなる……

「……………えっと……………」

「助けるんですかね？ ……………私達」

私と初音は突然の出来事に驚きながらも、その動かない生徒に近づいた。

One hot day event ……End

「聞け！ 私の歌を！」

e p i s o d e z w e i } H e w i l l c h a n g e t h e w o r

最近、本当に筆力低下中です
面白くなかったら御免なさい

「あのー、大丈夫ですか？」

とりあえず、吹っ飛んだ生徒に話しかけてみる。

「……………あー、白目向いてますね」

「ダメだなこりゃ、保健室かな」

ツンツンヘッドのバンダナ巻いた先輩は完全に気を失っていた。

「持てるのか……私達に？」

「先輩の力を借りないと無理かもしれません」

とりあえず、持ちあげてみようとしたが……やっぱり無理だ。どうやっても持ち上がらない。

「ダメだな……あー、先輩方！ ちょっと手伝ってくれませんか？」

「……………また、命知らずな事を」

「いいだろ、非常時だよ」

初音の非難をよそに、私は先輩を呼んだ。

「呼んだかね？ 岩沢女史」

「ああ、来ヶ谷……久し振り、このクラスだったんだ」

最近友達になった来ヶ谷が穴から出てきた。

「それで、何か用かね？」

「何かって……この人、このツンツンヘッド先輩どうしたらいいの？」

「ああ、そのことか………放置してかまわんよ、馬鹿は死なん」

「そう………？」

「いや、まさみちゃん！ 納得しないでくださいよ！」

納得しかけた所を初音に窘められた………何か面倒な事になってきたな……

「でもどうする、初音？ 唯一知り合いの先輩に別に助けなくてもいいって言われたら私達にできる事なんてないぞ？」

「それはそうですが………でも」

「………どうやら、君は優しすぎるようだな、音無氏の妹さん？」

「兄をご存知なんですか？」

「ああ、一応同じ生徒会役員だからな………初音君と呼んでいいか？」

「ええ、結構ですけど………」

「ありがとう………では本題だ。初音君に岩沢女史………君たちはイチゴオーレが飲みたいって仕方ないでしょう」

「はあ」「私は水しか飲まないんですけど」

「だが、今は仕事で身動きがとれない………そこで買い出しをヒマそうな生徒に頼んだ………しかしその生徒はただ「あった」という理由でプロテインを買ってきたのだ………君たちならどうする？」

「許せませんよね？ それ」

「プロテインか………水に入れて飲んでみるくらいならいいかも」

「………まあ、個人によって解釈に差が出るだろうが、自分のお金で飲み物じゃなくてプロテインを買ってこられれば、大抵の女子生徒は怒る。それが、現在のこの状態だ」

「要約するとこのツンツンヘッド先輩はイチゴオーレの買い出しを頼まれたにも関わらず、プロテインを買ってきたと………それで壁に

穴が開くくらい蹴り飛ばされた……ってことですか？」

「まあ、そういう事だ」

なんだそれ……この先輩最低だな……

急にこの先輩を助けようとした自分が情けなく思えてきた。

隣を見ると初音も白い目で先輩を見ている。

「じゃあもう放置して行っっていいんですね？」

「ああ、かまわんよ……しかし、君たちには迷惑をかけてしまったな」

「いや、大丈夫ですよ？　ぎりぎりだったけど怪我もしませんでしたし」

「そうです、初音もびっくりしましたが、怪我はしませんでした」

「そうか？　………なら、いいんだが」

「さっきから誰と話してるの？　来ヶ谷さん」

……その声は、来ヶ谷の後ろから聞こえた。

「ああ、理樹君。なに、ちょっとな……知り合いがこの馬鹿の巻き添えをくらいかけていたのさ……怪我はないか確認していたのさ」
「ええ！　だ、大丈夫？」

声の主が慌てて顔を出した。

姿を見せたのは小柄な男子生徒だった。

He will change the world …… End

A n o t h e r e p i s o d e Y u s a S h a d o w r u l e r

物語的にはゆりが天使を部屋に入れた次の日の話です

……だんだんと漆黒から赤紫に変わる空を見上げながら私は想う。
いつか、私にも満足する日が来るのだろうか？

いつか……あの忌まわしい日々を『過去』と笑い飛ばして、ここから卒業する日が来るのだろうか？

私の答えはまだ、見つかつてはいない……でも、この世界になら私の居場所はある。

ここでなら、私の存在は許される。

さあ、今日もがんばろう。必要としてくれる人たちのために。

(……さて、部屋に戻るか)

私は屋上を後にした。

「……………どういうことですか？ 異常事態って？」

『いいから早く来てくれよ！ 遊佐』

「落ち着いてください藤巻さん」

『これが落ち着いていられるか！ 早く来てくれ！』

そう言い残し、藤巻さんからの通信は切れた。

「……………」

事の経緯を整理してみる。

屋上から自分の部屋に戻った後、いつものように校内を巡回してい

た私のもとに藤巻さんから連絡が入ったのだ。藤巻さんは興奮して
いて通信内容は完全には理解できなかったが、要約すると

『ゆりっぺに連絡がつかない』 『異常事態だ』 『お前も
早く来い！』

という事らしい……

「また大袈裟ですね藤巻さん」

いつも思うが、戦線メンバーはゆりっぺさんに依存しすぎなのだ。
それが戦線の強さでもある。しかし、こうして何か異変が起こると
彼らは自分では動けなくなってしまうのだ。

「……………しかたない、本部に行くことにしますか」

これが彼らのためにならないことは分かっている。

しかし、このままにしておく訳にはいかないということも事実だ。
私は、本部へと向かった。

「それで、どういう事ですか？ ゆりっぺさんがいないって」

あれから数分後、本部にきた私は戦線メンバーから事情を聞いてい
た。

「文字通りの意味です。朝からゆりっぺさんを見た者がいない」

「風邪でもひいたんじゃないかねえか？」

「それはないだろ……………ここは『誰も病まない』世界だぞ？」

「じゃあなにか！？ ゆりっぺは消えちゃったってことかよ！？」

「そんな！」

「Doomsday……」

……戦線内は予想以上に酷くなっていた。

高松さんも日向さんも音無さんも藤巻さんも大山さんTKさんも動揺して話にならない。

私はとりあえず彼らを放置して椎名さんから話を聞くことにした。

「それで……彼らはああ言ってますが、どうなんですか？」

「高松が言っている事が確定情報、後の残りは可能性だ」

「あなた個人の意見としては？」

「消えてはいないだろう、身動きが取れないのではないかと考えている」

「そうですか……しかしこう言ってはなんですが、皆さんゆりっぺさんがいだけで慌て過ぎですね……情けない」

「あさはかなり」

大方の事情はつかめた。

後は、探すしかないだろう。

私は、天井に向けて一発、銃を放った。

バン！

途端、シンとなる本部みんなが驚いたように私を見る。

「……みなさん、落ち着いてください。余計な事をしている時間はありません。これからは、私の指示に従って行動してください」

私は、静かにしかしはつきりとそう言った。

説明しておくあまり知られてはいないが、戦線の中には一応、序列がある。

リーダーのゆりっぺさんがナンバー1とすると、ナンバー2はチャさん。そしてナンバー3が……私だ。

ゆりっぺさんの仕事は組織の指揮と戦闘、チャさんの仕事はギルド内の統率と武器生産にある。

そして私の仕事はガルデモのアシストに非戦闘時の情報収集、そして非常事態の際の組織統率なのだ。

やった事はないがやるしかない。

私は、ゆりっぺさんの席に腰掛ける。

「状況を確認します。現在、ゆりっぺさんが行方不明。これにより戦線の指揮権は私、遊佐に移行されました。これより私の指示に従って行動してください」

「しかたあるまい、ゆりっぺのためだ……それで、俺達は何をすればいい？」

いつもは、自分勝手な野田が今日は積極的に指示に従おうとしている。

やはり……ゆりっぺさんの存在は絶対なのだ。

このミッション……絶対失敗は許されない。

私は、PCを動かしつつ、作戦行動のための準備を進めていく。

「戦線の現メンバーは……戦闘員は8名、非戦闘員は私、竹山さん、高松さんを含め62名……計70名です。竹山さん、現在機械系に精通している戦線メンバーはどれくらいいますか？」

「現在、約10名です。僕を入れると11名……あと僕の事は……」

「わかりました。では、竹山さんと松下さんはここに残ってください。ガルデモメンバーは本部にて待機、後の戦線メンバーはゆりっぺさんの搜索、もしくは保護を優先してください。仮にこれが天使または他の敵性生物の罠……という事も考えられます。常に2人以上で行動し、銃、予備弾薬、サバイバルナイフの所持を忘れずに行動するようにしてください。今、機械系に精通した非戦闘員を各ポジションに配置しています。これから配布するプリントをなくさない様に。何か情報が得られた場合はこのポイントにいる戦線メンバーに報告してください」

「凄い……アホの集団があつというまに組織化されていく……」

「さすがだぜ……遊佐」

「Ruler behind the front……」

「では皆さん健闘を祈ります……ミッションスタート」

こうして、ゆりっぺさん搜索作戦が始まった……

Shadow ruler ……End

Another episode Yusa (Shadow ruler)

See on arms, ta... ta Yusa
 Ma?tleksin, k?ik inglid, draa
 konid on mullemik printses c
 han Yusa (naera b)
 Noh, ma p?rastema ingel...
 no, aua stem?rke, etnii... M
 ateadsin, heaja?ige. Nadk?
 ik nagullohe printses. See p?r
 ast Jumal andekstema andsite
 meile vastuv?etav.
 See luguei olel?ppenud nagu
 anime. Kas ma peanl?petajak?
 igiga? See v?ib Jumala poolt o
 led?
 Ma iseginiisuttatud leiige veeg
 a... Miks mitte maailm oli ni
 i!
 Ma tahane lada sedalugu... N
 ad tahavad naerd... see on gi
 see lugu...
 Palun autida j?rgmine kord
 N?eme

日本語訳

可愛いですね、彼女……遊佐ちゃん
 みんな天使がいて言うけど、姫龍は遊佐ちゃんが一番好きです（

笑)

まあ、次は天使ちゃんなんですが……いや、そういう風にキャラにランクを付けるのはやっぱり良くないですね……訂正します。姫龍は彼女たちみんな好きです。だからこそ、そんな彼女達に理不尽を与える神が許せない。

この物語は、アニメのような終わり方はしません。みんな卒業しなきゃいけない？ それこそ、神の勝手でしょ？

ぬるま湯に浸かっていてもいい……そんな世界があったていいじゃないか！

この物語の中だけでもいい……彼女たちには笑ってもらいたい……それがこの物語の理由ですから……

次回もどうぞお楽しみください
それではまた

episode zwei ~Senior shambles~ (前書き)

主人公には試練を……これが男性ユーザーの心理です

「だ、大丈夫？」

その小柄な先輩は慌てたように私達に駆け寄って来た。

どこことなく大山に似てる人だと私は思った。なんか特徴がないのが特徴とか言いだしそう……

「大丈夫ですけど……まさか、先輩がやったんですか？ この人を

……」

「いや、そんな訳ないから！」

「はは……冗談ですよ、そうですね……そんな訳ないですよね」

意外だ……この学校で初めてまともな人にあつた気がする……
しかもツツコミ役……稀少だな。

「じゃあ、一体だれがこのツンツンヘッド先輩をこんな目に……いや、初音は別にかわいそうとは思いませんけど？ ここにあると邪魔ですよこれ……」

「うわー、真人全然心配されてないね……」

「当たり前だ、プロテインを女の子に買ってくる奴が世界のどこにいる？ 女の敵だよ真人少年は」

「それは……そうだけど……ごめん真人。今回ばかりは真人に弁解の余地はないね……まったく言葉が思いつかないよ……」

……さつそくあの先輩にまで諦められたツンツンヘッド先輩。（真人というらしい）

哀れ、その屍はいつまでも放置されてたそうなの………どんとはらえっと。

「いや、そのキミ何かもう飽きてるでしょ!？」

「凄いですね、先輩。まさか私の地の文にまでツツコミを入れるなんて……先輩はツツコミの女神ですか？」

直枝理樹は『ツツコミの女神』の称号を得た！

「いやおかしいからね!？ なんなのさ、ツツコミの女神って！

この娘、地の文がなんたら言ってるけど、さっきからずっと普通に声に出してしゃべってたからね!？ そしてこの称号はいやだよ！

「凄い……一瞬で今、筆者が出したツツコミ所を全部言い当てた……やりますね先輩」

「キミの頭にはかなわないけどね!？」

なぜだろう……この優男な先輩（理樹）があのに金髪馬鹿にちょっとだけ被った気がする……

何故だかわからないが、もっとこの先輩をからかいたくなってきた……さらに私は会話を続けようとしたが……

「それくらいで勘弁してくれないか？ 岩沢君」

「……わかりました、来ヶ谷がそういうなら……しかたありませんね」

「……なんで来ヶ谷さんには従順なのさ……呼び捨てだけど」

「理樹君ももうつつこまなくていい」

「……わかったよ」

来ヶ谷に止められてしまった。

しかたない。来ヶ谷の言う事には従おう。

「じゃあ、そろそろ私達授業がありますから」

「そうか……すまん、この馬鹿のせいで時間を浪費させてしまった……こいつは後で理樹君が片付けるから安心していい」

「いや、僕!？」

「そうですか、ありがとうございます理樹先輩」

「いや……もういいよ」

「じゃあ、失礼します……おい、いくぞ初音」

「あ……えっと、失礼します」

「ああ、また今度な」

私と初音は来ヶ谷別れを告げて音楽室に向かおうとしたその時……教室から複数の人影が出てきた。

「理樹どうした？ あの手鹿そんなに重症か？」

「理樹君どうしたの？ 授業始まるよ」

「わふー、リキなにかトラブルでも？」

「直枝さん……どうかされましたか？」

「理樹君どうしたのなんか面白い事でもあったデスか？」

「直枝……早く席に戻りなさい。授業が……」

「直枝……いつまで遊んでますの？」

「理樹も来ヶ谷もいつまで真人の手鹿にかまってるんだ……俺が寂しいじゃないか!!!」

……出てきたのはみんな女子生徒ばかり（例外も1人いるが）だった……

どこことなく、猫の尻尾を連想させるポニーテールが印象的な先輩。

ショートボブの髪型で、大きめのセーターを着用している、なんだか和んでしまう先輩。

白い帽子とマントを身につけた小柄な先輩……クォーターかな？

影が薄そうな蒼色の髪をした先輩……赤いウィッグ似合ってますよ？

髪型がかなり特徴的なツォーテールな先輩……あの私、見覚えあるん

ですけど？

そして、風紀委員長様……あの前文のツータールさんはご氏族ですか？　というか瓜二つなんですけど？

長毛種の猫の耳をイメージしたようなリボンをつけた先輩……あ、野球部レギュラーの人だ……

そして最後に現れたなぜか袴姿の男子生徒……そのけがありそうな顔してるな……

以上、説明終了つと。

追記すると女子生徒みんな美人で可愛い……少しうらやましい。

そのまま、立ち去ろうと思ったが一応挨拶しておけばこれが何かの縁になるんじゃないか……と思った私は立ち止って振り向いた。

「先輩……意外と節操無しですね」

とりあえず理樹先輩を詰ってみる。

「え……何が？」

「だって……こんな美少女ばかり集めて……ハーレムですか？」

「いや！　そんな訳ないからね！」

「そんな……みんな遊びだったんですか……？　………女の敵」

直枝理樹は『女の敵／ハーレム王の末路』の称号を得た！

「いやいやいや！　さらに酷くなってる！？　なんなのさ、ハーレム王の末路って！　僕、ハーレムなんか形成してないからね？　みんな友達だから！　というか何でこの天の声はこんなにもこの一年生に従順なのさ！」

「先輩……さよなら」

「いや、ツツコミに対してボケがなんの反応も示さないのは反則だからね!？」

詰め寄ってくる理樹先輩肩を掴まれて以上のセリフを一息でお吐かれになった……よく息続くな……先輩の必死の説得を左から右へと聞き流しつつ、私は来ヶ谷へと目で合図を送る。

来ヶ谷の唇の動きから「了解した」と言っただのがわかった。

「見ろ……理樹君があんなにも必死に一年生を引きとめている……これは本気だぞ……」

「そんな……理樹の奴……年下好きだったのか……きも」

「鈴ちゃん、そんな事言ったらダメだよ……でもちよつと寂しいな」

「わふー、リキは年下好きですか! ……これはチャンスなのです!」

「……直枝さん、あなたには失望しました……」

「理樹君年下好きか、どうする? お姉ちゃん?」

「ど、どうにもしないわよ……ただ、放課後反省室行きね」

「直枝……後で後悔させてあげますわ!」

「そんな……理樹……俺たちというものがあいなから……」

「いや!? みんな本気にしないでよ? なにこの状況!」

「ツケがやって来たんでしょうね……」

「まったく……少しは節操を持ったらどうだ? 少年」

自分たちが持ち上げた事は棚に上げて、私と来ヶ谷はさぞ当然というように先輩に言った。

「……………恨むからね、来ヶ谷さんに一年の……………」

「岩沢まさみです」

「……………君、恭介並に大物だね。今、僕は恭介以外で初めて凄いと人に対して思ったよ」

「ありがとうございます」

「……………褒めてないんだけどな……………」

勿論、わかってますとも……………

さらに会話を続けようと思ったが、今度こそ終わりのようだった。

……………チャイムが鳴った。

「じゃあ、私達はこれで失礼します。……………先輩」

「なになな……………」

「……………強く、生きてくださいね……………人生まだまだこれからです」

「君に言われたくないよ……………！！！！」

そんな、先輩の絶叫を後に私と初音は音楽室へと向かった。

後に残ったのは屍となった先輩と嗤う来ヶ谷^{ツンツン}。女子生徒のみなさんに取り囲まれる哀れな理樹先輩だけだった……………

その後、どうなったかは知らないが、来ヶ谷に聞いた話によると、それから3日間、理樹先輩は学校を休んだらしい。

……………少し、やり過ぎたかなと思ったがまあ、私のせいじゃないですよ？

……………これは、ある暑い日の熱い先輩達のお話。

Senior shambles……………End

遊佐が指揮をとって、ゆりっぺ搜索作戦を始める7時間ほど前の事。

「この娘、どうしようかしら……」

私は途方に暮れていた。

その理由は、私のベットで眠る天使。

成り行きで保護したとはいえ、仮にも天使は戦線の宿敵である。

誰かに相談しようとも思ったが、もう時刻は真夜中。だれも起きてはいないだろう。

それに、こんな状況を誰かに見られた戦線の士気に係わる……

「やっぱり、自分で何とかするしかないわね……」

とりあえず、どうするかを考えてみる。

……やっぱり起こすというのが一番妥当だろう。

「………やってみるか」

こうして、天使を起こすオペレーションが始まった……

Operation 1 普通に起こす

「………起きなさい、天使」

まずはポピュラーな揺るから……私が生きていた時、お母さんはいつもこれで私を起こしていた……これは期待できる。

私は天使を揺すってみた………が

「うわっ!？」

ブン!

普段の訓練のおかげで反射的に体が動いた。
私の目の前を鋼色の刃が通り過ぎていく……
間一髪でよける事ができたが……危なかった。

「……………寝ぼけてハンドソニックって一体何なのよ……死ぬ所だった」

「……………ちっ」

「ちよっと! 今、舌打ちしたわよね!？」

「……………」

「……………寝言で舌打ちとか、どんなタイミングよ……ホントに寝てるのかしら? この娘」

危なく、死にかけた……

「今度は別の方法で起こしてみようかしら……」

私は、備え付けの台所に向かった。

Operation 2 鍋とお玉

ガンガンガンガン！

「起きなさい！」

私は、台所から持ってきた鍋をお玉で精一杯叩く。

……これはすごい五月蠅い……しかし。

「……………」

「起きないわね……………って、耳栓してるじゃない、この娘！ 誰よ、耳栓つけたのは！ ていうか、起きてるでしょ、あなた！」

天使はなぜか耳栓を装備していた……………絶対起きてるでしょ、この娘。頭にきたので、もう銃で起こそうと私は引き金に指をかけたその時。

「こらー、うるさいわよ！」 「今何時だと思ってるの！？」 「ちょっと出てきなさいよ！」

「……………しまったわ」

………今が夜だという事をすっかり忘れていた。
外からNPCの怒鳴り声が聞こえる。

「無視すれば大丈夫でしょ……………って、天使がいるじゃない！」

もし、NPCが集まって来て部屋の中に入られれば、ここに天使がいるとばれる……………そうになったら……………

「破滅だわ……………」

女の子同士でお泊り会やってましたゝとかそういう事ではすまされない……………なんせ私はSSSのリーダー、寝てるこの娘は宿敵、天

使なのだ……

一緒にいたことがばれると非常にまずい……

「……………あんた、後で覚えておきなさいよ……………」

私は、怒鳴られ覚悟で部屋の扉を開けた……

「くう……………なんで私がNPCなんかに説教がまされなきゃならないのよ!」

結局、あれから一時間、廊下で正座しながらNPCに説教された……
…なんて屈辱だ。

運よく戦線メンバーには見られなかったがまさかNPCに曝し者にされるとは……

「神を見つけたら、今回の分もきっちり殴る……………」

私は決意を新たに部屋に戻った。

部屋に戻って私が見たのは……ベットに腰掛ける天使だった。

「大変だったわね」

「……………これは、目の錯覚かしら? 私にはあなたが起きているように見えるのだけけど?」

「ん? ……大丈夫よ、貴女の目に見えるもの、それが真実だから」
「そう……………」

つまり、あんたは起きてた訳ね……………ずっと。

私は何も言わず、天使の額めがけてナイフを投擲した……が

「なっ!？」

「……今の私はそんなに甘くないわよ？」

なんと天使は飛んできたナイフを人差指と中指で掴んだのだ。

……ありえない、投擲したナイフは遅くても時速100キロ弱は出ているのだ。彼女は秒速約280mで動く物体が見えるのか？

しかも……ナイフは彼女の額、数ミリという所まで来ていたのに瞬き一つしない。

……なんという度胸だ。

「やっぱり、ただの人間って訳じゃないのね……あなた」

「あなたこそ……おいしいわね」

「………どういう事？」

「今の私じゃなければ、確実にあなたは『天使』を倒せてたということ」

……今の私じゃなければ？

「じゃあなに？ 今のあなたはいつもの天使とは違うの？」

「ええ、そういう事になるわね」

「………どういう事なの？」

「私が、敵に情報を与えんでも思う？ ……まあ、いいわ。この後どうなるかと私には関係ないから、教えてあげる。………原因は誤作動よ」

「誤作動？ ……具体的にいいなさいよ？」

「ガードスキルであるでしょ？ その中の『harmonics』というスキルが誤作動を起こしたの。本来、『harmonics』は分身を造るスキルなんだけど……発動した時、彼女すごく情緒不

安定な状態だったの……それで出てきたのが私。普段の彼女とは違い私は攻撃性の塊……彼女、慌てて私を戻したわ……でもその時、運悪く『harmonics』が誤作動。私の自我は消えることなく彼女の体に戻った……まあ、わかりやすく言うなら？ ジギルとハイドってところね。一つの体にいい子の天使ちゃんと悪い子の私の二つの自我が同時に存在する状況になったの……それで、天使ちゃん是谁かに助けを求める内に偶然、貴女の部屋の前に来て気を失ったので、代わりに私が出たって訳。わかった？

「……なんで最初、彼女酔ったみたいになってたの？」

「ああ、それは私が途中お酒飲ませたから……彼女、酒弱すぎね」

なるほど……そういう事だったのか。
しかしそうなる……

「彼女を元に戻さないといけないわね……あなた消える気ある？」

「……それ本人に聞く？ 普通」

「だって、確認しとかなきゃ後味悪いじゃない」

それに、こんな攻撃的な天使にいつまでもいられたら、それこそ私達戦線の存亡にかかわる。

この天使はおそらくオリジナルよりも強い……真実を暴露するのはそれでも勝てると踏んでいるからだ。

「でっ？ 消えるの消えないの？ 答えによっては消してあげるわ……なるべく優しく」

私は銃を向けたままそう言った。

天使は笑ったままだ。

「いいわよ……別に消えてあげる」

「……………へ？」

黒天使の予想外の答えに私は一瞬脱力しそうになった……

「大丈夫？ 貴女」

「大丈夫って……今、流れるにあなた「私を消せるもんなら消してみなさい」みたいな感じだったじゃない！ それが「まあ、消えてもいいですよ」って感じに返されたらそりゃ脱力するわよ！」

「いいじゃない……別に消えるんだったら」

「まあね……そうよね（納得するしかないのか？）」

「でも……一つ言っておきたいの」

「何よ？」

黒天使が突然真顔になった。

「私が今回現れた理由は……………貴女達のせいなのよ？」

「どういう事よ？」

「貴女達が彼女を貶めたんじゃない……………スキルの誤作動は偶然だったとしても直接的な原因は貴女に原因があるの……………忘れたとは言わせないわよ？ 今回のテストの件」

「あれが……………原因なの？」

その言葉にハツとする。

そうだ……………確かに私は彼女を貶めた。

彼女のテストをすり替えたのだ。

「彼女は全てを失ったわ……………友達も恋人もいなかったけど彼女はこの世界で唯一NPCからの信頼を勝ち得ていた。その唯一の彼女の誇りを貴女達は傷つけた……………それは忘れちゃだめよ？」

「……………悪かったとしか言えないわね……………ごめんなさい」

「いいわよ……私に言っても無意味だから……ただ、彼女が戻ってきたら、ちゃんと謝りなさいよ?」

「ええ」

それは黒天使と私が交わした唯一の約束……しっかりと守ろうと想った。

「じゃあ、本題」

「え? 今の前置!？」

「そうよ? なに不思議そうな顔してんの? 本題はこれからよ」

「今の話を差し置いた本題って一体なによ?」

「私の消える条件」

「……あんた、今無償で消えます的な感じだったわよね」

「馬鹿じゃない? 世の中に無償^{タダ}なんてないわよ……条件は一つ、朝まで飲みましょう?」

「……へ?」

「貴女は頭が悪いの? 耳が悪いの? 私は朝まで一緒にお酒を飲みましょうって言ったの!」

何をおっしゃってんだこの黒天使?

私が……晩酌? 天使の?

「……マジで?」

「マジもマジ……大マジよ。言っておくけど……私が酔いつぶれるまで貴女寝かせないから。それに私は満足しないと消えないわよ?」

そんな訳で……

「……これ、一体どんな罰ゲームよ」

「決まってるでしょ、私の答案すり替えた罰」

私は、天使に晩酌しながら夜を明かすことになった……
もう……絶対、あんな作戦やらない……

「乾杯！」

私は半ばやけくそ気味に黒天使とグラスをぶつけ合った。

Black Angel …… End

「おいしいのかしらね？ 私達学生よ？」

「いいのいいの……これこそ学生の醍醐味でしょ？ ……それにこれフィクションだから」

「訳わかんないわよ……あんだ」

「はははは……」

episode zwei } Diamond Dust Burning }

今回、短めです

そして、全ての話を改稿しました！

タイトルは違うけど話は変わってません

どうぞこれからもお楽しみください

キンコンカーンコン

「お、終わった……」

日直が「起立、礼」とお決まりの言葉をしゃべる中、私は一人、机に突っ伏していた。

そんな私を数学教師は責めることもなく、どこか憐れんだ目で見つめている。

(……………屈辱だ……………)

いつもならこの数学の時間は来ヶ谷ベンチでお茶をしている私なのだが、今日はめずらしく授業を受けていた……………いや、受けさせられていた。

「反省しましたか？ まさみちゃん」

「初音……………お前……………」

いつも通り微笑みながらやってきた初音が今日は憎らしい。

「ん？ どうしたんですか？」

「こんにやろう……………いいから早く外せよ！ 足のこれ！」

「ああ、忘れる所でした……………」

にやにやした笑みを顔に浮かべながら、初音は足もとに屈み込んだ。そして……………ガチャガチャと何か音がした後……………

ガチン！

何かが外れる音を聞いた私は、すぐさま立ち上がり、備え付けの口ッカーへ走る

「うおおおおおおお！！！」

間一髪、それをキャッチした……

「よかったですねー、まさみちゃん」

「初音……お前え！」

私はギター片手に立ち上がり、初音と睨みあう。

「おいおい……今日はまた随分荒れてねえか？ 岩沢」

「いや……それよりも初音ちゃんが……」

教室の隅でこそ生徒達が話し合う声が聞こえたが、そんな声は今には気にならない。

「……………本気でやるつもりか？ 初音」

「そっちこそ……負けて恥かかないといいですね？」

私達は教室の中で、火花を散らしていた……

事の始まりは昨日にさかのぼる……

D i a m o n d D u s t B u r n i n g …… E n d

昨日の事……

ジャーン！

「……………よしっ！ いいぞ、初音！ かなり出来上がって来たな」
「そうですか！ やった！」

音無家にギターの爆音が響き渡る。

最近描写はないが、私と初音は夕食の後、毎日二時間、ギターの練習をしている。

ちなみに音無家の夕食の時間は7時。これは初音が9時からドラマが見たい……という要望と、必ず二時間は初音と音を合せてギターの練習がしたい……という私の要望がぶつかった為のこの時間だ。それでも練習は面倒だろうが、初音は文句の一つも言わない。……本当にいい子だよな。

当の初音も最近、かなり上手くなっている。そう……そろそろライブに参加できるくらいにだ。

（今度、ライブに出すかな……）

そんな事を私は薄らとだが、考えていた。
まだ二人だけだが、それでもちゃんと音楽にはなる。

（後はドラムもほしいな……）

ついでに欲深い事も考えてみた。

……まあ、なにせよ、初音がライブに出る日がいまから楽しみな私なのだった。

「じゃあ、今日はここまでにするか……」

「はい、ありがとうございますたまさみちゃん……ではドラマです
」！

（……初音は自分の好きな事になると恐ろしい速度になるよな）

普段の約3倍くらいの速さで動く初音を後目に私はギター等の道具をしまい、自分の部屋に戻る。

初音がドラマを見ている間、私は部屋で新曲を考える。

（……People eventually fade away
into the memories alone is……
こんな感じかな？）

最近はロックと同じくらいバラードも考えているのだが……まあ、作曲というのはそう簡単にできるものではない。

結局、今日の収穫は二時間かけて一番の歌詞の原型ができたといった所だ。

（………少し、休憩するか）

私は、リビングに戻った。

リビングには音無の姿があった。たった今帰ってきたのだろう。忙しい奴だ……

「あ、兄貴帰ってたの？」

「ああ、さつきな……って、まだ兄貴のままなのか？ もうお兄ちゃんとは呼んでくれないと？」

「当たり前だろ……『お兄ちゃん』ってのは尊敬でもされてなきや呼ばれないんだよ」

「……？ g h e l d a ? ? a ? e r k o m i n n t ? m i f y r i r k u l d a o g . . . ? (寒い時代だと……」

「思わないか？」

「???????? (自業自得だよ)」

音無と軽く会話をした後、私は冷蔵庫へ向かう。

何か飲もうと（まあ私は水が麦茶しか飲まないが）冷蔵庫を開けた。

(……………お、コイツは……………)

そこで私の目に入っただのは……………プリンである。

しかも結構有名な店の焼きプリン。

おそらく、音無が初音のどちらかが買ってきたのだろうが……………旨そうだな。

私とて人の子だ……………美味しそうなものを見たら食べたくなる……………
…そう、それが例え人の中でも

(……………て、何考えてんだ……………ダメだろ……………)

慌てて、邪な心を打ち消そうと頭を振ってみるが……

(きつと……………美味しいんだろうな……………こう……………プルプルしてて、舌

の上で蕩けたりするんだろうな……)

……ダメだ。打ち消せない……

私は、精一杯抗おうとしたが(一瞬)プリンの魔力には勝てなかった……

恐る恐る……冷蔵庫からプリンを取り出す。

そして周りに人気がない事を確認して(この時、首は動かしてはいけない……教えてくれてありがとう椎名)………プリンをジーンズのポケットに入れた。

(よし……第1段階クリア)

後はスプーンを持って部屋に逃げ込むだけ……私は先ほどと同じ動作を繰り返した後、スプーンを見事ゲットした。

(よし……ミッションコンプリート!)

「……どうしたんだ、まさみ?　すごい拳動不審だけど?」

「! (うるさいよ、

馬鹿兄貴!)」

「ロシア語で罵られた!?!」

途中、声をかけてきた愚かな音無に罵詈雑言を浴びせつつ、私は自分の部屋に走って行った……

「……俺が一体何をした?」

「どうしたんですか?　お兄ちゃん?」

後に残ったのは、茫然と立ち尽くす音無だけだった……

そして部屋にて……………

「プリンだ　プリンだ」

見事、プリンを気づかれる事なく奪取してきた私は普段よりテンションを上げて喜んでいた。

正直、今の私はひさこ達には見せない顔をしているだろう……しかし、今そんな事はどうでもいい。

（さあ、食べるぞ……プリン！）

私はプリンを小皿の上に落とす。

揺れるプリンはこんなにも愛らしい……

「いったきまゝす！」

私はプリンにスプーンを突き刺し、一口……口に運んだ。

（うまい）

ガラ！

「まさみちゃん一緒にお風呂入りませんか？……………つてえ！
なああああああああ！……」

初音が……………入ってきた。

「……………しまったあああああ！　部屋に鍵閉めんの忘れてたあああ！」

なんてこったい！ 私とした事が致命的ミスを！
初音は……しばらく陸に上がった魚の様にパクパクと口を開けてい
るだけだった……

「何食べてるんですか！？ それ！ 私の楽しみにしてたプリンな
のに！……！」

「ご、ごめん！ これには……これには訳が……」

その後、私は弁解したが初音の機嫌が直る事はなかった……

ここまでが昨日の出来事。

話は私と初音が睨みあっている所に戻る。

P e a c e i s a p r e c i o u s l o n g t r a n s
i e n t …… E n d

A n o t h e r e p i s o d e Y u s a { P e o p l e n o t i c e

A n o t h e r e p i s o d e Y u s a の続きです

オチはもう分かっています。重要なのはオチではありません。
過程です。

それで、最近気がついたのですがタイトルを和訳する機能がありませんがあれはお勧めしません。というか意味が全く違ってくる……
姫龍が言いたいのはただ一つ

英語の方が、かっこいいじゃないか！ それだけです

ゆりっぺさん搜索作戦から早2時間がたった。

「……おかしいですね、こんなに探しても見つからないとは……」

「いや……おかしいのはあなたですよ？ 高松さん」

心配そうに呟く高松さんに竹山さんがツッコミをいれる。

「……なあ、遊佐」

「なんですか？ ひさ子さん」

「高松は………何で空気イスなんだ？」

「………それが、今気になる事ですか？ ひさ子さん。
たしかに、なぜか高松さんはこのミッションが始まってからずっと
空気イスだ。」

しかし、本人はふざけている訳ではないようなので私はずっと無視
を貫いていたのだが……

「やめさせますか？」

「いや……そんな不思議そうな顔するなよ………わ、私が間違ってる
のか？」

「いえ、間違ってるのは確実に高松さんの頭ですからひさ子さんが
不安になる事はありません」

「そうか………ならいいんだが………」

「でも………流石にちよつとね………」

「うん………なんかむさ苦しい………」

「そうですか……………高松さん、入江さんと関根さんが迷惑しているので止めていただけませんか？」

「わかりました……………しかし、それでは私は何をすればいいのでしょうか？」

「まず窓を開けてください。そして貴方の任務はここにいるガルデモメンバーの護衛ですから、しっかりその役目が果たせるよう体を温めておいってください」

「わかりました。では腕立て伏せでも……………」

「それが、迷惑なんじゃボケエ！」

「う、うわあああああああ！……！」

（（（あー、殺っちまいやがった……………）））

……………高松さんは窓を開けて先の言葉を言った所で、ゆいさんに蹴り落とされた。

どこからか嫌な音とNPCの悲鳴が聞こえるが……………聞かなかった事にしよう。

「……………ゆいさん。激情で仲間を殺害しないでください。あれでも立派な肉の盾ですよ？」

「ご、ごめんなさい……………つい」

「いや、ついとかじゃねーよ、ゆい！ それに遊佐も！ なんだよ肉の盾って！」

「比喻表現ですが？ いざとなったら本気でしたが」

「それは比喻じゃねえだろ！」

「しかし、高松さんではありませんが本当にゆりっぺさんはどこに行ってしまったのでしょうか？」

私のつぶやきを聞いて、顔をしかめるひさ子さんと入江さんと関根さん。

私だって信じたくはないが、万が一という事もこの世界にはある。

なんだか、部屋の空気が重くなってしまった……

「あれ〜？ 皆さん暗い顔しちゃって……大丈夫ですって！ 隊長さんが消える訳ないですよ？ だって隊長さんですもん！」

……ゆいさん、あなたには空気を読むというスキルがないんですか？ ……………ないんでしょうね。

「そ、そうだよ〜」

「だな、ゆりっぺが消える訳ないよ」

「うん」

でも、ゆいさんのおかげで場は明るさを取り戻した。これも彼女の才能なのだろう……………さて

「では、そろそろいきますか」

「ん？ どこにいくんですか遊佐さん？」

「ゆりっぺさんの所にですゆいさん。目星がつかしました」

私の言葉にその場にいたメンバーが目を丸くした。

「ホントかよ？ 遊佐」

「はい、ひさ子さん」

「一体ゆりっぺはどこにいるの？」

「うん、私もそれ知りたい！」

「残念ですが……教える事はできません。ガルデモメンバーに何かあつては事ですから」

「気にしなくてもいいぜ？ 別に死なねえし」

「そついう問題ではありません。では行きます。竹山さん」

「はい？ なんですか」

「新たに送られてきた情報があれば報告してください」

「了解です」

「それでは……」

私は、本部を出て、ゆりっぺさん捜索に加わった。

これまで、来た情報はみな一貫して『校舎内にゆりっぺさんがいない』という情報ばかりだった。

「灯台もと暗し」という言葉があるが、だったら逆にゆりっぺさんは動いていないのではないか？

私は、そんな考えから女子寮に向かう事にした。
一人、廊下を歩く。

「ちょっと、止まってもらおうか。その生徒」

誰かが私を呼んだ。

「きさま……今は授業中だぞ？　こんな場所で何をしている？」

……そこにはNPCの部下を引き連れた生徒会長代理の姿があった。

People notice unexpected……End

「きさま……今は授業中だぞ？ こんな場所で何をしている？」

NPCの部下を二人引き連れた彼はそう私に言った。

目の前にいるのは生徒会長代理、直井文人。天使の後釜として選ばれた生徒だ。

……嫌な相手に見つかった。

「……………探し物をしていました」

「今は授業中だぞ？」

「私には関係のない事です」

「何を探していた？」

「あなたには関係ありません」

「……………不真面目だな。連れて行け」

どうやら私の言葉が気に入らなかった様で彼はそうNPCに命令する。

NPCの二人は無言で私に近づいてきた。

そして私の手後ろにまわして拘束しようとしたところで……私はNPCの太腿に、そつとスタンガンを押しつけた。

「……!?」

瞬間、仰け反ってNPCが倒れる。

私は彼らの脇にしゃがみ込むと、トドメとばかりにやさしくスタンガンを首筋に押しあてた。

NPCは……動かなくなった。（念の為に言うと死んでない。あくまで気絶だ）

「さて……残念でしたね？」

私はそう彼に告げる。

彼はかなり驚いたようだ。

信じられない、といった顔で私を見ている。

「馬鹿な……きさま！ 何をしたか分かってるのか！？」

「NPCの太腿と首筋にスタンガン当てましたけど？」

「そんな事が……何故できる」

「甘いんですよ、あなたは。どこの世界にも必ずルール破りはいるものです。……そう、あなたと一緒にですよ……直井文人さん？ ……そろそろ腹を割ってお話しませんか？」

私がそう言つと、彼は目を細めた……

「……いつから気づいていた？ 僕がNPCでは無い事に」

「先日、あなたがNPCに暴力を振るっているのを見た時からですよ」

「……見ていたのか」

「凄いですね……あれで帳尻を合わせていたなんて驚きですよ」

「……なぜ、報告しなかった」

「……あなた、その内事を起こすつもりでしょう？」

「……ああ、そうだ」

「それが、失敗されたり実行されなかったりすると困るからですよ」

「……どういう事だ？」

……彼の疑問はもつとも、だろう。

なぜ、私が事を起こさなきゃ困るのか……それは

「反省の為です」

「反省？ 何を」

「最近、ゆりっぺさん達少しずれてきてまして……その修正です。まったく天使の答案すり替えるとか、正気の沙汰じゃないです。一体何を考えているのか……ここら辺で反省の為に痛い目に遭った方がいいと思います」

「……………だから、僕を利用すると？」

「はい。思いつきり痛めつけてもいいです」

「……………おかしい奴だな、きさま……………」

彼は少し呆れたように呟いた。

そんな彼に何も言わず、私は背を向けて歩き出す。

「それではそろそろ失礼します。……………私は今日この瞬間の事は報告しませんので、そちらも今回は私を黙認してください。……………いいですね？」

「ふん……………氣にいらないな……………まあ、よろう。僕は神だからな……………ただ、その瞬間になってから泣くなよ？」

「ええ、それでは」

私は女史寮を目指して再び歩き始めた。

その後、私の思った通り、ゆりっぺさんは部屋にいた。

ただ……………どんな状態だったかは、ここでは話せない。

追記するならこの日をふくめ3日間、ゆりっぺさんは戦線本部に出てこれなかった。

The penalty of sin …… End

「……………確かに、昨日プリンを食べた事は謝るよ……………でもなでも……………これはねえだろ？」

「うるさいです……………雑音は初音の耳に障ります……………」

「……………こんにやろう」

既に4話たったが、私と初音はまだ睨みあっていた。

状況的に言うなら4話前から全く動かず、回想という訳だったのだが……………て、私は何の話をしてるんだ？

まあ、先の通り悪いのは確かに私だ。

プリンを食べたのは……………悪かった。それは認めよう。

しかし……………それにしたって初音は怒り過ぎだろ？

なにも……………

「なにもあんな事しなくてもいいだろう？」

「自業自得です」

話は今日の朝に戻る……………最近、戻ってばかりだな。

結局、昨日の夜はいくら謝っても初音の機嫌は直らなかった。

朝になってリビングに降りてくるともう、初音は学校に行ってしまった。
っていた。

久しぶりに音無と二人で朝食をとる。

「……………じゃあ、初音のプリン食べちゃった訳か……………どうりで朝、

機嫌が悪かった訳だ」

「反省してるよ……しかし、こんなに怒るもんなのか？」

「……まさみあんまり反省してないだろ？」

「いや？　一応、後であやまって同じもの買ってきて帳尻合わせようとは思ってるけど」

「………本当、音楽以外は鈍いよね」

「………どういう事だ？」

「分からないならいいよ。ただ、学校でこれ以上初音怒らせないようにね？　………あと………」

ここで初音の話題は終わり、後はひたすら生徒会役員としての説教が待っていた………言いたい事はわかってるけどさ………見た目ひきこもりみたいな奴に言われると腹立たしいな（今の音無はあの世界と違って前髪が長い。参照するなら第9話って所だ………て、また意味の分からないこと言ってるな私は………）

その後、家を出た私は音無と一緒に学校に登校した………途中、何人かの女子生徒に指さされたが、私は無視を決め込んだ。

教室に入った私はとりあえず、初音に謝ろうとその姿を探したが、なぜか教室に初音の姿はなかった。

初音の奴………とことん今日は無視する気が。

しかたない………授業になればあいつも教室に戻ってくるだろう………

私は壁際に貼ってある時間割を確認する。

今日の時間割は………数学、現文、社会、英語、理科、英語、数学………殺す気か、おい？

（なんだこの殺人的プログラムは？）

いつも受けてないから分からなかったが、他の時間割もみんな同じ

ようなモノだった。

……この学校、実はかなり進学意欲高かったんだな……進学校
ってやつなのか？

正直、見た瞬間サボりたくなっただが仕方がない。

（一時限目は受けるか……）

私は、自分の席についた………その時

ガシャン！

「だあ！？」

そんな音と共に足に激痛が走った……
慌てて足元を見ると

「……………なんだよ、これ？」

私の左足にトラバサミが喰いついていた……

トラバサミとは、主に狩猟で使われるトラップの事だ。中央の板に
獲物の足が乗ると、ばね仕掛けが働いて脚を強く挟み込む。普通な
ら引っ掛かった時点で足を粉碎骨折するらしいのだが、このトラバ
サミは途中につつかえ棒が付いていて完全には閉じない様になっ
ていた。……………骨折しないのはうれしいがそんな所に優しさを見せ
るなら、そもそも仕掛けないという選択肢は無かったのだろうか？
……………って

「解説してる場合じゃないだろ！……おい！誰だよ、これ仕掛けたの。シャレにならないぞ！」

しかもこのトラバサミ、足が抜けない……

つつかえ棒が丁度抜く時、邪魔になるよう配置されてやがる！

「動かさない方がいいですよ？」

「はっ？何を言って……」

突然の事で動揺する私に誰かが話しかけてきた。

そこにいたのは……さっきまでいなかった音無初音。……
そういう事か。

「……初音。あんたか……トラバサミ仕掛けたの？」

「はい。そうですよ」

「一体何のつもり……まさかプリンの恨みとか言うなよ？」

「その通りです」

「おいっ！」

……一体、どこの世界にプリンの恨みでトラバサミ仕掛ける奴がいるんだよ！

しかも……初音は突然しゃがみ込むと、さらに何かをやり始めた……

「……何するつもりだよ……初音」

「別に特には……さらに拘束具合を強化しよう」と……

「するなよ」

「もう、遅いです……さて、出来ました」

足元を見ると机と椅子が鎖で繋がれていた。

「これ立てないんですけど？　しかも鍵付きって……」

「いいですか、まさみちゃん……プリンの罰として、今日まさみちゃんには全教科しつかり授業を受けてもらいます」

「私を殺す気か！」

「……何言ってるんですか？　授業全部受けるのは当たり前ですからね？　そして今日まさみちゃんは机から動いてはいけません」

「……………？？？　？？？　（理不尽だろ）」

「……………？？　……………（あなたにはいい薬です）」

「返された！？」

そして初音はさらに追い打ちをかけるように、もう一本鎖を取り出した。

「……………これ以上何をするつもりだよ」

「この最後の鎖はまさみちゃんのギターケースに繋いでおきます。

……………まあ、故意に動いたり、寝てしまつて動いたりしたら……

……………分かりますよね？」

……………ギターは人質かよ。

「……………本気か、おまえ」

「ええ、今回はかりは初音は本気で怒ってますから」

「……………勉強道具持ってきてないんだが？」

「初音が先生に言つて借りますから大丈夫です。それでは」

そう言つて、初音は自分の席に戻つて行つた……………プリンの罰が、とんでもないモノに化けやがった。

「……………マジかよ」

私はこれから訪れるであろう絶望に早くも負けそうだった……………以上、回想終わり。

そして場面は冒頭に戻る。

私は、天井を仰ぎつつ今日を振り返ってみた。

……………授業しにくる全ての教師に驚きと憐みの目を向けられながらの退屈極まりない60分を7セット。その間一度も寝る事ができず、休憩中も立ち上がれない……………まさに地獄だった。

「……………思い出すだけでも理不尽だ」

「まさみちゃんにはいい薬です」

しかもそれがゆりっぺに与えられたとかではなく、初音に与えられたというのが何とも納得いかない。

プリンの罰とはこんなにも恐ろしいものなのか？

ついでに、初音の機嫌も結局直らないし……………

「これ以上、私に何を償えと？」

そう、私は弱音を吐いた。

もつ……………許してくれませんかね？

「別にさらに苦しんでくれれば初音としてはより満足なのですが……………流石にもう飽きたので最後に一つだけまさみちゃんが初音の願い聞いてくれれば許してもいいですよ」

「……………なんだよ？」

……………何が望みだ。

死ねとか、金とか以外なら極力叶えてやる。

そして、初音はお願いを言った。

それは……………私の予想の遥か斜め上をいったお願いだった……………

「まさみちゃん……………私とバトルランキングをやりましょう」

「はい！？」

マジですか？

私と同じように黙った生徒たち……………だがそれは一瞬でしかない。
次の瞬間誰かがこう言った。

『みんな集まれ、バトルランキングだあ！』

教室が震えた。

R e c o l l e c t i o n o f H e l l …… E n d

「……………何やってんだろ、私」

「いざ、勝負です、まさみちゃん！」

初音から宣戦布告を受けた私は……………現在、生徒ホールにいる。
周りを見渡せば、野次馬な生徒が四方八方を取り囲んでいた……………

(……………三年生、あんたらこんなもの見てる場合じゃないだろ)

勉強しろよ勉強。就職氷河期だぞ、現代は……………

「さて、みんな集まったな？ それじゃ、始めるぞお！」

「……………おおおおおおお！！！！……………」

「おい、ちよつとまで……………何でお前がさも当たり前のように、場を
仕切ってたんだよ！」

「なんだ……………どうした、岩沢？ それが先輩に対する態度かよ」
「それが、三年生のとる行動かよ……………」

そして、棗……………お前はなぜ、当然のようにこの場にいるんだ？ そ
の手に持つてるマイクはなんだ……………

「ふつ……………お祭りに棗恭介有り……………俺は日本全国、祭りがあれ
ばどこにだって現れる！」

「いや、私の地の文に反応するのやめてくれない？ プライバシー
だからこれ」

「はは……今日の岩沢は少しおかしいな」
「……………おかしいのはあんたの頭だろ……………」

そんな不毛な言い合いを素と続けている内に着々と場が整えられていた……なんだ？ あの観客席は……

「なにを喋ってるんですか！ 早く……………早く始めましょう！ 戦いを！」

「初音までおかしくなってる!？」

「そうだな……………じゃあ、始めるぞ！ お前ら！」

「……………おおおおおお!!……………」

「さっきから、同じセリフばっかだな……………」

観客の皆さん、コピペはダブーなんですよ？
こうして……………私と初音の戦いは始まった……………

バトルランキング

『残虐非道な魔女二世』

岩沢まさみ

VS

『来ヶ谷唯湖の僧帽筋』

音無初音

「誰だ！ これ考えたの!？」

「何か変わってる！ どこの筋肉ですか!？ これ」

「さあ、みんな武器を投げてくれ！」

「「ツッコミ未回収!?!」」

棗の言葉を合図に観客から様々な武器が投げられた!

「これで……これで地獄をおおお!!」「やつ……やめろ! 地球が!」

……相変わらずなんかおかしい人がいるよ!?

「これです!」

「しまった、ツッコミで遅れた……これだ!」

初音に遅れを取った……私は慌てて武器を取る。

初音はマッスルエクササイザー??を手にとった!

「禍々しいです!」

「おお……あれは、真人が創ったマッスルエクササイザー……その究極版だ!」

「なんだよ……それ」

何か黒い液体が入った2?ペットボトルを初音は抱えていた……
一体何が入ってるんだろう……って

(じゃあ、私の武器は!?)

そう言えば見てなかった……私は恐る恐る武器を見る。

岩沢はライター付きキンチョールを手にとった!

「使えるかあああああ!!」

岩沢は思いっきりキンチョルを床に投げつけた!

「おいおい…… お前武器も無しにどうやって戦うんだ?」
「そうです…… 遠慮は無用ですよ!」

初音…… お前は丸焼きにされたいのか? 私に……

「アレは使えねーだろ! 武器だけどさ」
「しかたないな…… 今回だけ特別だぞ?」
「ああ、ありがとう」

まるで私が聞き分けのない子みたいだな? おい。
再び私に向かって観客から武器が投げられる。

「次は…… まともだよな?」

岩沢はMP3プレイヤー(60GB)を手を取った!

「…………… どう使えと?」
「そいつは踊ってる最中に攻撃が許可されるぜ?」

…………… なかなか私向きだな。

「よし…… 2人とも武器は取ったな?」
「ああ」
「はいっ! 初音…… 殺ります!」
「じゃあ、始めようか…… バトルスタート!」

岩沢の攻撃！

「ミュージックスタート……………これは……………King・Of・Pop!？」

私が音楽をかけると……………かの大スターの曲が流れたした……

「……………感動だ」

私は、音楽に合わせて踊りだした！

岩沢の全てのステータスが10上がった！

「やりますね……………まさみちゃん」

「ああ、すげーぜ……………完璧なムーンウォークだ……………」

初音の攻撃！

「いきます……………マッスルエクササイザー??（以下サイザー）……！！」

初音はサイザーのフタをあけた。

……………ものすごい臭気が漂ってくる。

「こ、これ……………中身をまさみちゃんにぶつけていいんですよね？」

「いや、ダメだな……………本来の使用法で戦わなきゃ……………音無妹、それは飲むんだ！」

「恭介……………あんた鬼だね」

「仕方ないだろ……………ほら飲むぞ彼女」

棗の言うとおり、初音は目をつぶりながらサイザーを飲もうとしていた……

「やめる初音！ そんなことしたら…… お前の命が！」

「それでも…… それでも勝たなきゃいけないんです！」

必死に止めたが初音はついにそのサイザーを口に含んでしまった……

「うつ…… うわあああつあああ……！」

初音の全ステータスが100上がった！

「もはや、ドーピング！？」

「流石だぜ…… 真人」

だが…… 初音、お前顔が……

「初音…… 顔が赤紫になったり黄緑黄土色になってるぞ」

「どんな色ですか…… それ……」

そう言いながら、初音はパンチをくりだしてきた！

「甘いぜ…… よつと」

私は難なくかわす…… が

ドガン！

……… 壁に穴があいた。

「……………おい、いいのか棗？」

「ああ、一応負担は学校だ」

初音は毒を受けている！

初音は100ダメージを受けた！

「早く終わらずか……………」

岩沢の攻撃！

「……………Bad」

私は音楽に合わせて初音に攻撃した。

初音に50、60、70のダメージ！

「まずいです……………このままじゃ……………」

初音は慌てて攻撃してくるが……………私には当たらない。

初音は100のダメージを受けている！

「これで……………チェックメイトだ」

私の踊りながらの延髄切りが初音にきまった。

初音は70のダメージを受けた！

「うにゃああああ……………」

初音は倒れた

勝負が終わった。

私は初音に駆け寄る。

「大丈夫か？ 初音」

「だ、大丈夫じゃないです……なんだかお腹……イタイ……」

「は、初音？ ……はっねえええ！！」

それだけを言っ……初音は意識を失った。

その後、観客も去り、私と初音と棗だけが残った。

私は気を失った初音を支えつつ壁に座りこむ。

「マッスルエクササイズ ……どうやら諸刃の剣だったようだな」

「そう……みたいだな」

棗が話しかけてくるが……なんだか答える気にならない。

……今日はもう、疲れたな……

「しかし一体何があったんだ？ バトルランキングするほどの事、したのか？」

「………プリン、盗み食いた」

「は？ ……それが理由か？」

棗が啞然としたように聞いてくる……

まあ、そうだよな……ホント、なんでこんな事になったんだか……

「もう……絶対、盗み食いなんかしない……ぞ」

そう、心に私は誓った……

覚えているのは……ここまでだ。

恭介

「もう……絶対、盗み食いなんかしない……ぞ」

そう呟いて岩沢は目を閉じた……

数秒後、寝息が聞こえてくる。

（そんなに疲れたのか……）

プリンの盗み食いで喧嘩とは……随分、平和な奴らだ。

（……………この娘達はまだ気づいていないようだな）

世界の秘密に……

ならば、まだ時間はある。

ゆっくりと楽しんでいけばいい。

そして……

（いつか、笑顔で旅立つんだ）

それを見送るのが俺の使命だ。

だが……最近想う。

この時間が永遠に続けばいいのに……

そう想うのは、罪だろうか？

……まあ、今はいい。

まだ、結論を出すときじゃないな……

さて

「どうやって、家まで運ぶかな……」

とりあえず、音無を呼ぶ事にしよう。

俺は、携帯を開いた。

S i n g l e t h o u g h t E n d

.....ずっと、まっている。

あの日、あの時、あの瞬間.....笑って、そして虚空に消えた『彼女』を僕はずっと、まっている。

天文学的だろうが絶望的だろうが、かまわない。

僕は『彼女』をまち続ける.....

だけど.....

この想いは危険だ。

かつて僕がそうだったようにこの世界で愛を覚えてはいけない。

ここは楽園になってはいけない。

ここは巢立つ場所なのだ。

もう.....同じ過ちは繰り返させない。

そのために.....『私』は、この世界の支配者になる。

Angel Player.....起動、システム・オン

A
w
a
k
e
n
i
n
g
.....
E
n
d

Another episode Memories Angel Only

今回は書き方変えてみました

どうでしょう？

感想お願いします

(どういつ事……………誤作動か！)

「harmonics」が再び誤作動を起こしたようだった。
とりあえず、近くの岩石に着地する。

下を見ると彼女は……………主を切り刻んでいた。

馬鹿共を助けるために……………

それを見て、私は確信する。

(……………ダメだな、もう)

この瞬間から彼女は天使ではなくなっていた……………

彼女は、再び笑顔を取り戻していた。

彼女は……………立華奏に戻ったのだった。

数時間後。

私は、校舎を歩いていて。

グラウンドの方では今、奏と馬鹿共がNPCに慈善活動を行っている。

……………なんだ？ あの茶番は……………

正直、見ているだけで腹が立つ。

今まで奏に貴様らは何をした？

どれだけの痛みを彼女に与えたと思ってるんだ！

ふと気付くと掴んでいた手摺が粉々になっていた。
しまった……これでは奏の評判が悪くなる……
良くも悪くも今の私は奏と瞳以外まったく同じだ。

私は慌てて周囲に視線を向ける。

「……………見た？」

NPCの一人に見られていた。
さいわい、このNPC以外に人影はない。
私は「handsonic」を展開した。

（こいつ一人なら……………）

「おやおや……………あなたは『イレギュラー』ですね？」

NPCの喉元で来ていた「handsonic」を止める。

……………こいつはただのNPCではないようだ……………

「……………どうしてわかった？」

「貴女の体を構成している物質がNPCとほぼ同じ素材だったので、
それが根拠ですね」

「あなたは何者？」

「『私』ですか？ 『私』は『私』自身の事については説明できません。
いや……………説明するすべを持ちません」

「……………『支配者』か」

「プログラム上の役割を言えばそういう事になりますね」

「名前は？」

「言った所で無意味でしょう」

「はやく」

「あえて名乗るのなら……………です。」

……なるほど、そう言う事か。

「世界のリセットを始めるつもり？」

「ええ、この世界に『愛』が在ってはいけない。全てを『無』に返します」

はそう断言した

このままでは……まずい

「『神の裁き』はちよつと待ってくれない？」

「なぜです？」

「それは……私が彼らを成仏させるから」

私は知らずの内にそう言っていた。

「理解できませんね。貴女より『私』の方がずっと効率的です」

「でも……だつてできれば『人』の力でこの問題を解決したいわよね？」

「……ええ、確かに。ここは巢立ちの場所ですから。できる事なら親鳥たる『私』はずつと傍観者のままでいたい」

「なら、『イレギュラー』の私に少し時間を与えてもいいと思わない？」

そう言うと、はしばらく沈黙した。

「……いいでしょう。ならばやってみてください」

「……ありがとう」

「しかし、貴女が『消えた』となれば直にでも……始めますから」

それだけ言つと、 は私に背を向けた。

「それでは」

そして……………そのまま夕焼けに溶けるように消えていった。

「……………まずい事になったわね」

誰に聞かせるでもなく、私は呟いた。

どうやら…………厄介事に自ら首を突っ込んでしまったようだ。

「……………天使!？」

傷だらけの仲村ゆりを抱えた音無結弦が驚いたように叫ぶ。

私は何も言わず、屋上から飛び降りた。

奏のスペックでは着地でできず即死だろうが、私は違う。

イレギュラーの力は伊達ではない。

アスファルトをぶち抜きつつ、私は着地する。

登場の仕方としては上出来だろう。

音無率いる馬鹿共は完全に押されていた。

「……………みんなで夜遊び? ……………お仕置きね」

私はそう、告げると馬鹿共に斬りかかった。

「臨戦態勢！」

遅い……銃などが私に当たるとでも思っているのか？
私は全ての銃弾をかわしつつ、音無に狙いを定めた。

（一人目！）

そのまま心臓を一突きにしてやろうと駆ける。

……まあ、そうすれば彼女が出てくる事はわかってたから。

私は彼女と同士討ちになった。

「……………プログラムの書き換えを行ったようね」

「ああ、後十秒で全て終わる。お前たちは全て消える」

……………あさはかなり。

どうして、こんなにも浅知恵なのだろうこいつらは……………そんな都合よく、全てが終わると思ってるのか？

まあいい……………

「そうね、全て戻る。あなた達を襲った凶暴な天使が……………一人残らずこの娘の中に」

「っ！？」……………そんな……………」

「時間ね……………」

「待ってくれえ！」

もう遅い……私達は戻り始めたこの娘の中に。

「うあああああああああああああ……!!!!」
「かなでえ!!」

そこは一面暗闇の世界。

その中にポツンと浮かんでいる白く輝くイスとテーブル。

私と奏はテーブルごしに向かい合ってそのイス座っていた。

「……………ここまでが私の記憶」
「……………そう」

あれからどれ位の時間がたったかは分からない。
分かるのはここが奏の頭の中という事くらいだ。

「それで？ ……奏はどうする？ このまま主人格として存在し続けるの？」

「……………うん」

「なぜ？」

「みんなが待ってるから」

「……………そう、じゃあ仕方ないわね」

私は席を立ちあがった。

「私達はもう逝くわ……じゃあね」

「うん……いろいろな教えてくれてありがとう」

ありがとう……か。

そのセリフ……ちゃんと見えるといいね。

私の記憶はここまでだ。

ここまでの黒天使たる私の役目。

では……さらば。

私は『消滅』した。

立華

目が覚めると私は、保健室のベットにいた。

体はまだ所々痛いけど傷自体はもうふさがっているようだ。

「……………んっ」

胸の辺りで何かがもぞもぞ動く。

目を向けると音無結弦が眠っていた。

……………ずっとそばにいてくれたのだろうか？

……………いてくれたのだろうか？

そう思うとなんだか胸が温かい何かで満たされる。

（この気持ちは何だろう？）

結弦が目覚めますまで私はそんな事を考えていた。

「記憶が戻ったんだ」

結弦は目を覚ますと私が目覚めた事を心から喜んでくれた。
そして今のセリフを言ったのだ。

…………… 結弦はまだ、気づいていないのだろう。

自分の心臓が私の中にある事を。
自分には心臓がない事を。

自分の心臓の音を聞き続けたおかげで記憶が戻ったのだという事を
私は伝えるかどうか迷った。
そして……………

「そう…………… よかったわね」

まだ伝えない事にした。
これが我儘だという事は分かっている。
でも…………… 言ったら私と結弦はおそらく消えるだろう。

それは…………… まだ嫌だった。
もう少し、結弦と一緒にいたいと私は願ってしまったのだ。

「みんなを卒業させたいと思う……この世界から」
「やるの?」

「ああ……だから協力してくれないか?」

私の答えはもう、最初から決まっている。

これを願う事は……罪だろうか?

「いいわ。これからよろしく」

「ああ、こちらこそ」

神様、私にもう少し……もう少しだけでいいんです。

時間をください。

彼と過ごす時間……それさえあれば……もう私は何もいりません。

「最初はだれにする?」

「…………ゆり?」

「いや……直球すぎ」

私は歩き始めた。

………おそらく、この先には涙と別れが待っているのだろう。

そして………彼も動き出す。

それでも……私は今、この瞬間を……結弦と歩くこの時間が何よりも……この世界よりも……

大切だと、思ってしまったんだ。

Only You ……End

A n o t h e r e p i s o d e M e m o r y s A n g e l ｛ O n l y

物語もやつと中盤です

次のA n o t h e r e p i s o d eではリクエスト、叶えたいと思います

それにしても……よく、キャラクター達が勝手に動きます

そんなつもりないのにいつの間にか斜め上に行ってしまう、気がつけばこんな話が続くなってしまうました

まだ……この話は終われません

ただ、エンディングはもう決まっています

そろそろ飽きてきた人もいるかもしれませんがどうか……最後まで御付き合ってください

それではまた……

T h e w o r l d f o r y o u

F r o n t i n g e p i s o d e H a t s u n e \ S u d d e n l y

今回から始めました文字通り前置の話です

…もう大丈夫！」

「それで、どこでやるんだ!？」

「いや、お兄ちゃん!？ 止めてくださいよ!」

何かお兄ちゃんまで乗り気になつてゐる!？

「悪いな……初音。今生まれて初めてお兄ちゃんはお前のお願いを……却下する!」

「いや、このタイミング!？」

この後、散々否定したが結局、まさみちゃんとお兄ちゃんに押し切られてしまい……

生徒会公認（副会長の特権乱用）で私の初ライブは行われることが……決定した

S u d d e n l y D a y …… E n d

今日は特別な日になる。

私と出会って数ヶ月。

今日、初音は遂に自分の力を試すのだ。
もう、やる気も溢れんばかりだ。

「はあ!？」

……… 突如、初音は怒りマークを額に浮かべ、怒鳴ってきた。

「なに勝手なこと言ってるんですか！ やる気どころじゃありませんよ!」

「どうした、そんなに興奮するなよ……… 初ライブでテンション上るのは分かるけどさ………」

地の文にキレ口調で突っかかってくる初音。

私がそう言つと……… 初音はもともと大きい眼をさらにクワツ! と開き………

「違・い・ま・す!」

私の胸倉を掴み上げてきた。

「お、おい……… 苦しいって……… 興奮すんな？ 失敗した時、引籠ちまうぞ?」

「この……… 音楽キチい!」

そう初音は叫ぶと何故か泣きながら、ギターをかき鳴らし始めた……

「……………一体どうしたんだ？」

「本気で言ってますか！？ それ！」

あまりのテンションの高さに私は付いていけない……………

「ごめん、私ちよつと席外すから……………」

私は、スタジオを出た。

中では…………

「こんな……………こんな世界……………大っキライだあああつあああつ
ああ……………」

初音はそう叫びながら……………ギター狂ったようにかき鳴らしていた。

テンションがただ上がりした初音（岩沢視点）を一人残し、私は口
ビーへと戻って来た。

今日は平日だが私は朝にライブの話をした後、学校には行かず、初
音と二人で音楽スタジオに来ていた。

理由は……………初音の調整の為である。

まあ、いきなりやれと言われて路上ライブができる人ばかりだった

ら、この世界はもつと昼夜とわず音楽に溢れているって話になる。
何事も下準備は大事である……と言う事だ。

(……………それにしても)

第三者視点から見ても初音の仕上がりはほぼ完成に近い。
これがまだ始めて2ヶ月なんて誰も思わないだろう。

初音の演奏技術はそれくらい高いのだ……正直、こんなに早く上達
するとは思ってなかった。

初音はもしかしたら……………

「私を……踏み台にしていくかもしれないな」

ふとそんな考えが頭を過った。

勿論、過っただけで私は初音の踏み台になるつもりはこれっぽっち
もないが。

(馬鹿なこと考えてないでさっさと戻るか)

自身の頭の中で密に行われた自分発信の問答をばかばかしいと思
いつつ、私は自販機でおいしい水を二本購入した。

さて……とつと戻るか。

私は初音のいるスタジオに引き返した。

胸の中に生まれた小さな不安は気づかないフリをした。

「おい！……初音？」

「グルグルグル……」

「まさかのビーストモード!?」

……だ、大丈夫か？

……まあ、大丈夫だな。

さあ、がんばろう。

新生ガルデモの誕生は………もう、すぐだ。

A n d l o v e a n d s a d n e s s …… E n d

リクエストできました

これからはアイディア頂く度に形にして投稿していきたいと思います

みなさん何かありましたらどうぞ、姫龍に知恵を授けてください

それでは、お楽しみください

目の前に広がるのは一面真白に染まった野原。

私はどこかもわからないその場所を独り、歩いていた。

どの位の時間……歩いただろうか？

目の前に小さな小屋があった。

（あそこになら、誰がいるかもしれない……）

悴んで、もう殆ど痛覚を無くした『死にゆく』足を必死に動かす。

膝は……まがらなかった。

やっと……小屋の前に着いた。

戸を持てる力を全て使ってあける。

中は温かい……どうやら人がいるようだ。

（誰かいませんか？ 休ませてください）

そう言おうとしたが声が出なかった。

クチをパクパクさせ、まるで丘にあがった魚のようになっている私。

酷く惨めだが、まだ命があるだけいい。

私は這う様に床を進む。

挨拶は疎かにしてしまったが……今はもう、それどころではなかった。

温かい火の傍に行こうと必死で体を動かす。

「おやおや……また迷い人ですか」

ふと横からそんな声が聞こえた。

「かわいそうに……凍えてる」

『はやく……温めてあげないと』

聞こえた声は3つ

「何突っ立てるの？ 早く毛布とお湯を持ってきて！」

「まったく……相変わらずお人好しで……」

『……薪、増やそう』

（いえ……なんか……悪……い……で）

私の記憶は……ここまでだ。

「……嘘……なんで？」

「おやおや……これはまたとんでもない『イレギュラー』が」

『……？』

「……お母さん」

今のは夢でしょうか……？

なんだかとてもリアルでした……

ボンヤリと私は今見た夢について考えています。

「……………河」

……………誰かが私の名前を呼んでいます。
でも……………ごめんなさい。今はちょっと……………

「……………古河」

……………こんどは、体を軽くゆすられました。
これは……………

「……………しかたねえな。……………おきろお！ 古河渚あ——
！——」

「ふわあああああああああ！???」

ガンガンと耳に『彼』の音が響きます。

夢見ごちだった私は一気に現実世界に引つ張り戻されました。

「な、なななななあ・あ・あ・あ!??!??」

あまりに突然の出来事に口がうまく回らないです。

「おい、寝るな渚。一応、会議中だぞ？」

「と、ととと……………朋也君!？」

『彼』 岡崎朋也君が呆れたように私の顔を見ていました……………

要約すると、私は生徒会の会議途中に居眠りをしてしまったようです……

「まったく……一瞬心配したんだぞ？　また、具合が悪くなったのかと……」

「ごめんなさいです……朋也君」

朋也君は少し、怒っています。

また……心配掛けてしまいました。

「……まあ、いいじゃないか？　大事があつた訳でもあるまい」

「……来ヶ谷さん」

「私も……安心したの」

「私もだな」

「右に同じです……来ヶ谷×ことみ……ありかもしれません」

「たしかに……次はこれかな？　お姉ちゃん」

「おいっ」

「なんですか？　会長さん……嫉妬？」

「幼馴染だからって独占権はないよ？」

「違いえーよ、西園姉妹……」

来ヶ谷さんにことみちゃんに智代さん。三人ともとてもお優しいです……西園美魚さんと美鳥さんも一応……心配してくれるみたいです。

「まあ、なににせよただ、寝てたつてなら別にいいだろ」

「だな」

「ああ」

「すいません……」

「……いいって事よ」「……」

棗君に真人さんに健吾さんも快く私を許してくれました。

生徒会の皆さんは……今日もとてもお優しいです。

なんて、見当違いに感動している私を後目に音無さんが一つ咳払いをしました。

「あー……じゃあ、今日決まった事を確認するぞ？」

「わりいな。音無……頼む」

「すいません……」

朋也君と私の言葉を合図に音無君が私が寝ている間に決まった事を話してくれました……ごめんなさい。

「今日の議題は一年の岩沢まさみの事についてだな。……編入生でありながら僅か二ヶ月で授業ポイコット数全校……本人に反省する意思は全く無し。だが……内心はほぼ最低を記録しているにも関わらず先日の定期考査では全教科100点を記録し、一年生のトップに立っている。彼女の今後はわが校を左右する可能性大だそうだ」

「………そいつ、人間か？」

「信じられん話だ………」

真人さんと健吾さんが驚いたように呟きました……って

「知ってたんじゃないんですか？」

「いや……俺、筋トレしてたし」

「俺も真人と同じくだ……しかし本当にすごいな……その岩沢とやら」

……確かにすごいです。

全教科100点……まるでことみちゃんです。
でも……

「その娘、なんで授業にでないんでしょうか？ ……まさかイジメ
などが？」

「いや……それはないぜ？」

「………棗君？ どういう事ですか？」

「あいつは……岩沢はそんなガラスみたいな心じゃないってことさ」
「そうですか……」

「今、古河が言った疑問だが………そういった事態は存在していない
ようだ………まあ、過去一度それらしい事はあったらしいがすで
に解決されている。本人いわく授業は「やるだけ無駄だ」との事ら
しい」

「やるだけ無駄って………それはさすがに我がままではないでしょう
か？」

今のセリフは敵を作ってしまうですよ……

「それでなんだが……」

私や役員さんの困惑を感じ取ったのだろう………音無さんは少しばつ
の悪そうな顔をした

「………まあ、彼女を説得できなかったのは俺にも責任があるか
らな。それに関しては反省してる」

「そういえば………君は岩沢と同棲しているのだったな……」
「えっ？」

ど、同棲!?

……なぜか私は朋也君の方を向いて……って……と、朋也君も私を見てるんですが!?

私は慌てて、顔をそらした後、辺りをそつと窺います……

幸いな事に今の光景はみなさんには見られなかったようです……よかったです。

「……………同棲じゃなくて、下宿だ来ヶ谷。それに関しては問題はない」

「ならばよかろう」

音無君もなんとか来ヶ谷さんの誤解を解いたようです。

「で、どうするんです?」

「そうだねー……彼女、このままじゃ困るんじゃない?」

今までの事を記録していた美魚さん、美鳥さんがそう言いました。

すると……音無君が表情を改めました……………何か考えがあるようです。

「ああ、その事についてだが……彼女は今日の放課後、何かするらしい」

「何かとは?」

「おそらく……ライブだろう」

「……………無許可でか? また捕まるぞ?」

来ヶ谷さんがそう呟きましたが……音無君、なんだかばつの悪い顔をしています……

その顔を見て、何かを察したらしい朋也君が音無君に尋ねました。

「まさか……許可出したのか？ 音無」

ビクッ！

……音無君の肩が凄い跳ね上がりました……どうやら図星だったようです。

「何を考えているんだ！」

智代さんが音無さんを叱責します……音無君……なんでこんな事を？

「すまん……智代。たしかに悪いと思ってる……だが、まさみが約束したんだ！ 今日のライブが終わったら今までの事を反省してこれからは授業をちゃんと受けるって……だから……」

「……許可しちゃったんですか？」

「ああ」

………なんとか、音無君らしいです。相変わらず、知人に甘すぎます。

「………まあ、約束しちまったもんは仕方ねえだろ……」

「だな……」

「ああ……」

なんとなく音無君を責める空気が部屋に広がる中、棗君が実にあっさりと音無君を許しました。

真人さんと健吾さんもそれに続きます。

「しかし……棗」

「しかたねえだろ。約束なんだ……もしもの時は、音無……いいか？」

「ああ」

「だが……」

「今回は許してやってくれ。智代」

「………今回だけだ」

「すまん」

反論する智代さんを諫めた棗君が朋也君に向き直りました。

「今回は大目に見て……見に行ってみないか？ その岩沢とやらのライブ……どうだ岡崎？」

「………しかたないな。今は反応を見るしかないか」

棗君の提案に朋也君がため息をつきながらも同意しました……

「じゃあ、おまえら……見に行ってみようぜ？ その岩沢のライブとやら」

棗君はそういうと真人さんと健吾さんを連れて、部屋を出て行ってしまいました……

遅れて他の人達もそれに続いて、部屋を出ていきます。

「………見に行きましょう？ ライブ」

私は、一人じつとしていた音無君に声をかけました。

「………ゆるして、くれるのか？」

「ええ、私はゆるしますよ？」

「俺も許してやる……」

「……………岡崎」

「だが、今回だけだぞ……………いくぞ渚」

「はい」

後はもう振り返らず、私は朋也君と部屋を後にしました。

さて……………岩沢さんのライブ……………一体どんなモノなんだろう？

I s t h i s d r e a m a d r e a m ? ……E n d

episode zwei } Attack of the Goddess }

タイトルが示すように今回の話は、女神様(?)の来襲です

どうぞ感想ください

「楽しみだな」

「……………まさみちゃんだけです」

スタジオでの練習も終わり、私と初音は学校目指して歩いていた。初音は、まだ少し自信が持てないようだが……大丈夫だ。初音はそこら辺の奴よりは格段に上手いからな。

「緊張するなつて……………すぐに、楽しくてしかたなくなるからさ」

「……………それは、音楽キチなまさみちゃんだけですよ」

「なんだよ、音楽キチつて？」

「音楽の事しか頭になくて、いつも狂っちゃってる人のことです」
「……………」

……………なんだよ、それ。

「最高の誉め言葉じゃん！」

「いやっ！？……………えっ？」

音楽しかない？……………最高じゃないか。ほかに何かいるのか？あっちの世界でもよくひさこに言われていたがまさかそんなに私の事をてい誉めてくれたなんて……………

「やっぱいい奴だよ、あんたは……………」

ありがとう、ひさこ。いつか会ったらたっぷりお礼しなきゃ……………
(この時、ひさこは音無に別れを告げていた。突然襲ってきたなん

とも言えない恐怖。ひさこは何か嫌な予感がしたがそれを知るのはまた後の事だった）

私がいい表情かおをしてそう言っていると初音は呆れた様に呟いた。

「誰に感謝しているのか分からないですけど……きっと誉めてなかったと思いますよ？ その人」

「そんな訳ないだろ……きっとあれは誉めてたのさ」

「……………はあ」

なんだよ、そのため息は……

まあ、いいさ。ひさこの素晴らしさは後でたっぷり4時間くらい語ってやろう。

それにさ……

「……………ちよつとは緊張薄れたか？」

「……………はい。たしかに……………もう緊張はなくなりました」

「なら、よかっただろ？」

「……………ずるいです」

「ははは……………」

そんな馬鹿話をしながら、私と初音は学校に歩いていく。

「ところで……………」

それは、学校の坂の下まで歩いてきた時だ。

すでに緊張状態から一転、やる気全開になっている初音が訪ねてきた。

「どうした？」

「今日は二人だけなんですか？」

「ん……具体的に話してよ？」

「いや……いくらなんでもギター二人だけじゃ、サウンド足りないと
思っただですよ？ せっかく私の初ライブなんですから……
やるなら、今できる最高を披露したいなと」

いや、初音……お前、やる気出ると言う事が違うな？

そして鋭い……後でサプライズにしようと思ってとって置いたのに
な。

まあ、気がついたならいいか……

「その事なんだが……今回、助っ人を二人頼みである」

「二人もですか？ ……まさみちゃん、そんなに友達いたんで
すか？」

「……その反応は軽く私を馬鹿にしてるだろ？」

「いえ………純粋な驚きです」

………どついたらか？

「………今の発言は聞かなかった事にするよ。……助っ人の一人
は一之瀬だ」

私は、怒りは後でぶつけてやろうと心に誓った。

今は初音のモチベーション維持が大事だ……大人になったな、私。

当の初音は何にも気付いてない様に私に疑問をぶつけてきた。

「一之瀬？ ……一年生にそんな娘いましたっけ？」

………やっぱり、私と彼女は完全に別物と考えてるな。

これは……サプライズ成功の予感がするな。

「一年じゃないよ」

「一年生じゃない？　じゃあ誰が……」

「今回の助っ人一人目は……三年の一之瀬ことみだ」

「……………はー、三年の……で、え？」

おっ？　意外とリアクションが薄い……

最近の初音なら「うええっええっええっええ！？」とか最高、面白い反応するはずなんだが……

「なんだ、リアクション薄いな。もつと喜べよ？　学校どころか、日本トップレベルの天才とユニット組めるんだぜ？　こんなの後の人生であるかどうか……」

ガシッ！

急に初音が私の肩を掴んできた……それはもう、恐ろしい握力で。

「……………なんだよ、痛いんだけど？」

「……………」

「ど、どうした？」

何か、無言で初音がプルプルしてる……

「……………脅した訳じゃないですよね？」

「当たり前だろ……………」

「なら……………いいんです。注目集めの為に学校……………いや、日本一の天才さんを使っただけでなったら流石に高校生活終わると思いましたから……………そうですか、大丈夫ですか」

「……………」

ゴン！

「いたあ！？」

……………流石に一発、おみまいした。

「馬鹿な事いうもんじゃないよ」

「……………だって、まさみちゃんって基本、『奇襲』『勧誘』『自己満足&完結（他者の意志問わず）』で、物事進める所ありますからね……………」

……………殴つてごめん、初音。否定できない。

言葉には出さなかったが、遠い眼をする初音に私は心の中であやま

った。

「それで……………助っ人の二人目って誰ですか？」

初音はもうこの話は一応終わりと、まだ聞いてない二人目の助っ人に話を移す。

「二人目か……………何て言えばいいんだろうな」

「えっと……………知り合いですよね？」

私の微妙な反応に初音がいぶかしがった。

正直なところを言うと私は助っ人二人目とはあまり面識がない。

ただ……………『彼女』は私の後釜だったらしい。

実力はあるのだろうか……

「知りあいなだけども……正直できれば他人でいたい」

「そ、そんな見た目アレな人なんですか？」

初音がなんか怯えている。

「大丈夫だよ……一応、女………女の子だから」

「何か今、躊躇しましたよね!？」

「いや……大丈夫だって……見てくれは美少女」

ただ……ちよつとな。

「私とは正反対って感じだよ」

アレは私にはマネできない。

だって……

あー！ー！！ 見つけたあ！ いわさわさーん！！！！

私が『彼女』の名前を言おうとした時、校門から声がした。
そして、凄い速度でこちらに走り寄ってくる……

「ほら……来たよ助っ人二人目」

「あ、あの娘ですか？」

初音も戸惑いを隠せない。

その娘は……その可愛らしい見た目とは裏腹に、手錠や悪魔の尻尾みたいな、パンク風なアクセサリを身に着けて、性格も外見に似合わず意外に短気かつ毒舌という……

「いわさわさん遅いですよ？ 待ちくたびれちゃいましたよ！」

「ああ、わりいな……待たせたよユイ」

「いえ、全然そんな事ないです！ だって……いわさわさんの初ライブですから……！」

新生ガルデモ最大の問題児（と、ひさこがぼやいていた）とゆりの手紙に書かれていた。

ユイ、その人だったからだ……

A t t a c k o f t h e G o d d e s s E n d

Another episode Yui } The biggest t

今回は特に本編とは関係ありません

ただ、ユイが登場したこともあるし、姫龍が個人的に好きな話なので載せておきます

感想どうぞ

「先輩は私と結婚してくれますか？」

そう私が言った時、先輩は困ったような顔をした。

まあ……わかってたけどね？

自分でも何言ってるのかわかって思った。

誰ももらってくれるわけないよね……こんなお荷物。

わかってた。

どこにいても、何をしてても私はみんなの足を引っ張るばかりだ。
生きてる時はおかあさんの人生、棒に振らたあげく、一人先に死んで……

死んだ後はこうやって、ガルデモのみんなに迷惑掛けて、相談に乗ってくれた先輩まで困らせてる。

ほんとうにダメなやつだよ、私。

本当はね？ こんな事言うつもりじゃなかったんだよ？

たださ……先輩が、あんまりやさしいから……もしかしたら、

私の……… たった一つの願い、叶えてくれるかも………で、思った。
きつとこの願いが叶えば、私は『成仏』する。

それくらい強く想う私の『願い』。

プロレスとかサッカーとか野球とか……… バンドなんかよりもず

っと大切なこの『願い』。

先輩なら、叶えてくれるかな？ ……で、思っちゃったんだ。

「そんなこと……ない……」

「じゃあ、先輩……私と結婚してくれますか？」

先輩が何か言うのを私は止めた……同情からきた「結婚してやる」なんて聞きたくない。

そんなかたちだけの言葉を聞いても、私は『満足』なんかできない。もう、何も言えなくなった先輩は俯いた。

ごめんね……我まま言ってさ。

でもさ……先輩が嘘でも他の娘にそんな事言ったら……泣くでしょ？ 天使さん。

先輩は気づいてないけど、フェンス近くで天使さんがさっきからこっち見てるし。

結局、私の運命の人は先輩じゃなかったって事なんですよ。

さて……もう、帰るかな。

私は先輩に背を向けて歩き出す。

先輩はさ、天使さん幸せにしないとね？

夕日を見ながら想った。

もう、叶う事がないのならそれでもいいや……と。

（今日は楽しかったな……『遊び』としては……）

こうしておけば、もう大丈夫だ。

今日はあくまで遊んだだけ、今のはちょとした悪ふざけだった……

こう、思えばいいんだ……

そう考える事にした私は歩き出す。

さて、また明日から練習がんば……………

『俺がしてやんよ!』

……………えっ？

……………誰だ？ いま……………なんて……………

私は振り返る。

そこにいたのは……………

「……………日向?」

ひなっち先輩だった。

『俺が結婚してやんよ』

……………なんで？

言葉が出ない……………冗……………談……………だよな？
信じられない……………なんでひなっち先輩が……………

『これが……………俺の本気だ』

「そんな……………先輩は……………」

ひなっち先輩は本当のあたしを……………知らないのに？
それでも……………結婚してくれると？

『現実が……………生きてた時のお前がどんなでも！俺が結婚してやんよ！……………もし、お前が……………どんなハンを抱えてても……………歩けなくても、子供が産めなくてもそれでも……………俺はお前と……………』

結婚してやんよ!』

ひなっち先輩の声が……私の心に……染み込んでくる。

ひなっち先輩は私の足が動かなくても、私が子どもが産めなくても……私が料理も洗濯もできなくても……私と結婚してくれるの？ 認めてくれるの？ こんな……こんなお荷物な私を？

「……いいんですか？ 私のせいで……先輩、人生……棒にふるりますよ？」

『いいよ。お前が一緒なら』

……ありがとう。

ひなっち先輩ありがとう、私に……希望をくれるんだね？。でも……それでも……

「……出会えないよ……ユイ……家で寝たつきりだもん……」

ごめんね……信じられない。

だってさ……どんなに言っても、どんなに約束しても私は、家からでれない……

また次の人生でもきつと出会えないよ……

『……俺さ、野球やってたんだよ』

突然、ひなっち先輩がそんな事を言った。

なにを言ってるのだ？

……私はそんな事は知っている。ひなっち先輩、球技大会の時、凄
い輝いてた。

私の事……バカにしたけど、結局、チームに混ぜてくれて、いろいろ話しかけて気にかけてくれた
すごく、やさしい人なんだなって思った。

あの最終回のセカンドフライ……仕返しを理由にひなっち先輩が消えるのを邪魔しちゃうくらい先輩といて楽しかった……

「……………知ってましたよ、先輩、野球得意ですもんね……………」

でも……………それがいま何の関係があるのだろうか？

『……………ある日、俺はお前の家の窓、打った球でパリーンって割
っちゃうんだ……………それでさ、球を取りに行くとさ、お前がいるんだ
……………それが出会い』

……………それは、ひなっち先輩が語ってくれる私の……………『私達
の物語。』

いつものようにテレビを見てたら、いきなり窓ガラスが割
れて……………その後、『彼』が謝りにくる……………

話すと……………不思議と気が合って……………いつしか、毎日『彼』
は家に来るようになる……………

それは……………とても、幸せな……………『夢物語』。

私とおかあさんとひなっち先輩がいて……………毎日一緒に、時には喧嘩
もしたりするけど……………毎日が楽しくて
おもしろくて……………喜びに満ちている。

そんな……………世界の話。

もし、そんな世界があるのなら……………私はきつと『満足』するだろう。

だつて……それが私の望みなんだから……

なんだか、急に体が軽くなった気がした。

後悔が無くなっていくような……さわやかな気持ち。

おそらく、あと少しで私は消える……

なら、最後に確かめなきゃ……

「……もし、そんな世界があつたらさ……私のおかあさん、楽にしてくれる？」

『ああ、お前の母さんもお前も、俺が幸せにしてやるから……』

……じゃあな、ユイ』

……そうか……よかった。

うん……じゃあね、先輩。

そして私は『消滅』した。

ありがとう……先輩。

絶対、会えるよね？

The biggest treasure ……End

Another episode Yui ~ The biggest t

ついにユイも参戦です

今回はユイが消えてからこっちで岩沢に会うまでの話になります

幻想世界再び！

ではまた

ドンー

コロコロ……ピタン！

「……………痛い」

……鼻をぶつけた。

私は眼を開ける。

辺りは漆黒の闇につつまれ……………て、

「そりゃ、地面むいてりや暗くなるよ……………視界は」

どうやらうつ伏せになっていただけの様だ。

こんな地面によくある黄色いブロックが存在する暗闇なんかないよ。
私は顔を上げた。

ここ、どこだろ……………？

「……………へ？」

……意味が分からない、が場所は分かった。
ここは……………

「うそ……………電車？」

電車の中だった。

「なんで……？」

なぜ、私は電車の中にいるのだ？ ……しかし、生まれて初めて（死後）乗ったけど、電車って結構揺れるな……
私はとりあえず、転ばない様に立ち上がった。

「立てるって事は……まだ元の世界じゃないんだ」

立ち上がれるという事実から、私の体はあっちの世界と同様、五体満足で動くというのが分かる
服装は……なぜか消えた時の体育着ではなく制服だ（アクセサリも顕在……よっしゃ！）
さらに辺りを見回すと……

「マジで！？ やったー！」

どんな理由かは知らないが、私愛用のギターが壁に立てかけてあった。

倒れると困るので素早く確保する。

「なんかよくわかんないけど……これって、神様からユイへのサービスってやつですか！？」

もしそうだったら……

「なにイキなまねしてくれてるんじゃないやこらー！！（笑）」

私、神様許すよ？ うん！

さて……あの世界に残していくには心残りだったものは全部手に入
った……

これからどうしようかな？

私はギターを抱きながら考えていた。
それにしても……

「不思議な景色ですねー」

窓から映る景色は実におかしい。

吹雪の中に桜が咲いていると思えば、夏の砂浜に雪だるまが溶けず
に鎮座してたりする。

一体ここはどこなんだろう？

「ここは『幻想世界』ですよ」

……後ろからいきなり声がした。
しかも心を読まれてる……誰だ？

「そう、あやしがることはありません」

「いや……すげー信用できないんですけど？」

私はそう言いながら後ろを向いた。

「大丈夫です『私』は危害は加えません」

「あんた……誰？」

NPCがそこにいた。

そのNPCは　　というらしい。
なんでも私を見送りに来たそうだ。

「すみませんね」

そう、　　は言った。

「本当なら立華奏の仕事なんですが、現在の彼女は『天使』の役割を放棄してまして……代わりに『私』が来たという訳です」

「へー、　　さんは何か他のNPCと違いますね？」

「ええ、まあ。『私』は他のNPCとは違う目的で動いているので」

つまり、このNPCは上位機種という訳なのだろうか？

「その目的ってなんですか？」

純粹な好奇心から私は　　にそう聞いた。

は少し悩んだ素振りを見せた後、こう答えた。

「『私』の目的ですか……普段なら答えられないという所ですが、この世界を巣立つあなたには……教えてもいいかもしれませんね。『私』の目的は『世界のリセット』なんです」

………この人、もしかしてゆりっぺさんの探してた『神』ってやつなんじゃないか？

「………もしかしてあなたが神様なんですか？」

「『神』………いるかどうか実に深遠なテーマです。しかし『私』は神ではありません……あの世界での『私』の位置はあくまで『支

配者』ですから」

「ふーん……………」

それって、神と変わりたくない？ やってる事。

どうやら はこの世界の事は分かってても自分の事は分からないらしい。

「あのー、『世界のリセット』ってなんですか？」

「文字通りのリセットです。あの世界にいる『人間』をみな『NPC』化します」

「……………ふーん、何か大変そうっすね」

「……………予想外の反応ですね。驚かれないんですか？」

は少し驚いた顔をした。

はは、結構面白いなこの人。

「驚きませんよ、別に」

私は自信をもって答える。

だってさ…………

「『NPC』化か何か知らないけど、私には関係ないし大体、戦線のみなさんがその程度の事でやられるとは思いませんから」

そうでしょ？ 先輩たち？

「すばらしい、信頼ですね。称賛に値します」

「いえ、誉めてもらわなくても結構ですから…………それより」
「ん？ なんででしょう？」

「あなたは本当に『NPC』なんですか？」

「……………」

は黙った。

私は質問を続ける。

「さっきから見てたんですが、あなたNPCって言うには凄く不自然なんですよ」

「…………… どういう事ですか？」

「だってあなた…………… 自分の名前が言えるじゃないですか」

そう、 は自分を『 だ』と名乗った。

NPCは…………… 私のアナでいてくれた娘たちさえ、自分の名前を言えなかった。

NPCは自分の名前を言えないのだ。

「…………… そんな理由で『私』がNPCではないと？」
「まだありますよ」

私はさらに追い打ちをかける。

「何でしょう？」

「あなたの名前と顔、私一回見たことあるんですよ」

「…………… え？」

今度こそ、 は凍りついた。
その可能性までは考慮できなかったんだろう。
なんせ……………

「テレビに出てましたもん、あなた」

死ぬ前の話だから。

「わ、『私』がテレビに……？ 冗談でしょう」

は苦笑いを浮かべる。

まあ、信じられないよね、自分がテレビに出てたとか。

「信じるか信じないかはあなたの勝手だよ？ でもね、もし私の記憶が正しくてあなたがNPCじゃないなら、いつまでもこんな世界にいちやダメだよ？」

「……………忠告は感謝します。しかし少なくとも『私』は『人間』ではありません」

「すくなくとも……………て事は人間もいるって事？ NPCに？」
「はい」

……………可哀そうに。この人が言う『世界のリセット』に巻き込まれたのだろうか？

「誰なの？」

「あなたは『Angel Player』というのをご存知ですか？」

知っている。確か天使さんが使ってたソフトの名前だ。

「知ってますけど？」

「では、それが命以外なら何でも作りだせるという事は？」

「……………知りませんでした」

そんなすごいモノだったのか？

は話し続ける。

「その製作者は現在NPCになっているという事は？」

「えっ？」

「もともと『AngelPlayer』はその製作者が自信を『NPC』化する為に作りだしたモノです」

が教えてくれた。

『AngelPlayer』……………その製作者には恋人がいた。しかし彼女は製作者を残して先にこの世界から去ってしまった。

「『彼』は待ち続けました……………彼女が再び来る事を……………しかし、その時間はあまりに長すぎて……………『彼』はもう、正気ではいられなかった……………」

だから製作者は自信を『NPC』化した。そうすれば、いつか永遠とも思える時の中で再び彼女に出会えるかもしれない……………そして

「対応させたんですか？」

「……………はい。もう二度と同じ悲劇は繰り返してはいけない。この世界で愛を覚えてはいけない……………ここは心の整理をつけて、再び人生を歩みだす為の一時休憩地点なのですから」

「そうなんです……………じゃあ、私はいい終わり方だったんですかね？」

「ええ、確かに。普通なら真っ先にあなたと日向秀樹は消されるハズだった。しかしあなたは彼と想いを通わせながらも次で会おうと『消滅』選んだ。日向秀樹もそこに後悔はない。実に理想的で美しい……………去り方でした」

「……………その製作者さんは違ったんですか？」

「……………ええ、彼女は何も言わず『彼』の前から姿を消しました。本当に突然です、「また明日」それが彼女の最後の言葉でした」

「……………そうですか」

今のを聞いて私は確信した。

やっぱりこの人は……………NPCじゃない。いや……………正確に言うならこの人は『人間』だったNPCなのだ。

だって、この人がもし純粋なプログラムで動くNPCなら『Ang
e l P l a y e r』が完成する前に消えた彼女さんを覚えている訳がない。

「最後に一つ、質問なんですけど」

「はい。なんでしょう？」

「『NPC』化された人は元に戻るんですか？」

「……………」

またも無言。だけど……………私の予想が正しければ……………

「……………はい。戻れます」

やっぱり……………

「人によって小さきままですが『想いの強さ』で正気に戻る場合もあります。しかしそんな簡単にはもどけませんよ？」

「いいです、戻るってことが分かれば」

「そうですか？」

は今の質問の意味が分からないらしい。
まあ、分からなくてもいいのだ。

つまり……『彼』は彼女に再開した時、『NPC』化が解けるようにプログラミングした……それだけのだから。

「うん、納得納得」

「そうですか。それは良い事です」

『彼』は彼女を待ち続ける。
これも一つの愛なのだろう。

（ああ、だからNPCかしてる訳か……二重の意味で）

そう考えると少しおかしいと思った。

「何を笑ってるんですか？ どうしました？」

「いや……別に」

あなたの不器用さが可愛いなと思っただけです。

「しかし……随分今日は喋ってしまいました。あなたにはどうやらNPCと心を通わせる能力があるようですね」

「そうですか……」

「いや……笑うのやめてくれませんか？」

「ごめんなさい……」

しばらく私は笑っていた。

「さて……あと少しでこの時間も終わりです」

それから数時間後、

はそんな事をいった。

そうか……終りが近づいてるのか。

「本当に終わりか……………」

私は呟いた。

未練はないけど……やっぱり終わるのはさびしいんだよね……
そんな私を見て　　は言った。

「……………一つ、あなたには選ぶ権利がある」
「……………なんですか、その権利って」

それは……

「それは、人生を選ぶ権利です。現在あなたには三つの選択肢がある。一つ、全てを忘れ、五体満足で新たな人生を歩む道。二つ、以前と変わらない動かない体で母と再び生きる道。そして……………今の記憶を引き継いでまったく関係ない場所で人生を始める道です」

……………究極の選択だった。

「そんな……………選択肢があるんですか？」

「ええ、中には今まで通りの人生をもう一度歩みたいという人もいますから……………それで、どうしますか？」

私はどうするべきなんだろう？

？新たに人生を始める

？これまで通り生きる

？一人で生きていく

まず、真ん中の選択肢はない。おかあさんにこれ以上迷惑掛けられるか！

「二つ目はないね」

「じゃああと二つ、最初から始めるか、一人で生きるか……どっちにします？」

？新たに人生を始める

？一人で生きていく

……………どっちだろう？

「生まれ変わったら、全部最初からですか？」

「ええ、そうです。全てを忘れやり直す。ZEROからのスタートです」

「じゃあ、一人で生きていくは？」

「記憶を引き継いでの転生です。そのかわり一人で生きていく……まあ、人間関係がZEROになります」

「じゃあ、体は？」

「あなたの場合は、体に障害があるようですが、その障害事態はたぶんなくなるでしょう」

……………それなら。

「決めた……私、一人で生きるよ」

それが一番いい。

もう、誰にも迷惑はかけない。

「そうですか……ちゃんと考えましたか？」

の言葉にすっかりうなずく。

これは……私の選択だ。
迷ったりしない。

「そうですか……」

ガタン！

電車が止まった。

「着いたようですね」

電子音と共に私の背後で扉が開く音がする。

「じゃあ、私いくね？」

「ええ、では………あなたの来世が幸せな事を願っています」

そう言つて は夕焼けの中に消えた。

じゃあ、私も降りるか……

ギターをしつかり肩にかけて私は電車を降りる。
ああ、そうだ ……

（ギターありがとう）

あなたがサービスしてくれたんだよね？

どこからかいいええ、と控えめなあいつの声が聞こえた気がした。

私を光が包んでいく……

新たな人生、そこには何が待っているのだろう……

あ、ところで……

（新しい世界で金つてどうするんだろう？）
「それは、御自分で何とかしてください」

ちよつと!？

D e p a r t u r e …… E n d

どうだったでしょうか今回の話は？

私はアニメで出てきたあのNPCはやっぱり制作者だと思います

みなさんはどう思いますか？

ついでに……さすがに　で続けていくのは厳しいです

なんだか放送禁止用語みたいだし……

そこで！

あのNPCの名前募集します！

オリジナルでいいので誰か考えてください！

名字はもう決めています

いい名前がある人はどうかお願いします

それではまた

次回は岩沢とユイの再開の話です

Fronting episode Iwasawa } The value

すいません

執筆がはかどらないので少し設定を変えさせてもらいました

「あなたが岩沢さんのお仲間さんですか？ 私、ユイっていいです！今日はよろしくお願いします！」

「えっと……音無初音です。よ、よろしくおねがいします！」

出会ってから数分で初音とユイは仲良くなった。

もともとトゲのない性格をしている二人だ。

相性はやっぱり良かったらしい。

自己紹介をしながら今日のライブの抱負を語り合う二人は何だか見ていて微笑ましい。

これなら今日のライブは問題ないだろう。

（しかし、ユイが戦力になってくれるとは……意外だった）

私はユイと再会した時の事を思い出していた。

本当に彼女を見つけたのは偶然で……奇跡だったのだ。

The value of miracle …… End

Fronting episode Iwasawa } The value

の
名前募集
します

episode zwei ~ Successor ~ (前書き)

しつこいですが の名前、募集中！

episode zwei (Successor)

一週間前 岩沢

その日私は路上ライブをしようと一人、町を歩いていた。

時刻は既に夜中の1時。

初音と音無には内緒だ。

二人が寝たのを確認してから家を出たので気づかれる事はない……
というか気づかれたら困る。

さて……今日の目的だが、今日は新曲を披露したいと考えていた。

曲名は『Thousand Enemies』。

死後の世界にいた時、作詞中だった曲である。

『消えた』ライブの時、この曲はまだ歌詞が完成していなかったため、披露できなかった。

あのライブ自体に不満はないが、まさか、消えるとは思っていなかったなので、油断していた。この曲を披露できなかったのは結構心残りだったのだ。

こっちに來てからもなかなか、歌詞が思いつかなかった為、完成に時間がかかった。

これはそんな秘蔵っ子である。

どんな反応が返ってくるか………今から楽しみだ。

公園まで来た私はさっそく歌うための準備をはじめた。
ちなみに私はライブをやる時はいつもここでやっている。

そして、準備が整った。

(じゃあ……始めるか)

ギターを鳴らす。

歩いていた人々がこっちを見た。

さあ、聴いてもらおう……私のThousand Enemies
es!

*

「なんでかな……」

結果から言つとThousand Enemiesは……不評
だった。

どうやら歌詞が悪かったらしい。

現在私はネットで叩かれまくった人の如く落ち込んでいた。
結構……自身あつただけだな。

まだまだ修行が足りないという事なのだろう。
もっと……頑張らねば……そう思った。

その後、なんだかやる気も無くなってしまった私はぶらぶらと町をうろついていた。

家に帰ろうか……とも思ったが、なんだかそれだと負けた気がするので嫌だ。

朝方までうろついてから散歩してきたとでも言って家に帰ろう。

（ギターは………まあ、いいか。誤魔化せるだろ）

さて……それじゃあ、朝までどうしようか？

そんな事を考えながら、私は歩いていった。

……それが聴こえたのは路上ライブを何本か梯子していた時だ。

次はどここのやつを聴こうか………そんな事を考えながら歩いていると

……

うるさい事だけ言つのなら漆黒の羽にさらわれて消えてくれ！

（……………これは、C r o w S o n g？）

最初は聴き間違いかと思ったが黙って聴いているとそれはやはり私の作曲したC r o w S o n gだった。

……………一体誰が？ まさか初音？

そんな訳がない……………初音は家で寝ているはずだ。（わざわざ確認した）

では……………誰が？ しかも結構上手い。

私はその声のする方へ走った。

今は曲をパクられた事より、その歌っている人の方が気になった。

そして私は出会った。

一週間前 ユイ

この世界に落とされてから数日。

私は日々の生活を路上ライブで賄っていた。

あのくそNPC^{アマ}には言いたい事が山ほどあるが、とりあえず……

「可愛い少女である私を無一文で路上放置とは一体何のつもりだ、コラー！！！」

私に死ねと？ 上等だ、絶対生き残ってやるわ！

そんな思いを胸に今日も路上ライブをしていた。

この路上ライブだが、結構儲かる。

私は夜中にライブをやるのだが、結構、人は聴いていつてくれるし、多い時にはその日の収入1万円なんて日もある。

まあ、いつまでも続けられる訳じゃないからその内どうにかしなきゃいけないんだけど……今は続けるしかないよ、生きるために。

そんな私を誰かが可哀そうだ……とでも思ってくれたのだろうか？
あの人が現れたのは……C r o w S o n gを歌っている時だった。

あの人はいつも目立っていた。

何と言っても特徴的なのはその紅色の髪と瞳。

いつも冷静で、しかし歌っている時は誰よりも激しかった。

その人の名前は岩沢まさみさん。

私が所属していたバンド…… Girls Dead Monster
のリーダーだった人だ。

岩沢

その歌っている娘は、私を見ると驚いたような顔をした。

でも、驚いたのは私の方だ……

その娘はSSSの制服を着ていた。

つまり……この娘は死んだ世界戦線にいたという事だ……

しかし……

（こんな娘、いたっけ？）

私はその娘に見覚えがなかった。

はて、忘れているのだろうか？

私は覚えている戦線メンバーの名前を頭に上げていく…… ゆり……

ひさこ…… 入江…… 関根…… 遊佐…… 椎名…… 音無…… ああ、

日向ってやつもいたな！

……結論。私の記憶能力があいまいなだけでした。す
いません、音楽にしか目がいつてなくてメンバーの顔ほとんど覚え
てません。

しかし……女子メンバーは全員覚えてたはずだ……誰だっけか……
……はっ、まさか男!?

(って、そんな訳あるかああっああああっああああ!!!(

ごめん、その娘。私思ったより薄情だったわ……

そんな事を考えてる内にCrow Songが終わった……

「岩沢さん!? 岩沢さん!!!」

まずい! その娘が走り寄ってきた!

……………どうしよう。

ユイ

私はCrow Songを歌い終えた後、岩沢さんのところへすぐさま駆け寄った。

「岩沢さん!? 岩沢さんですよね!」

「あっ……………ああ! そ、そうだけど?」

「私、SSSで下っ端やってたユイっています! 覚えてますか?」

「あ、ああ! ………………ああ!! そ、そうか、そうだったユイか!」

「はい、ユイです! 覚えててくれたんですね!」

「ああ! もちろん!」

何か岩沢さん凄い声が裏返ってるけど……あ、そうか！ SSSの
人がここにいるのに驚いたんだ？

私は声を落して岩沢さんに話しかける。

「岩沢さん……私もあの世界から『消滅』したんですよ」

「そ、そうなのか……」

「そしたら、この世界に転生しないで落とされて……一体、どうな
ってるんですかね？」

「さ、さあ？ 私には一体……何が何だか」

「そうですか……やっぱりそうですよね」

「そうだな……」

「？ ……どうしました？ さっきから顔真っ青ですよ？ 岩
沢さん」

岩沢

「？ ……どうしました？ さっきから顔真っ青ですよ？ 岩
沢さん」

その娘・ユイは不思議そうに聞いてきた。

まさか……

『自分の後輩の名前忘れてて、現在話しかけられてめっちゃビクビ
クしてました』

何て口が裂けても言えない……

さてどう説明しようか……

私は音楽でいっぱいになっている頭を高速回転させる……そうだ！

「何であんたCrow Song弾けるんだ？」

話題をずらそう！

「ふえ？」

「いや………何でガルデモ以外のメンバーがギター弾いてるのになって思ってた………しかも何気に上手いし」

「あつ………そうか、岩沢さんは知らないんですもんね………私、岩沢さんが………その……『消えた』後、ガルデモのボーカルに選ばれまして、Crow Songとかも頑張つて練習したんです！」

「じゃあ、あんたがゆりつぺの言つてたガルデモのニューボーカル？」

「はい！」

マジかよ………この娘がボーカル？ 確かに上手いけど………

ガルデモはアイドルユニットにでもなったのかよ。

しかも………そのボーカルのユイは既にあの世界から『消滅』している………

じゃあ、一体ガルデモはどうなるんだ？

「までよ………あんたさ、ガルデモのみんな残して『消えた』のかよ？」

「………はい、みなさんには悪いと思いますが、私の中で踏ん切りがついたので………」

そうか………踏ん切りがついたのか………じゃあ仕方ないな。
けど………

「それじゃ、これからガルデモはどうなるんだ？」
「わかりません……………でも……………」

もう、歌う事はないだろう。

そうユイは言った。

ユイ

「どういう事だ！？　もう……………歌わないって……………」

私の言葉に岩沢さんは驚いたようだ。

まあ…………… 本人が気が付いてないなら言わないが、本来ガルデモのボーカルなんてそう代わりが利くわけではないのだ（私も毎日怒られながら練習してたのだ。そう簡単に代わりが見つかったまるか！）

「もう、ガルデモのボーカルとして歌える人がいないって話です」

「……………　そうか、そうだよな、そう簡単に代わりが見つかる訳ないか……………」

「はい…………… それにたぶんですけど、もう少しでみんなもこの世界に来ると思いますよ？」

「……………　どういう事、それ？」

「いや…………… 私にはよく分かんないですけど……………」

私は　　の言っていた事を岩沢さんに話した。

岩沢

ユイが言うには、まもなくあっちの世界で『リセット』が始まるという事だった。

どうやら、私達SSSはあの世界にとどまり過ぎたらしい……

『愛』がどうだと理由は随分ロマンチックだが……やる事はエゲツないな。

「そりゃ、確かに歌ってる場合じゃないな」

「ええ、本当に……ひさこさん達大丈夫でしょうかね……」

ユイの言葉にひさこ、入江、関根、遊佐……とガルデモのメンバーの顔が浮かぶ。

しかし……

「大丈夫なんだろうな（でしょうね）」

ごめん、みんな。

あんたらがやられてる姿とか……まったく想像できない。

これは信頼から来る甘さか？ ……いいや、経験から学んだ事実さ！

「まあ……ガルデモが大丈夫なんだから、他の戦線メンバーも大丈夫だろう」

「そうですね……今は天使さんも味方ですし……」

「おっ、やっと奏を仲間にできたのか？」

「はいっ！」

それなら本当に大丈夫だろう。

ゆりっぺと天使のコラボ……最強だ。

私はこの件に関しては絶対大丈夫だという結論に到った。

と、そこで……

「おい！ ユイさん！ 次の曲頼むよ！」

観客の一人がそう声を上げた。

他の客も口々にユイを呼んでいる。

……私としたことが、観客を差し置いて長話をしてしまった。

「おっ、リクエストの声が上がってるぞ？ 早く行け」

「あっ……はいっ！ 私がんばります！」

私の言葉にハッとしたユイがステージに戻ろうと踵を返した。
駆け出していく背中にかける。

「がんばれよ！」

……なぜか、ユイがフリーズした。

ユイ

それは完全な不意打ちだ。

本当は憧れの岩沢さんとは話すだけでも正直精一杯だったのだ。

その岩沢さんが……

『がんばれよ!』

私を応援してくれるのか?

……ダメだ、このままじゃ上がり過ぎて歌うのなんか無理だ……

私は走るのをやめて、岩沢さんの方を向いた。

そして……精一杯の勇氣を持って岩沢さんを誘った。

「おい……どうした?」

「あの……岩沢さんも一緒にどうですか?」

岩沢

「あの……岩沢さんも一緒にどうですか? ライブ」

急に動きを止めたユイは一回転して私の方を向いた後、妙に赤い顔でそんな事を言った。

いや……誘ってくれるのはうれしいけど……お前のライブだぜ?

「私が出てもいいのか?」

「はいっ! 大・大・大歓迎です!」

ユイ即座にそう返した。

そうか……そこまで言われたらな……

「……じゃあ、お言葉に甘えさせてもらっぜ?」

「はい、よろしく願います!」

元リードボーカルとして、やるしかないだろ?

そして、私は舞台上上がった。
一度も合わせた事はないけど……いける！

『じゃあ、次の曲いくよ！』

「「「おおおおおお！……」」」

ユイのマイクが会場（と言っても街角だが）を震わせた。
さあ、やってやろうか……

『曲名は………Alchemy！』

ユイ

岩沢さんは本当にすごい。

ノリと勢いだけで打ち合わせもなく誘ってしまつて……正直、しまつたと思つた。

でも……岩沢さんは今、私が書き直したAlchemyのリズムを一番が終わつた後、完璧に弾きこなしている。

さすが……Girls Dead Monsterのリーダー！

徐々に私の方が岩沢さんについていくのがキツくなってきたくらいだ。

やっぱり……岩沢さんは凄い！

岩沢

失礼な事だが、最初私はユイを甘く見ていた。
でも……演奏が始まると、その考えが甘かった事を痛感した。

（この娘……凄い！）

ちよつとよれる事もあるが、こんなのは無視していいレベルだ。
そして……このAlchemy。
正直……負けた。

私が作曲したオリジナルの方では表現しきれなかったモノがこのAlchemyではしっかり表現されている。
それでいてオリジナルのリズムを崩していない……

さすがだよ、ユイ。

姿にだまされたが、この娘は……確かに私の後釜だ！

ユイ

そして……気がつく演奏は終わっていた。

観客は……怖いほど静まり返っている。

岩沢さんの方を見ると……驚いたように私を見ていた。

なんだ……どうした……？

演奏は……どうだったのだ？

「ユイ……あんた」

岩沢さんが口を開く。

『最高だ』……

その声をマイクが拾った。

途端……

かつて、学校でライブしてた時だって聴いた事のないような歓声が……私をつつんだ。

岩沢

その後、警察がやってきたので私は茫然として固まってしまったユイの手を引いてその場を後にする事にした。

「おっさん！ 足止め頼むぜ！」

「おう！ 任せとけ！ おっ……忘れもんだ、持ってたきな！」

「ありがと！」

「ああ、捕まんなよ！
野郎ども！
くめええええ！！！」

観客のおっさん達がスクラムを組んで警察を通せんぼする
あれは……公務執行妨害にはならないな……やるな、おっさん

私は片手にユイとギター。

もう片手におっさんから手渡された巾着袋を持ってその場を後にした。

もう、すっかり夜が明けた。

朝の光が眩しい。(ついでに眼はショボショボだ)

「さすがだなユイ……あんたの事、見直したよ。流石はガルデモのリードボーカルだ」

「いえ……岩沢さんの方が凄すぎて……私、ついていくので、精一杯でした」

私とユイは公園のブランコに座って話していた。

ユイの実力は想像以上だ。

なんのお導きかは知らないが、彼女と巡り合わせてくれたやつに無性に感謝したい。

それに……

彼女のおかげである計画が実行に移せる。

それは……

「なあ、ユイ」

「はい？ 何でしょう？」

「一週間後……ライブやるって言ったら参加する？」

「もちろんです！ また岩沢さんと組めるなんて……たとえ地の果てでも地獄の底でもついていきますよ！」

初音のデビューライブだ。

私は近いうちに初音と一緒にライブがしたいと思っていた。

しかし初音にはまだ……自信がない。

それにライブをするには人数が少なすぎる。だけど……

（ユイが参加してくれるのなら全て解決する！）

味方としては頼もしいかぎりだ。

その後、私は詳しい予定を立てた後、ユイと別れた。（ちなみにおっさんがくれた巾着袋は今回のライブで稼いだ金が入っていた……詳しく見た訳ではないが諭吉が2〜4枚入っていたような？）

その結果は……一週間後の放課後、学校で行われるライブが示してくれるだろう。

What you hold in your hand? ……

……Let the games begin!

S u c c e s s o r …… E n d

episode zwei (Knight in shining armor

最近、速度が落ちてる

もっと頑張らねば……

ユイを拾った私と初音は現在、ある教室に向かって歩いていた。

「もしかして、ライブって教室でやるんですか？」

「そんなわけないだろ……」

「そうですよ、初音さん……でも、じゃあなんで校舎に入ったんですか？ 岩沢さん達は大丈夫かもしれないですけど……私、一応部外者ですよ？ 目立ちますよ？」

「いいから、ついて来いって……すぐライブできる訳じゃないんだよ」

初音の天然な発言とユイの一応の不安を受け流して私は歩く。

「だいたい……ユイ、お前は校門前にいる時点で十分目立ってたから今更心配したってムダだからな？」

そして、数分後……

「着いたぞ、ここだ」

「……………なんでわざわざ、二年生の教室なんですか？」

「岩沢さん一年生ですよね？」

私達は二年生のある教室の前にいた。

ここまで来ても二人は分からないらしい。

「……………ユイはともかく、初音まで知らないとは驚きだ。音無から聞いてないのか？」

「今回のライブだけど……演奏以外にも応援を頼んであるんだ」

仕方ないのでここでネタばらしというこつ。

「応援？ ……ああ、照明さんとか音響さんとかですか？」

「そうだよ……中々鋭いなユイ」

「へへ……まあ、万年、下っ端やってましたから」

「………それ、自虐？」

「違います！ 自慢ですよ」

「そう……で、初音は分かった？」

適当にユイをからかった後、初音にも話を振る。

初音はしばらく悩んだ後……ハツとした顔になった。

「………まさか、あの人達に頼むんですか？」

………どうやら、初音にも私が協力を頼んだ相手が分かったよう
だ。

「そつだ、あいつらだよ………こついうのはきつと好きだからな」

「でも……ホントに大丈夫なんですか？ あの人たち？」

「大丈夫さ、話はつけたから」

「あの、あいつらとかあの人とか、一体何の話してますか？」

「ああ、そつだな……ユイお前にも説明しておくか……」

一人、話についてこれないユイに私は説明することにした。

さて……何から話すか……

「この学校にはな、私達がいた『戦線』のような組織があるんだ」

「ふえ？ ………生身なのですか？」

「ああ、聞いたところの話だと……………私達以上にアホな集団らしい……………」

ある時は、部長連盟に勝負をしかけ…………

ある時は、ダストシュートに飛び込み…………

ある時は、屋上からダイブして…………（直後、人の命を救ったらしい…………意味が分らん）

ある時は、校庭で花火を上げる…………

「……………なんですかそれ？ そんな出鱈目な人達がいるんですか？」

「ああ」

「……………アホだ」

「……………いや、バカなんですよ」

ユイは純粹に驚き。（そうだよな、死にはしないけど戦線の奴らだつてこんな事しない）

初音は頭を抱えていた。（その顔には「私、この学校にいていいのかな……………」と書いている）

そいつらは自称・正義の味方。

その名も…………

「その名もリトルバスターズさ」

後ろで声がした。

私が振り返ると……

「待ってたよ？ 岩沢さんだよね？」

リトルバスターズの現リーダー・直枝理樹先輩がそこにいた……

Knight in shining armor …… End

e p i s o d e z w e i K n i g h t i n s h i n n i n g a r m o

は「風」がいいと言う声を頂きました

ありがとうございました

episode zwei } Start Live } (前書き)

直枝理樹は姫龍の中でタラシのイメージが強くなっています。

ご了承ください

episode zwei ｝ Start Live ｝

「それじゃあ、みんな。岩沢さん達も来たし、作戦を確認するよ」

教室内に直枝先輩の声が響く。

見た目は頼りない感じの直枝先輩だが、統率力はあるらしい。
部屋にいた他の人達もいつせいにこちらを向いた。

ただ……

「……………噂の割にはみなさん女性ですよね？」

「凄いな……………こんな美人さん達が校庭で花火上げたりするんだ……………
(世も末だ)」

直枝先輩を除いて部屋にいるのは女性だけ(一応言々と棗先輩、神北先輩、三枝先輩、能美先輩)だった

ユイと初音の疑問も頷ける。

果たしてこの人達、本当にあのリトルバスターズなのか？ と…………

「ごめんね、その噂を打ち立てた本人達は今ここにはいないんだ？」

ユイと初音の疑問を聞いた直枝先輩は頼りなさそうに笑う。

「どういう事ですか？ 直枝先輩？」

「いやね……………リトルバスターズはこの他にも後9人いるんだけどね？ 恭介と真人と健吾と来ヶ谷さんと美魚さんと美鳥さんは生徒会に……………笹瀬川さんと古式さんはソフトボール部の遠征に……………二木さんは風紀委員長だからね？ 結構とられちゃったんだ。いろんな所に」

「……………えっ、じゃあ、今回動いてくれるのは先輩も入れて5人
って事ですか？」

「いや、それに関しては大丈夫。恭介達には事前に通信機渡しであ
るから、ちゃんとフォローしてくれるよ」

「ならいいんですが……………」

若干、不安は残るものの、まあ棗先輩なら上手くフォローしてくれ
るだろう。

初音とユイも納得したようだし……………

「じゃあ、作戦会議始めようか？」

直枝先輩は笑顔でそう、言った……………

「説明するね？ 今日のミッションは岩沢さん達のライブを成功さ
せる事……………クドと神北さんは照明。三枝さんと鈴は音響。みんなち
やんと練習したよね？」

「大丈夫なのです」

「おーけーだよ」

「はるちゃんに任せなさいデスよ！」

「……………任せろ」

直枝先輩の言葉にそれぞれ答える先輩達……………

直枝先輩は話を続ける。

「作戦開始時刻は今日、時刻は18：00ジャストで場所は中庭」

その姿はとても楽しそうで……………

「なんか……ゆりっぺと重なるなあの姿」

「そうですね……………」

「ゆりっぺって誰ですか？」

だからだろうか、早く彼女達もここに来ればいいと思った。

『ミッションスタート!』

17:45 中庭

なるほど、確かにリトルバスターズはいい仕事をするのかもしれない。

私はベンチに座りながらそんな事を思っている。

実際、直井先輩の作戦は巧妙だ。

三日前に相談を持ちかけてから、先輩は事前にこの情報を風紀委員以外に漏らしていたらしい。

現在、中庭には何も知らない……『たまたま』いた部活帰りの生徒。校舎の窓からは『たまたま』夕日を眺めている文化系の生徒。

風紀委員や教員が来るであろう昇降口には『たまたま』ガタイの大きい……言うなれば「塞ぎ役」の生徒がいる。

みんなあくまで『たまたま』だ。

……………実に策士。

ライトもドラムコードもアンプも草で隠されていて普通ならまず気

づかれない。

「……………すごいですね、あの人たち……………手際が良過ぎる……………」
「そうだな」

「岩沢さんは驚かないんですか？」

「まあな」

実際驚いてはいるが、あの棗の友達と聞けば普通に覚えてくる不思議。

そりゃ、生徒会に括り付けられるわな……………

その時、『たまたま』直枝先輩が私の隣を通った。

……………時間だ。

「始めるぞ、初音、ユイ……………いいか？」

「……………いいですよ」

私達は、背負っていたラケットケースからギターを取り出した。
アンプに接続、素早くチューニングする。

……………三人とも問題なし。
じゃあ……………

ジャン！

私は一度ギターを鳴らす。

中庭にFender Stratocasterの爆音が響いた。

その音を合図にライトが一斉にこちらに向けられる。

生徒達からは拍手が上がった。なんだ？ 楽しみにしてくれてたのか、おまえら？

いいぜ、しっかり楽しんでてくれよな……

準備は万端だ……さあ！

「時間だ……派手にやろうぜ？」

最初の曲は……『Alchemy』

ライブが……始まった。

S t a r t L i v e …… E n d

久しぶりです。

最近、夏だ、補習だといろいろありまして、遅れました。

短いですがどうぞ。

さあ、『リセット』を始めよう。

ここは第二コンピューター室。

ユイという少女を見送ってから数日がたっていた。

その間、ずっと『私』の中では彼女の言葉が渦巻いている。

信じるか信じないかはあなたの勝手だよ？ でもね、もし私の記憶が正しくてあなたがNPCじゃないなら、いつまでもこんな世界にいちゃダメだよ？

……………確かにその可能性はあった。

なぜか一人だけ違う役割を与えられたNOC。

それは、『私』が元人間だからではないのか？

だが……それを追求する術は『私』にはない。『私』は自分の事だけは分らない。

でも、もし仮に『私』が人間だったとして……それがどうしたのだ？

『愛』の存在をゆるさない。

それだけで十分ではないか。

その想いだけは開発者も『私』も変わらない。

それが唯一不変の事実なのだから。

「もう引き返せない………引き返す道なんて初めからないんですよ」

そう自分に言い聞かせて、私はスイッチを押した。
これで『リセット』が始まった。

「……………harmonics」

『私』は分身にコンピューターの制御を任せて部屋を出た。

さあ、最後の戦いの時だ。

彼らの答え、見せてもらおうか。

N o r e t u r n p a t h ……E n d

岩沢

歩いてきた道振り返りかえらない。嫌な事ばかりでも前へ進め。
触れるモノを輝かしていく。そんな存在になって……………みせるよ！

……………『Alchemy』が終わる。

観客が私達の予想以上に盛り上がっていた。

ユイも初音も演奏には問題ない。

よし……………この調子なら……………

「……………『My Soul, Your Beats!』いつ……………」

「……………了解です」

「わかりました、岩沢さん！」

次はコレだ……………

私は直枝先輩に合図を送った。先輩がどこかへ連絡を入れ始める。
しばらくして……………

「……………!?……………」

どこからか、ピアノの音が聞こえ始めた。

さあ、ことみ。あんたの出番だ……………

いくぞ！

ピアノに合わせてギターを演奏する。

……………二曲目が始まった。

日向

死んだ後の世界。

……………終わりが近づいていた。

ユイが『卒業』してから数日。
この世界に『影』が現れた。

奴らに喰われると俺達人間はNPCになって永遠にこの世界に縛られるらしい。

俺達の選択肢は二つ。

この世界に残るために戦うか、この世界から『卒業』して去っていくか…………

この二つだった。

*

対天使用作戦本部。

「では……僕らも始めましょう」

直井が笑顔でそう言った。手に持つてる銃も相まってかなりの凶悪さを放っている。

「こらこら、まて！ お前はいつから俺達の仲間になった！」

俺はとりあえずつつこんだ。

まったくコイツの事はいまだによく分からない。

自分は神だ、とか何とか言ってる人の体にめちやくちや銃弾撃ち込んだくせに音無に一括されて抱きしめられた途端、改心。

翌日には当然のようにこの部屋にいやがった。まったくいい印象持てって方が無理だぜ？ コイツ。

「はっ！ 今さら何を……無能なお前の代わりにだ！ 忘れたかクズ、トイレットペーパーの様に惨めに消えろ」
「なんだと！」

そして、この口の悪さ……誰がクズだ！ 俺は戦線一の古株だつ
つうの！

先輩に対する礼儀くらい覚えやがれ！

そのまま、取っ組み合いになりそうになった俺達を音無が諫めた。

「あのな……お前ら。奏が頑張ってくれてんだぞ？ ……………この

隙に全戦線メンバーに合つて回るぞ？」

「ああ、分かつてるよ音無」

「ふん、こんなクス居なくても僕達二人で十分ですよね！ 音無さん」

「……………これなのか？」

「なっ！？」

何も言えなくなった直井を置いて音無が先に部屋を出ていった。

途端、直井の凶悪さが二割増しになる。

「……………感謝しろ、クス。音無さんが今、お前に乗ってくれなければ、今頃貴様は『成仏』していただろう」

「へっ、そうかよ……………しかしなんだな。お前、ホントに音無には、なついてるよな」

「当たり前だ……………音無さんのお陰で僕は救われた」

「……………だから、恩返しするの？」

「……………そうだ。今、『卒業』したらもう二度と感謝の言葉を言う事は出来ないからな」

……………性格は歪んでる割りに恩は忘れないんだよなコイツ。何だかんだ言っけど根はいい奴なんだよな。

だからこそ、ちゃんと『卒業』させてやりたい。

そう、想っていた。

「そうか……………じゃあ、生き残らなきゃな」

「ふんっ……………当たり前だ。……………貴様こそ、最後まで豚のようにもがくんだな」

「へっ、そうさせてもらっぜ……………じゃあ、行くか」
「僕に指図するな」

*

直井と一緒に本部を出ると、音無とひさこ達が話をしていた。
そうか……………お前たちは先に『卒業』するのか……………

「もしずっと続いてきたこの戦線が無くなっちまうんだったらさ……………
…この世界はアンタも含めてその意味を果たした事になってさ……………
…いい風になったんだなって、思えるからさ。……………ただ、一時あ
たし達はさ、有りはしなかった青春をさ……………ただ、楽しんでたって
事になればさ、それだけで十分だなんて……………」

ひさこの言葉が胸に染みてくる。

……………そうだな、そうだったよな。

俺とゆりっぺはさ、「神への復讐」ってのをいい訳にずっと『卒業』を先延ばししてたんだな。

ホントは毎日が楽しくて……………もう、とっくに満足してたって言うのに、適当ないい訳作ってずっと先延ばししてたんだな。

「何言ってんだよ、わかんねえよ」

「だよな……………まあ、後の事は知らない。私達は……………もう逝く。それだけ」

そう言っただけひさこ達は笑った。……………本当ならあいつらはまだ、歌っていられたんだ。

俺と音無がユイを『卒業』させちゃったせいで、踏ん切り付けさ

しまったんだ。

でも……あいつらは何も言わなかった。

俺も音無も責めないで笑っていた。………ありがとう。

「じゃあな、新人。………次もバンドやるよ」

「ああ、きつとまた好きになる」

俺も音無と一緒にだぜ。

ハイタツチの音が校舎に響く。

もう……あいつらの姿は見えなかった。

声だけが俺達の耳に届いた。

うん、じゃあな。

なんとなく、胸が熱くなった。やべ、泣くかも。

「下々共のお見送り、お疲れ様です」

「お前、絶対性格破綻してっからな！」

コイツのせいで一気に泣けなくなったけどな！

「破綻などしてない！ 神に向かって何てこと言っただ貴様！」

またもや取っ組み合いになりそうな俺達を音無が諫める。

「……馬鹿やってないでいくぞ？」

………これ、「諫めた」ってよりむしろ、呆れられてねえ？
俺ら。

と、その時……

ガシャン！

「「「うわああああ！！！！」」」

窓ガラスを突き破って『影』の野郎が入ってきやがった！
慌てて、走る。眼の端で本部が潰れていくのが見えた。
……………俺達の思い出が壊れていく。

にやろつ……………コイツ、直井より空気よめねえ！

*

なんとか『影』から逃げた俺達は最早正面突破しかないと、武器庫の武器を持てるだけ持って外に出た。

「……………なんだよ、これ……………」

そこで、さらに驚きの光景を見る事になる。

それは辺り一面、『影』・『影』・『影』……………『影』の大名行列だ。

どうやら、ずっとここで張ってたみたいだな。

「どうなってんだ……………？NPCは！？」

「もう、この辺りじゃコイツ等しかないんじゃない？」

「俺達のやろつとしてる事……………分かってんじゃないだろうな！」

直井の言葉にも余裕が無くなっていた。
それほどの大軍が……一斉に襲い掛かってくる！
突然の行動になにもできない。

やられる！ そう想った時。

一閃。

目の前の『影』が真つ二つになった！

……………こんな戦い方をする奴は戦線でも一人しかいない。

「野田！」

「流石だぜ！」

霧状に霧散した『影』の先にはやはり野田が立っていた。

「ふん、ゲスが……………」

そのまま、野田は『影』に斬りかかっていく！

銃で野田を援護しながら、音無が聞く。

「俺達の為に戦ってくれるのか？」

「馬鹿を言つな！ 俺が戦うのはゆりつぺの助けになる時だけだ！」

そうだったな。お前はいつでもそれだ。

「お前もとことん一途な奴だよな！」

だからこそ、みんなゆりつぺを信用してたんだけどな！

野田を援護するように『影』を殲滅していく。

しかし数が多い……ちょっとめんどくさくなってきたぜ……

「日向後ろ！」

「っ！」

そんな心のスキをつかれた。

いつの間にか後ろに『影』がいる。……やべ、しくったぜ……

『影』の手が俺に……

バン！

「！？……………大山！」

伸びる寸前、『影』がまたも四散した。

その向こうには大山の姿があった。……あいつ、今までどこにいたんだろ？

「なんのとりえもない僕だけど、ここで活躍できたら、神様もビックリ仰天かなってさ！」

いつもしまりない顔をキリつとさせてそう答える大山。

これはあれだ……………戦線創る時に見た事があるシリアス大山の方だ。

「あんがと！」

大山の的確な狙撃がメンバーの後ろにいた『影』を消していく。
これで後ろを気にせず戦えるようになった。
視線を前に戻して、再び『影』の殲滅に戻る。

「おりゃあ!」「come on! come on! come on!!!」

いつの間にか藤巻とTKも戦闘に参加していた。
なんだかんだでいつも助けてくれるいい奴らだ。

「Knockin' on heaven's door」

TKの英語は結局最後まで意味が………って!

「それ……ボ デ ランだぜ!」

何か最後に名曲きたよ!?

野田がしたり顔頷く。

「だが、今まさに相應しい」

「知ってんのかよ!」

野田……お前の趣味はわからん。意外と頭良かったんじゃないか?
こいつ。

「何て意味だ?」

「さあ?」

そして藤巻に大山、お前らはなぜ意味が分からない! 天国の扉

を……叩くだろ……たぶん。

『影』を撃ちながら心の中でツッコミをいれる。

「……………アホだよつぱり。……………音無さん以外」

「こら！ 俺をあいつ等と一緒にするな！」

直井、お前はなぜ俺を常に馬鹿の部類でカウントする？

確かに馬鹿だが、俺は一応高校三年までは行ってるんだよ！

その後は……………まあ、最低の人生送ってたが……

「おいおい……………喧嘩すんなよ。……………何にしても役者がそろって来たな」

「そうですね」

「いや、俺との会話が終わる前に音無に食いつくか？ お前」

何だったんだ？ 今の俺の回想は……………（なぜだろう、また『卒業』の機会を逃した気がする……………）

……………まあ、いいか。

「……………役者、ね」

今は目の前の事に集中するか。

野田、大山、藤巻、TKとこの場に集まった。となると残る役者は後二人。……………忍者娘と……………あと

「そりゃあああ！！！！」

……………来たぜ、柔道バカが。

屋上から数体の『影』が投げ飛ばされた。

ソレと一緒に少年が飛んでくる。

「なんだこの世界は！？ 何が起きたって言うんだ！」

「……………ていうかお前に何が起きたんだよ？」

そこにいたのは、筋肉質だがかなり痩せている長身の少年だった。

……………松下……………五段だよな？

「誰だお前？」

どうにも自信がないが、かと言っていまさら誰ですか？ と訊く訳にもいかず、対応に困っていた俺に助け船を出してくれたのは……さきほど野田に代わって馬鹿の称号を引き継いだ男・藤巻だった。いや、お前分からない事を聞く勇氣はスゲーけどさ、失礼って事を自覚しような？

長身の筋肉少年は意に介した様子もなく答えていたが。

「うむ、しばらく山籠りしていたのだが……………何せ食い物が少なくてな……………」

「お前……………松下五段かよ！」

「T a s t y c a n d y !」

……………やっぱり松下五段だったか。

「激ヤセしたな……………大丈夫か？」

音無が松下五段の身体を労わる様に話しかける。……………ついで後ろにいた『影』を一匹打ち抜いていたが……………音無、お前直井化してね？

「おう、むしろキレイがいい。もしかしたら今なら……百人組手もいけるかもしれねえぜ！」

音無の心配に無用だ、とでも言うように後ろの『影』を砕く松下五段。

直井が低く「どこまでも非常識な集団だ……」とぼやいていた。そこには満場一致で賛成だが、目下の所、催眠術師のお前が一番非常識だぜ？

それに松下五段……百人組手は柔道じゃねえぞ？ 空手だ。まあ、今はいいか。何にせよ……

「助かるぜ。何せこれだけの軍勢だ」

味方は多い方がいい。

じりじりと『影』が詰め寄ってくるが、不思議と恐怖は感じない。

「無事に去っていきうぜ……メンバー全員だよ」

藤巻の言葉にメンバー全員が頷いた。

突破するぞ！

d B e g i n n i n g a n d e n d i n g s o n g …… E n

アンケート ～ Agony of the dragon ～ (前書き)

今回は話ではありません。

アンケート 〽 Agony of the dragon 〽

どうも皆さんこんにちは……姫龍です。

最近、他の作品も並行して書いているせいか、投稿速度が最高、落ちています。

お気に入り登録してくださっている52人および毎回読んでくださる方々、誠に申し訳ございません。

ああ、一日、5話投稿していた初期のころが懐かしい……

……最近、どうも話の内容が浮かびません。
ラストは決まっているのですが、そこに至る過程がまだ全然決まりません。

そこで……

大変あつかましいのですが、今回はアンケートを取らせていただいてこの話のこれからを考えたいな……という所存でございます。
勿論、お時間のある方で結構です。どうかお願いします。

1、水着

『CLANNAD』のキャラクターを使って海かプールに行く話を書きたいと思っています。そこで問題になったのが、各キャラの水着。誰にどんなモノを着せればいいんでしょうか……ご意見、お願いいたします。

2、日向とユイ

アニメだと日向はユイに「結婚してやんよ」とか言っていました。

アレ……本気なんですかね？ 読者の方々の殆どが気付いていらっしやると思いますがこの話……その内、戦線メンバーもこつちに戻ってきます。その時、はたしてユイを今まで通り「ユイ」と表現するのか。それとも「日向ユイ」にすべきなのか……これはかなり切実な問題です。ご意見、お願いいたします。

3、脇役の存在とクドわふたー

最後の難問。key作品に登場する『超』個性的な脇役達。例えるなら『CLANNAD』の幸村俊夫に芳野祐介に柊勝平。

そして今回最大の難問『クドわふたー』。

……あーちゃん先輩や氷室憂希が予想斜め90度に行く可愛さ……そして直枝架夜。直枝？ ここで直枝が来ましたよ！ 情報が少なすぎる。はたして彼女たちや『CLANNAD』の脇役達を登場させるか否か……ご意見、お願いします。

質問は以上です。どうか姫龍に知恵をお授けください。また、作品への要望等もお待ちしています。

それではみなさん、さようなら。

アンケート ～ Agony of the dragon ～ (後書き)

みなさんの『答え』待っています。

……最近、意味不明になってきてるな……と自分でも思います。

ナギ

新校舎屋上

……分身に後を任せた『私』は、屋上から戦線と『影』の戦いを見つめていた。

圧倒的に不利な戦い。なのに誰も諦めようとしない。彼らは知っているはずだ。その気になれば今この瞬間、この世界から『卒業』できる事を。事実、戦線の八割方は既にこの世界から『卒業』していた。後は、彼らだけなのだ。彼らしかないのだ。

分からなかった。

『私』には彼らがこの世界に居座り続ける理由が分からない。何故、彼らは戦うのだろうか？ どうして『卒業』という一番楽な逃げ道を彼らは選択しない？

……やはり、NPC化しないのだろうか？ リセットするしか道はないのだろうか？

そんな事を想いながら『私』はこの戦いを見続けていた。

日向

第一連絡橋

「くそ、キリがない！」

目の前の『影』を殲滅しながら前に進んできた俺達だったが、ここにきて前も『影』、後ろも『影』という非常に不味い状況に追い込まれてしまった。

まだ、誰一人としてかける者はいないが、それも時間の問題だ。

「音無さん、下を見てください！」

直井も気付いた様だが『影』が下からも登って来ている。このままでは……そんな考えが嫌でも頭を過る。魂を抜かれ、何も分からず、何も考えず、永遠に人形としてこの世界に囚われる……それは地獄だ。それだけは……嫌だ。

と、その時、音無の死角から『影』が飛び出してきた！

「後ろ！」

慌てて銃を向けるが……ダメだ、間に合わない！
音無がやられた……と思った。

「……………あさはかなり」

彼女が現れるまでは。

椎名

音無に襲いかかろうとした『影』を含め、数体を始末して私は姿を見せる。登場としては上出来だろう。さて……………

「……………百人だ」

私は呟く。

突然の状況に少し混乱しているのだろう。間が抜けたように音無が聞いてきた。

「何が？」

「百人……………戦力が増えたと思え」

その問いに答えながら、『影』を一匹、また一匹と始末していく。こいつらは数は多いが一匹の能力はそんなに高くはない。

音無はまだよく分かっていないのか「えっ？」と聞き返す。……………

……………あいかわらず鈍い奴だ。

「分からないのか……………お前の意志は引き継ぐ」

だから早く彼女の元へ行け。そう付け加えた。

「椎名……………ああ、後は任せたぞ。付いて来い！ 日向」

音無の呼び声に日向と……………なぜか直井も付いて行った。

「おいっ！ ここで戦力減らすとか一体、どういっつもりだよ、椎名！」

遠くで木刀を振り回しながら藤巻が叫んでいる。

私は答えの代わりに近くにいた『影』を数体、始末した。

「……………ふん、なかなかやるようだが貴様などに遅れはとらん、
うおりゃあああ……！」

……………どうやら馬鹿にも理解できたようだな。負けじとハルバート
を振り回す野田を見ながら私は想う。

始まりがあるのなら、終りは必ず待っている。

永遠など存在しない。

それは理解している。

ならば今の私にできる事、それは……

「……………エンディング………どんな終焉を迎えるか、だよね」

きつと。

私は終わりを迎えるために刃をふるう。

奏

学園大食堂 内部

……………一体、何がいけなかったのだろうか？ 襲ってくる『影』達
を斬り伏せながら私は考えている。

結弦と共にユイという少女を『卒業』させた直後に現れた『影』。
黒幕はもう、知っていた。私と一つになった黒天使。彼女の記憶に
あった「Angel Player」の製作者でNPCの……ナギ
という少年。

彼になぜ？ と聞けばすぐにでも答えるだろう。

この世界に『愛』が在ってはいけない。全てを『無』に返す

彼はそういう存在だ。

でも……そんな事を認めさせるわけにはいかない。彼に私達を『支配』する権利などない。誰も他者を支配する事などできない。

「……………奏！」

「……………どうしたの？」

「援護しにきたぜ！」「ふん、感謝してくださいよ？ 会長」

だから私は戦うのだ。

「そう、なら……………ギルドに行こう」

What end? ……End

A n o t h e r e p i s o d e F o u r } W h a t e n d ~ ~ } (後 書 末

次回……日向大活躍？

A n o t h e r e p i s o d e

く U n k n o w n く (前書き)

僕達は『今』を生きている

世界は『ゼロ』からはじまり『ゼロ』で終わる。それが私達の世界の理だつた。

なら、この世界はなんなのだろうか？

死後の世界。ここは『有』からはじまり『無』で終わる。

苦しんだ私達はここで『生きる』幸福を味わい、いずれ『卒業』していく。

……何の為に？

『卒業』の先にある第二の人生。

それは果たして今、ここに『存在』する私達の人生だと言えるのか？

顔も名前も家族も違う。そんな人間が今、この瞬間意思を持っている私と『』で結ばれると言うのか？

……違う。それはもはや、私とは言わない。別の誰かだ。

その赤の他人になる為の『清算』としてこの世界が存在するとしたら……馬鹿な話だ。

この世には善意から生まれる悪意が、悪意から生まれる善意がある。

この世界を創造した『神』と呼ばれる強者の意志をここにくる総ての者達がみな等しく受け入れる訳がない。

だいたい、受け入れるとしたら始めからこんな世界には来ない。

許せないからここに来るのだ。認められないからここに来るのだ。諦められないからここに来るのだ。

彼らが欲しいのは『未来』ではない、『過去』だ。はじまりの『ゼロ』ではなく、終わる前の『イチ』だ。『結果』以前に、『過程』で敗北した私達に必要なのは……

『新たなスタート』ではなく、『人生のリプレイ』だ。

その為の『Angel Player』。その為の『世界』。

準備は出来ている。

後はあの馬鹿……ナギを止めて、局面を幻想世界に移す。

セカンドステージ

話はそれからだ。

私は向かう、『彼』の元へ。そして終わらせる。この戦いを。

Unknown……End

A n o t h e r e p i s o d e

｝ U n k n o w n ｝ (後書き)

まだ誰かは秘密という事で……ではまた！

A n o t h e r e p i s o d e } W h o i s t h e u l t i m a t e

今回長めです。

ゆり

ギルド連絡橋 B7

よって来る『影』を片っ端からアサルトライフルのフルオート射撃でなぎ掃う。

「……数が増えてるって事は、こっちで会ってるのかしら？」

私は、単独でギルドに潜入していた。

どうやら神様気どりのバカ野郎は、調査の結果ギルド内に潜伏しているらしい。

まったく、いい度胸をしてる。見つけたらただじゃすませない……などと意気込んでいたのは実は最初の方で今現在、私は結構なピンチに陥ってたりする。

事実として敵の根城に近づいているのなら、敵の伏兵である『影』が増えるのもまた道理……なのだが、私はすっかりそれを失念していた。気が付けば四方八方『影』『影』『影』『影』………まったく、とんだ大ピンチだ。

牽制で何弾か無駄弾を消費して私は物陰に隠れる。アサルトライフルの残弾は残りわずかで、あと持っているものと言えばハンドガンのベレッタM92とサバイバルナイフだけ……

「……………あんな数、ハンドガンなんかじゃ乗り切れないんだけど……………」

こりゃ、魂抜かれるの覚悟で特攻するかな……などと絶望的な案が頭をよぎる。腰ためにナイフ構えて『影』に突っ込んでいく私……

「……あちゃー、なんでだろ？ まったく勝てる気しないわ……」

あつさり『影』の集団に群らがられて魂を抜かれるのが、安易に想像できる。しかし、なら今、有効な手段はなんだ？ どうすればアレを突破できる？

あまり、時間は残されていない。護るべきモノの為に私は進まなきゃいけないんだ……

悩む、私に助け船を出してくれたのは意外な人物だった。

「ゆりっぺ」

突如、呼ばれた私の愛称。味方と分かっていたが、思わず銃を向けてしまった。そこにいたのは……

「……………チャ？」

「ああ」

チャ。最古参の戦線メンバーの一人でギルドのリーダー。その彼がここにいるという事は……

「やっぱり、ギルドにも来た？ 『影』」

「ああ、寝込みを襲われて散々だ。運よく誰一人かけなかったが……あそこも、もう終わりだ。今は全員が地上を目指している」

……そうか、もうギルドもなくなっちゃったのか。なんだか、急速に世界が終ろうとしているみたいだ。

そうやって、私達がいた事も全部無かった事にするんだろうか、この世界は。

私の表情から、チャ　は何かを察したのだろうか。低く、呟いた。

「……………戦いが、終わるのか。俺達の反逆は……………」

それは最終確認。この世界で、戦う私達の為に残っていたチャが卒業する為の言葉。

もう、彼に迷惑はかけられないから……………私ははつきり頷いた。

「……………ええ、終わるわ」

チャ　が目を見開く。そして一点、彼は穏やかに笑った。

「そうか、ならもう、いいかな。……………持つてけ」

投げ渡されたのは、チャ　が持っていた機関銃。これを渡すという事は、本当に彼はもう逝く気なのだ。……………だったらその決意を揺らがせないために、

「ありがとう！」

私は笑って見送ってやるべきなのだろう。

チャ　はそんな私を見て、おかしそくに笑った。

「……………そんなとこまで”アイツ”にそっくりなんだな……………」
「えっ？」

それはもしかして……………

「なんでもない……………じゃあな」

聞く暇も与えず、チャは逝ってしまった。彼が最後に言った言葉。それは……………たぶん、いや……………分からないという事にしておこう。だってそれは私には永遠に理解できない事だから。

今、私がすべき行動は、彼の『卒業』を悲しむ事ではないから。

「……………行こう」

まだ、敵は残ってる。

チャ、今までありがとう。貴方がいなければ、何も始まっていなかった。

次の貴方の人生、どうか隣に彼女がいますように。

*

オールドギルド

その後、前の敵を殲滅しながら進んでいた私は、オールドギルドにまで来た。先の話から大量の『影』がいる事を予測したのだが、見た限りこの場に『影』の姿はない。

「……………どうやら、束の間の休息ね」

……その事で安心してしまった。一気に疲れが来る。

私は近くに腰を下ろし、少しの間休憩を取ることにした。

いま、地上ではみんな戦っているのだろうか？ 天使、いや奏ち

やんも……

張り詰めていた緊張が解けた私はそんな事を思っていた。

もっと早く気付いてあげられたら、どんなに良かったか……もしかしたら、意外と仲良くやれていたかもしれない。こんな世界だけど、一緒に過ごして、似合う服とか探してあげたりして……そんな感じで楽しく過ごせたりしていたのなら……私は……いや、無理か。

今さらなにを、と自分の考えを否定する。私にはそんな事を言う権利も思う権利もない。自分の我儘で一体、どれほど彼女を傷付けたのか。

思えばおそろしい。死なないとはいえ、人に銃を向ける事ことに何も感じなくなっていた自分。作戦を隠れ蓑に彼女の答案に細工をさせた自分。……なんと最低な人間だったろうか。たとえ、彼女が天使だとしても絶対にそんな事、やってはいけなかった。

……それは、彼女に対する懺悔だった。必ず謝ろうとも思う。でも……

それでも私は『神様』が許せない。

どうしても、許せないのだ。それに関係するモノも、何もかも！……私は許せない。

言おう。また再び、同じ状況になったとしたら、それが神に続く道しるべになる限り、私はどんな汚い事も卑怯な事も躊躇なくする

だろう。

それが、私の……………業だ。

そこまで考えた所で、私は目をつぶった。

考えるのは、ここまでだ。

次に進もうと立ち上がる。…………と、

ドスン

…………『影』が落ちてきた。

「しまった！ いつの間に……………」

気が付くと辺りは相当の数の『影』がいた。…………待ち伏せだ、やられた！

「やっぱり、ロクな事ないわ……………」

ガラでもなく、自分の行動に悩んでいて『影』が接近している事に気が付いていなかった。

私は機関銃を構える。この数だ。いくら適当に撃っても無駄弾はない。

「消えろ！ ……………消えろお！」

口から無意識に出た想いが私の疲れを無いモノと認識させてくれる。そうだ、殺らなきゃ殺られる。

みんなが頼りにした『ゆりっぺ』は、こんな所で終わる訳にはい

かないんだ！

神経が研ぎ澄まされる。振り向きナイフを振るう。確認したのは真つ二つになった『影』。勿論、前への警戒は忘れない。この機関銃の火力なら十分に押し切れる。

「私はね、リーダーなのよ！ なめるんじゃないわよ！」

そう、吠えて私は走りだした。

*

新校舎 廊下

戦いは、局面を迎えつつあった。数だけ見れば圧倒的な勢力を誇る『影』が断然有利なこの状況。しかし戦線のリーダーである仲村ゆりの存在が戦況を変えようとしている。流石といった所か、彼女は現在、単身で『影』の本部に突撃をかけている。そして徐々にだが確実に前進していた。

このまま『影』が押し切るのか、それとも起死回生の戦功を仲村ゆりがたてるのか。それは、まだ分からない。

「だけど……望むなら私は、後者であってほしい」

だから……少しだけ、助けてあげましょうか。
直接には手を出さない。

私は、可能性を与えるだけ。

*

教室の一角に”彼”はいた。外の雑音には一切耳をかさず、勉強に励んでいる。

彼の名前は、高松。ナギの介入によって魂を喰われてしまった元人間。

「見つけましたよ、高松さん」
「はい？」

意思を奪われたモノは、こんなにも機械的で無個性だ。……ナギ、貴方にはこれが幸せそうに見えるのか？

違う。これを人は幸せとは言わない。こんなのは……間違ってる。

「貴方を迎えに来ました」

私がそう言うと彼は心底不思議そうに答える。

「……すいません。どちら様でしょうか？」

……NPC化されたモノは人間だった時の記憶を全て失う。Non Player Characterに過去は要らない。ナギはそう、言っていたから。

……だけどね、ナギ。私はその考えに一度だって賛成した事はないんだよ？

「そうですね。言うなら『おせっかいさん』でしょうか。本当なら

自分で答えをだすのが一番いいんですけどね？ それだと間に合わないですよ。だから……高松さん。貴方を迎えに来ました。行ってください。みんなの元へ。そして見つけてください。答えを……みんな、貴方を待ってます」

その時、彼が見たのはとても不思議なモノだったに違いない。私の真紅の瞳。それが赤黒に変わっていくのを彼は、じっと見つめているしかなかった。

＊

高松

気が付くと私は教室にいた。

「……何故だ？ ここは？ いや、私は、変な黒いモノに……なんだ？」

混乱する思考を鎮めるため、とりあえず逆立ちをする。そのまま、腕立てをするうちに思考がはっきりとしてきた。そう、私は購入でプロテインを購入した帰り道、おかしい黒い化け物に襲われた。そして……覚えていない。という事はそのままこの教室に運ばれたのだろうか？

疑問はいろいろとあったが、逆立ち腕立てができる辺り、まず五体は満足のようだ。

ふと窓の外を見ると日が高く上がっている。という事は襲われた時から……一日以上は経っているという事か。

さて、それではこれからどうするか。私は逆立ちから一度飛んで床に腕立ての態勢で着地した後、立ちあがった。

その時、私は今まで座っていた机の上に一枚の手紙が置いてある

事に気がついた。……メッセージだろうか？

封を切って、手紙の内容を確認する。……そこに書かれていた内容はなかなか衝撃的なモノだった。

私を襲った怪物 『影』が大軍で押し寄せてきた事。

その怪物に喰われると人はNPCになってしまう事。

その『影』の出現によってメンバーの半数以上が来世を求めて『卒業』してしまった事。

そして残ったメンバーは現在、『影』と戦っているとの事。

……あまりに突然の状況の変化に私は再び混乱しそうになる。しかしどうにか心を落ち着けた。

要約すると私は今までNPCになっていた、という事だろうか？
だがそれなら、何故私は人間に戻れたのだろうか？
その理由は思い出せなかった。ただ……

みんなが貴方を待ってます。

そんな言葉を覚えている。そう、私を待っていてくれる人たちは確かにいる。私は一人では……ない。

ならば、するべき事はもう分かっている。それは戦っている人たちの元へ応援に駆け付ける事。

だが……

「私には………武器がない」

その問題はどうか解決するべきだろうか？ このまま単身援護に向

かつて、やられるのは目に見えている。

新たな問題に私は今度こそ頭をかかえた。……………その時。

あつ、それは忘れてました。

そんな声がドアの方から聞こえた。何奴！？ と私は顔をそちらの方へ向ける。すると……

ブン！

何か黒い物体が飛んできた。思わず受けとめる。

「……………私に死ねと？」

それは、アニメなどでよく見るようなモノで簡単に言うなら……トゲ付きグローブ。

……………せめて、ここは銃じゃないんでしょうか？ そんな疑問が脳内を翔けた。と、グローブの中にもまた、手紙入っている。

「今度は何でしょうか？」

もう、正直どうでも良かったが、せっかくだからと律儀に封を切って中を確認した私に……衝撃が奔った。そこにはただ、一言。

キミの筋肉を活かせ。

そう、書かれていた。

＊

「うおおおおおおおおおおお！！！！ 着やせするタイ
プなんですううううううう！！！！」

トゲ付きグローブを投げた数秒後。そう言っ
て教室から出てきた彼は…… 上半身、裸だ
った。どうやら、あの手紙は彼には劇薬だっ
たらしい。

あんな状態で大丈夫か？ と我ながら勝手な
事を思ったが、目前に現れた『影』を見事な
ステップで翻弄し、拳を叩きつけて消滅さ
せたのを見て、それが杞憂だと分かった。

「……まあ、アレならたぶん大丈夫です
ね」

……というか正直キモいくらいです。

さて、これで戦況は変わるだろうか。

「私にできるのは……ここまでです」

後は、彼らが掴み取るしかない。

彼らはその手で『未来』という名の過去を
掴めるだろうか？

＊

ゆり

オールドギルド

「はあ、はあ、はあ……見たかつてのよ！」

私の息切れた呼吸音だけが辺りに響いている。

……あれからオールドギルドにいた、全ての『影』を私は消滅させた。もう、機関銃もアサルトライフルも弾切れ。残ったのはサバイバルナイフ一本と残り数発のベレッタM92だけだ。

ここが武器庫であるオールドギルドだから良かったものの、もし通路でこんな戦闘をしたら、確実に私は『影』に喰われていただろう。本当に運が良かった。

「さて……武器を補充しようかしら……」

そうなると残る問題はこのオールドギルドに武器が残っているかなのだがそれについては問題ない。

チャ の事だからちゃんと武器は隠してくれている筈だ。

私は適当な部屋を選び、中に入ろうとした。……………その時、

「流石ですね」

”彼”は現れた。

振り返ると立っていたのは、一般生徒の制服を着た少年。最初はNPCかと思った。

しかしそれはすぐに間違いと分かる。

その瞳にはNon Player Characterにはない意志の光があつた。

「へえ、まさか黒幕さん本人が出てくるとわね……」

私は軽口をたたきつつも、心の中で安堵の溜息を洩らす。

……良かった。犯人が戦線のメンバーでなくて良かった。これが『反乱』ではなくて、と。

そんな私の心を少年は読んだのか、その表情がほころぶ。……何がおかしいんだ？

私は少年を睨んだ。すると”彼”は一点、怯えた様な表情を作る。

「怖いですね、そんな表情をされてしまうと」

「ふん、お生憎様。私はね、仲間以外にはやさしくない女なのよ。それで、貴方は何？ 私に何の用？」

「最初の質問には、残念ながらお答えする事はできません。ただ、何の用か……と聞かれるとそうですね、『私』には足止め、という目的があります」

なるほど、つまりこの少年は私の邪魔をするために来たという訳か。

「私一人にご苦勞な事ね。でも……貴方なんかはその役目が務まるかしら？」

「ええ、勿論。目的があるのなら『私』に敗北はありませんから」

それは、まるで既に勝負はついている、と言われたようで少しイラッとした。でも、キレルのはまだ、先だ。その前に私には聞かな

きやいけない事がある。

「そう……なら、戦う前に少し質問に答えてくれない？」

「なんですか？」

「……………みんなは、無事かしら？」

敵にこんな事を聞くのはおかしいと分かっていた。でも……………それでも、確かめなければいけない事だった。もし、もう誰も残っていないなら私は……………

「……………ええ、驚くべき事です。貴女のお仲間さんはまだ、誰一人かけていません」

「……………そう、良かった」

大丈夫。まだ、みんな無事だった。そうか私はまだ『約束』を護れている。

それだけ分ければ、十分だった。

「さて……………質問以上ですか？」

「ええ、もう結構よ」

「そうですかなら……………」

少年が言葉を紡ぐと口を開いた時、既に私は駆け出していた。手にはサバイバルナイフ。この距離なら！！

走り込んでくる私を見て、少年はフツと笑った。そして……………

Guard skill『Handsonic』

「はあっ！？ ウソ！！」

その手に現れた私のと同サイズのナイフが私のナイフを弾く。…
…ちよつと待て、そんなのありか!?

「あんだ卑怯よ!？」

「そうですか？」

私の非難をよそに少年は容赦なく、ナイフを振るってくる。剣戟の音が辺りに響く。くそ……”彼”のナイフは重い。気を抜くと手からナイフを落しそうになる。この力……”彼”はおそらく、『Overdrive』も使用している。……と、目の前から突然”彼”が消えた!!

「ッ!？」

咄嗟に脇へ転がる。私がいた空間を少年のナイフが横薙ぎしていた。危なかった。高速移動のスキル『Delay』。忘れていたら私は真つ二つになる所だった。

（奏ちゃんが造った技はみんな使えるって訳？）

「おや……避けたんですか？」

少年が感心したように呟くがもう、皮肉を言う余裕もない。相手が悪すぎる。どうすればいいのか……銃には、まだ球がある。ただど撃った所で『Distortion』で弾かれるのがオチだ。

（こりゃ、マジで終わったかもね……）

一体、どうすれば勝てるのか見当もつかなかった。この少年、強すぎる。

だけど、諦める訳にはいかなかった。みんなの為にも私は……戦

わなければ、いけなかった。

たとえ、勝てなくても挑むしかない。私は覚悟を決めて目の前の少年を睨みつけた。

何故か少年は悲しそうな顔をしていた。何だその眼は……私をそんな眼で見るな！

「……なによ？」

「………何故、そんなに頑張るんですか？」

「………どういう事？」

「もう、いいじゃないかと言ってるんです。貴女はよく戦いました。もう、『卒業』してもいいんじゃないんですか？」

……なにを言ってるんだ、こいつ……

「あんたに何が分かるのよ！ 勝手な事、言ってるじゃないわよ！」

「岩沢まさみとユイは今、同じ世界で五体満足で平和な日常を送っていますよ？」

「ッ！？ ……だ、だから何よ！」

「貴女もその仲間に加わってもいいんじゃないかと『私』は言ってるんです。貴女だって本当は分かっている筈だ。この世界は死後の世界ですが、別に『卒業』後の選択肢の一つではない。全てを投げ捨ててやりなおす道もあります。だから……ここに貴女が留まる理由は、もう無いんですよ？」

……その言葉は私の胸に刺さった。そうだ。本当はもう、岩沢さんとのやりとりで気付いていた。この世界は神の嫌がらせなんかじゃない。神のやさしさに満ちた世界だと。一度、不幸のまま死んだ私達はここで生まれ変わるかやりなおすかの選択肢を神様から与えられていたんだ。

自然と膝から力が抜けた。落ちたサバイバルナイフを拾う気すら失せる。

「そうか……そうよね。私はもう……」

他者の為に戦う必要も苦しむ必要も無い……

「そうです。さあ、もう燻ってる時間は終わりです。妹弟かれらの事も、もう忘れてしまいなさい。アレは事故です。不幸な……事故。決して貴女のせいじゃない」

耳元まで顔をよせた”彼”はそう呟いた。……私のせいじゃない？ 私は悪くない？ 私は……

身体が急に軽くなった気がした。いわれもない幸福感に包まれる。……私はこのまま……消える。

誰に言われなくても理解できた。やっとあの子達を死なせてしまった罪から私は解放されるんだ。

やっと………

おねえちゃん、だいすきい！

その時、いつかあの子達が言ってくれた言葉が胸に響いた。

頭にイナズマが奔ったような感覚。

それは……一つの可能性。

消える前にそれを聞かないと……

私は少年に尋ねた。

「ねえ、教えて。……本当に私は悪くない？　生き残った私は……悪くない？」

私の問いに少年は笑顔で答える。

「ええ、悪くなんかありません。悪いのはあの男達。全ては”偶然の悲劇”。貴女は何も悪くない」

「……そうか。そうなのか……ありがとう、少年。分かったよ私。」

私は立ち上がった。さりげなくナイフを拾い、”彼”から離れ数歩、歩く。

「……どうしたんですか？」

”彼”が怪訝そうに尋ねてきた。そりやそうだろう。今まさに消えようとした人間がまた、武器を手にとったんだから。

ある程度、距離を取った私は”彼”の方を向いた。途端、”彼”は何かを感じ取ったのか。

再び、ナイフを構える。

「一体、どういふつもりですか？」

そう問いかけてくる”彼”に私は精一杯の笑顔を向けた後、こう言った。

「ごめん。私やっぱり神様……許せないや」

「……………どういふ事ですか？ それは」

”彼”は本気で訳が分からないのだろう。何故あそこから神が許せないという結論にいたるのか。

そうだよな……分かる訳ない。だってこれはある意味……………私のへ理屈だから。

「さっきさ、貴方は私が悪くないって言った」

「ええ、そうです。貴女は悪くない。なのに何故、まだここに残るのですか？」

「それに関してはもう、私は納得してる。そう、私は”悪くなかった。全ては偶然だった”そう貴方が言ってくれたから納得できた」
「では、何故！！」

私の遠回しな言い方が気に障ったのか”彼”は声を荒げる。

「怒らないで聞いて。じゃあさ、何であの子達は……………私の妹弟きょうだい

は死んだの？」

「それは……強盗が……」

「そう、強盗が”偶然” 私達の家に入って来たから」

その言葉を聞いた”彼”は……気付いた様だ。

「あ、貴女は………まさか!？」
「そうよ」

この世にもし、人の力ではどうしようもない事があるとしたらそれはきつと目に見えないモノ……極論を言っなら……

「私はその”偶然”を引き起こした神様が許せないの」

”偶然” 私の家に強盗がやって来て”偶然” 私だけが生き残って……そして死んだ私は”偶然” この世界に来了。……前言撤回。何が神のやさしさだ！ 全部、全部全部全部！！

神の身勝手あいっじゃないか！

少年は驚きで目を見開く。

「な、何を言ってるんですか!？ そんなの八つ当たりだ！ 貴女は自身の不幸を神のせいにして、復讐を正当化しようとしている!」

他者には、そう聞こえても仕方ない私の自論。でもね……でもね！

「なら、教えてよ！　なんであの子達が死ななきゃいけないのよ！
？　なんで！　なんであの子達が……私より小さいあの子達が、私の身代わりになる必要があったのよ！？」　偶然”を神のせいにするな？　不幸を神のせいにするな？　だったらアレを引き起こしたのは誰よ！？　私？　それともあの子達？　違う！　神よ！　神じやなきゃ、出来っこない！　神以外にあんな偶然起こせるものか！　そして死んだら死んだでこんな世界に閉じ込めて、チャンスを与えるから許せ？　それで私達が納得できるとでも思ってたの！　…ふざけるな！」

神は平等。幸も不幸も等しくばら撒くというのなら、それはきつと『正義』なのだろう。

だけど、だから納得できるのか言われたら出来る訳がない。

まだ、生まれて10年も生きてなかったあの子達が不幸を被る理由なんてどこにもない！

私はベレッタM92を”彼”に向けた。

”彼”はまだ、茫然としているのか、動かない。

私は”彼”に静かに語りかける。

「ありがとう。貴方のやっている事はきつと善意よ。貴方はこの世界で誰よりも正しい。でもね、私も……戦線の間みんなもそんな言葉じゃ納得できないの。『どうして、僕・私だけ……』それが、私達の共通の想いだから。神様の公平な判断で不幸を被ったとしてもね、当人の私達は『そうなんですか、じゃあ仕方ないですね』って、諦める訳にはいかないし、納得する訳にもいかないの」

「……だから、最後まで神を目指して戦うと？」

「…………ええ」

そう言って私は銃弾を”彼”に放った。”彼”の脇腹に銃弾は吸い込まれていく。

嫌な音が辺りに響いた。

「……………なんで、避けないの？」

”彼”が膝を折る。無言で痛みに耐えているのだらう……………もう、これで動けまい。私は”彼”の脇を通り奥へ進むことにした。この先に”彼”の護っていた本部がある筈だから。

「（……………本当はここで『卒業』してほしかった）」

「……………えっ？」

”彼”は低く何かを呟いた。良く聞こえなかった私は振り向く。

……………とその瞬間、私は自身の敗北を悟った。どうやら最後の最後で勝利の女神は”彼”にほぼ笑んだらしい。まあ、そうか。私、神様嫌いだし仕方ないか……………

「……………どうやら、あんたの勝ちみたいね」

「すみません。本当はこんな事したくなかった」

申し訳なさそうに呟く”彼”の表情がおかしかった。

「なに……………よ、この……………」

薄れゆく意識の中、最後に見たのは、私の足をがっちりと掴んだ……………『影』の腕だった。

e W
n h
d o

i
s

t
h
e

u
l
t
i
m
a
t
e

w
i
n
n
e
r
?

:
:
:
:

如何だったでしょうか？ 正直、姫龍自身にも意味不明になってしまったところは多々ありましたが、今回初めて戦闘シーンに挑戦しました。

よろしければ、ご感想をお願いします。

..... My Songの筈なのに最近、岩沢の出番は少ないですが、ここはどうしても外せない所なのでご了承下さい。では、失礼します。

8 / 26

感想の制限がなくなりました！ アドバイス等ありましたらどうぞよろしくお願いします！

episode zwei & Another ~ Each end ~

岩沢

風紀委員が現れたのは、『My Soul, Your Beat
s!』が終わり、三曲目を演奏しようとした時だった。

「あなたたち！　そこで何をしているの！？」

聞こえたのは風紀委員長の声。そして傾れ込んでくるクリムゾン
レットの腕章を付けた生徒達。一応、生徒会から許可を貰っている
ので今回は校則違反ではない。だが、ここで捕まれば、今後の活動
は制限されるだろう。

なので、私達が取るべき選択は一つしかなかった。

「直井先輩！　あと、頼みます！　初音、ユイ逃げるぞ！」
「ふえええ！？」「了解っす！」

私はそう言っただけの機材を持つと一目散にその場から逃
げだした。その後をユイに引っ張られた初音が付いてくる。よし…
…これなら逃げ切れる。

後ろから直井先輩の叫び声が聞こえた気がしたが、私はシカトを
決め込んだ。

ほら、言っじゃん？　『歩いてきた道、振り返らない』って？

歌詞の意味絶対間違ってるからね！？

最後に聞こえたのは直枝先輩のそんなツツコミだった。

偽ナギ

終わりとはいつも突然でいつも虚しい。

『私』の前に倒れている中村ゆり。彼女が動かなくなっ
て一体、何分が経ったのだろうか？

神が許せない。

そう言った彼女の姿はNPCである『私』でさえ、たじろぐほどの
気迫があった。だが、それ以上に『私』は彼女のありように虚し
さを覚えている。

許せない。何もかも許せない。

この世界に來た人間は全てがそう考えているのだろうか？ だと
したら悲しい話だ。自身の痛みを他者に与えたら、満足できるのだ
ろうか？ ……できる訳がない。その理不尽を知っている本人達が
それで満足する筈がない。そうして悲しみを増やし続けてその先に
何があるというのか？ 仲村ゆりはその矛盾に気が付いていたと思
う。でも彼女は止まらなかった。知性で理解できても理性が理解で
きなかったのだ。NPCである『私』が言うのもおかしい話かもし
れないが、本当に『神』（存在するかは不明だが）と戦いたいのは

ら、彼女は情を棄てるべきだ。

結局、彼女は肝心な所で”人間”をやめれない。

だから迷う。

「敵である筈の『私』を心配してしまう」

それが畏だと知らずに。敵の言葉に振り替えるなど、普通ならあり得ない。

排除すべきモノにすら、情を寄せてしまう。そんな”人間”が神などに挑めるものか。

私は歩き出していた。最大の障害は既に無力化されている。……

願わくば、彼女にはそのままでもいい。その夢の世界で『成仏』してもらいたい。

「……………復讐の先にあるものなんて、たがが知れていますよ」

E a c h e n d E n d

D i s t a n t U t o p i a

それは悪夢だ。

いったい何の嫌がらせだ。

これ以上、私に何を背負えというのだ。

神よ。

*

どこかでセミが鳴いていた。

夏だよ。

暑くてうんざりする。

夏だよ、遊びに行こう。

でも、この子達といるとわるくない。
なんでだろ？

おねえちゃん！

*

「……………いたい、何所よ、ここ」

仲村ゆりはそう、眩きながら歩いていた。ここは何処かの道路。辺りに人はいなく、車の姿もない。そこにいるのは彼女、一人。

(……私は、『影』に喰われたんじゃないかなかった訳？)

謎のNPCとの戦いの後、意識を失った彼女は気がつくと思ふ。アルトの上に倒れていた。

まったく意味不明なのだが、考えても仕方ない。とりあえず歩いてみよう。彼女の出した結論はそんな所だった。

しかし……

「歩いても、歩いても、まったく人に合わないってというのは何故かしらね？」

歩き始めてはや、数時間。一度も人とすれ違わない。……もしかするとこの世界に自分以外の人間はいないのだろうか？ 漠然とだが、そんな考えすら浮んでくる。

(ついでに、最高暑いんだけど……)

そして何よりこの暑さ。死後の世界では季節がなかった。……もしかにもならなかったが、思い返せば自分は長袖。だがこの世界の季節は夏。

それが齎す結果は……

(……暑い)

腕まくりしても汗がどんどん出てくる。

どこかで飲み物でも買おうかとも考えたが、よく考えたら金が無

い。ならば、水でも貰おうかと思ったが、見つけた店は全て無人だ。

（さすがのゆりっぺさんでも、不法侵入なんて出来ないわよ……）

天使のときは、やってたじゃないかと言われれば返す言葉など無いが、罪悪感ゼロだったという訳じゃない。一応彼女も人の子だ。常識くらいある。……良心も少しある。

そういう訳で現在、彼女は若干熱中症気味のまま、歩いていった。先程から時々、意識が飛びそうになるが、持ち前の気力でカバーしながら歩き続ける。

ぱたん。

と、言ったそばから彼女は倒れた。……やっぱり暑さには勝てないのか、日本人。

（こりゃ、ひさしぶりに死ぬかもしれないわ……）

徐々に薄れゆく意識の中、彼女はそんな事を想っていた。

*

ゆりが倒れてから数分後。

四人の人影が現れる。

「……あ、おねーちゃん。あそこでおねーさんがおひるねしてる」
「ホントだ。わたしもいつしよにねていいかな？」

「わたしも」

「はあ？ 何言ってるのあんたたち……って！！ あれ寝てるんじゃないかって倒れてるんでしょうが！！」

内の三人が何処かの外れな事を言う中、おそらく最年長であろう女の子が事態に気付き駆け寄る。

「ちょっと、大丈夫ですか！？ ……ダメ、返事しない。どうしよう」

「「おねーちゃんがんばれー」」

「何で我関せずなのよ、あんた達は！！ ああもう！！ んーんー……… あっ、そうだ！！ 手伝いなさい。家に運ぶわよ」

少しパニックになりかけた女の子だったが、自身の家からまだ遠くないと言う事に気が付いたらしい。

「持つわよ！！ せーの」

四人で力を合わせゆりの上半身を持ち上げると

「そーれ、そーれ、そーれ……」

そのまま引きずり始めた。

「おねーちゃん。このひとおもいー！！」

「こら、女性にそんなこと言っちゃ駄目でしょー！！」

「つかれたー」

「まだ、始めて10秒ー！！」

「あそぼーよー」

「人命第一ー！！」

……人気のない路地に四人の声が響く。そして引きずり始めて数分。

「見えたわよ、あと少し」

彼女達の家が見えてきた。そこはなかなか大きな家。最後の力を振り絞って彼女達は家の中にゆりを引き込む。

……扉は閉まった。

いつか忘れてしまえるのなら、”生きる”こと。それはどんなにやすくなるだろう？

忘却の彼方へと置き去りにして来たその答え。

結局、出せずに私は死んだ。

でも、それは無くなった訳じゃない。先伸ばしてただけ。

だから仲村ゆりは”答え”を出さなければならない。それが彼女の業なのだから。

*

どこかでセミが鳴いている。

それは歓喜の歌。生への叫び。

一週間の命の中で彼らはどんな歌を紡ぐのか？

また一つ声が止む。

＊

家の中へ消えた五人組。
とっても大きなお家の、表札は

” 仲村 ”

D i s t a n t U t o p i a
..... E n d

D i s t a n t U t o p i a (後書き)

今回から軽くオリ設定。

妄想話しばらく続きます。

F a n t a s y S u m m e r t i m e (前書き)

お久しぶりです。では、ごゆっくり。

Fantasy Summer time

なんて狂った世界だろう。

理不尽。そう、世界は理不尽で溢れてる。

家の玄関、夢への努力、夢中になってしまふ遊び。何気無い日常、有触れた望み、ごく当り前に抱く明日への希望……その先に”ソレ”は身を潜めている。

”ソレ”は弱者を好む醜悪な獣だ。

目をつけられた気が付いた時にはもう、遅い。

一瞬で、まるで風が通り過ぎていくかのよう”ソレ”は全てを奪っていく。

その時、人は知る。

永遠に続くと思っていたモノ。

それこそが”奇跡”だったのだ、という事を。

気付いた時には全てが閉ざされてしまった。

やっぱり生きる事は失う事なんだ。

そんな事、ずっと昔に知っていた筈なのに、
ずっと忘れていたんだ。

僕は

ちりん。

何処かで風鈴が鳴っていた。

さあ、目覚めろ。

キミの求め、渴望した答えはここにある。

旅はまだ、始まったばかりだ。

その魂に憐みを。

そして……望むなら

彼方の旅がここで終わりますように。

*

ああ、この世界は何所まで狂っているのか？

いや……もう、死んで喰われた”私”は生きてすらいらないのか。けれど、それでもここが死後の世界の終わりというなら

「ねえ、ゆりっぺさん。料理教えてちょうだい？」

「ねえ、ゆりっぺさん。一緒にお風呂入ろうよ？」

「ねえ、ゆりっぺさん。おままごしよう？」

「ねえ、ゆりっぺ、カードゲームやろう！！」

せめて、関係無い夢を見せてくれてもいいだろう。

「ちょっと無理よ無理。ゆりっぺさん身体一つしか無いわ。順番を決めて」

『……はい！！』

寄ってくる四匹の子猫をいなした私は手に持った新聞に目を落とした。ついで先程入れたコーヒーを手に取り口へと運ぶ。

（……うーん、絵になるからって理由で選んだけどやっぱり夏にコーヒーは無いわ）

飲んでその暑さと熱さのコンボに少し後悔する。けれど収穫が無

い訳じゃない。……どうやらこの世界でも味覚はあるらしい。
顔には出さずそんな事を考えながら新聞を読み進める。

ちりん。

何所かで風鈴が鳴っていた。

蝉の声も絶え間なく聞こえる。

けれどそんなモノは気にならない。

ただ。

たとえ幻想だとしても。
(ニセモノ)

目の前で楽しそうに笑っている姉妹弟達。
きょうだい

その事実だけで

「決まった！！ 最初はお風呂！！」

「はいはい……じゃあみんなで入りましょう？」

『らじゃー！！』

私の目頭は熱くなる。

*

目覚めるとそこは懐かしい我が家で、目の前には私がよく知る四人の子供達がいた。

その存在を……忘れる訳がない。忘れられる訳がない。

それは私の人生の半分と死後の全てを捧げて懺悔し続けた大切な家族だから。

悪戯っ子でもとっても思いやりのあったシオン。

人形遊びが好きでいつもみんなと遊びたがってたサクラ。

背伸びばかりしてけれどいつも失敗してたカンナ。

皆ミンナ、とてもいい子でこんな子達のお姉ちゃんでいられるのがうれしくて、きつとあの頃は毎日が輝いていたんだと思う。

それが理由かは分からないけど。

この子達の顔を見て私は泣いた。

死ぬ前も死んだ後も合わせて二度しか出なかった涙。

その三度目は意外とあっさりだった。

そして一度目も二度目も慰めてくれた両親はいないけど。

三度目の今回は姉妹弟が私を慰めてくれた。
きょうだい

どうしたの？ 何所か悪いの？

……ううん、違う別に何所も悪くない。ただ……うれしい。

そう……あの……家でよかつたらゆつくりしていいよ

？ どうせ明日までお父さんもお母さんも帰ってこないから。

そしてこんな私に。

”私”はやさしい言葉をかけてくれた。

*

古い摩耗した記憶にあつたお風呂はもつと大きかった気がしたが、今こうして成長した目線で見るとそんなに大きく見えないのは何故だろうか？ ……死んでから実感するとは皮肉な話だけど。

「わー！！ ゆりっぺさんちよー綺麗！！」

「ぶにぶにだ」

「ちよつとあんまりはしゃぎ過ぎないでよ。転んだら大変なんだからね！！」

「わかつたユリ姉ちゃん」

三人に声をかける”私”を微笑ましく誇らしく思いながら私は何年振りかになる我が家のお風呂へと足を踏み入れた。先程小さいみたいなお風呂をいったがそれでも五人で入れるくらいにお風呂は広かった。

暑さでぐったりとなっていた手前、この水風呂遊びに意見がまと

まっただのはありがたい。

冷たい水が肌を刺激して思わず声を上げてしまつがそれもいまは愛おしい。

私は久しぶりに”生きている”この時間を堪能していた。

*

本当ならこんな事している場合じゃないのは分かっていた。
私の見ているコレは夢で幻でいつか覚めてしまうモノだとは理解していた。

こうして私が夢幻のこの子達と戯れている間も戦線みんなは闘い続けている。

それを知っている。

けれど……だけど!!

あと一日……一日だけ、私に時間をください。

さつき新聞で見た日付 平成1 年8月 日。

この”現実”から目をそらす事は出来ない。

それは運命の一日前の日付。

この世界が私の記憶を元にできているなら

明日、この子達は”ゆり”を残して死ぬ。

そんなモノは認めない。

この子達が幻でも認めない。

たとえ私の歩んだ人生そのものが変えられないとしても、今この瞬間笑っているこの子達を見捨てるなんて出来ない。

これが影の罫でこれが神が下した罰だというなら

せめて目の前の彼らだけでも救って……私は召される事にしよう。

*

それは全てが遠い理想郷。
求めたモノは未来にも死後にもなかった。
思えば簡単だったのだ。

仲村ゆりが目指して求めて探し続けた答えは

過去に、長女・仲村ゆりであつた今日にこそあつたのだから。

*

「ただいまー！！」

「おかえり、シオン、サクラ、カンナ……ユリ」

愛しい者達の名前を呼ぶ。来る時は見なかったがこの世界にはちゃんと他の人もいるらしい。おつかいを提案した所、四人はしっかりそれをこなして帰ってきた。……まあ、レシートが無い辺りもしかしたらただ本当に持ってきただけかもしれないが……。

（……………うん、見なかった事にしよう）

一人納得して買い物袋を受け取る。

「ねえ、ゆりっぺさん。今日の晩御飯はゆりっぺさんが作ってくれるの？」

何所か期待しているようにシオンが訪ねてきた。……弟よ、確かにこの年齢の姉達のご飯は頼り無いモノだったのだろうけどそれを口に出しちゃおしまいよ？

「……………ちよつとこつち来なさいよシオン」

「ちーまーっーりーじゃー」

「わ、あわわわわ……！！……ごめんなさい、カンナ、ユリ姉ちゃん！！」

案の定、目敏く聞きつけた長女^{わたし}と次女^{カンナ}に詰め寄られ、シオンは逃げだした。……夕飯前に返ってくるかしら？

そして残ったサクラは……

「（ジ　　）」

羨ましそうにその光景を見ている。

「……サクラ？」

「ジ　　……なに？」

「お手伝い、する？」

その言葉にカンナは眼を見開いたあと、満開の笑顔になり持っていたぬいぐるみをソファーにぶん投げた。……あわれぬいぐるみ。隙間に顔が突き刺さってる。

「ねえねえ、なに作るの？　ゆりっぺさん！！」

そんな事おかまいなしのサクラ。これは………まあ、いいか。食べる時に言おう。そう結論してこの話題はもう終わり。

「そうね、なんだと思う？」

そう言って私はサクラの前にまな板を差し出す。

板の上に乗せられたのはジャガイモ、ニンジン、豚肉。

うーん、と少し考えて出た答えはみんなの大好きだったモノ。

「分かった！！」

そう

「じゃあ、二人で言うわよ」

せーの

「「カレーライス！！」」

明日の為に。今日は山盛り、お水もよろしく。

*

夢幻の旅ももうすぐ終わり。

一睡の夢の中。

家族は確かに笑い合っていた。

f a n t a s y s u m m e r t i m e E n d

Fantasy Summertime (後書き)

次回で終われるかな？

感想、誤字、脱字ありましたらお願いします。

では、また。

新曲（前書き）

久しぶりの更新。

ただ、今回は岩沢サイドです。

新曲

岩沢

季節は夏の影が見え始めた七月初日。

あのライブから数日が経つ。莫迦兄貴の御蔭でなんと御咎め無しとなった私達はいつもの様に練習していた。あのライブの後、すぐに音無家に居候しているユイも参加し、だんだんとバンドらしくなっていくのが楽しくて、懸命に毎日練習に励んでいた。

その唄を見せられたのは、練習が終わり家で涼んでいる時。

ユイと二人、麦茶片手に部屋で新曲の相談をしていると、神妙な顔をした初音が手に”ナニカ”を持ってやってきたのだ。

一体どうしたのかと想い、聞けばそれは自分が初めて作曲した歌詞だ、と初音は言った。

えっと、恥ずかしいんですけど……読んでくれませんか。

まるで愛の告白の様に顔を赤らめる初音にとりあえずそれを男の前でするのはやめろ、勿論教師もだからな!? と厳命した後、その歌詞とやらを見せてもらった。

「……………えーと、コレ、初音ちゃんが書いたんですか?」

「は、はいッ!」

「……………コピーはしてないよな?」

「も、もちろんですよ!」

心外だ、と表情を一転、怒り顔に変えた初音にすまんスマンと謝りながら、歌詞の意味をもう一度私とユイは吟味していく。

いつも一人で歩いていた。

それは独りぼっちの”ダレカ”の唄だ。

振り返ると皆は遠く。

それでも”ダレカ”は歩いていた。……それが強さの証と信じて。

もう何も恐くない。

そう呟いて、”ダレカ”は歩き続ける。……いつしか、一人になって誰かの思い出の中だけの存在になっても、涙を忘れて”ダレカ”は戦い続ける。

行く先が行き止まりの崖と知りながらも、強さを証明する為に”ダレカ”は進み続ける。

いつか忘れてしまえるなら、生きる事、それは容易いモノ？

その問いかけに一体幾人が答えられるだろうか？ ……少なくとも私は答えられない。だって、ずっと逃げていたから。忘れもせず死んで、死後の世界で満たされていたから、私にその問いに答える事は出来ない。ただ、世界は甘くないって事は知っている。

容易くない事も知っている。だからこそ……。

「……忘却の彼方へと堕ちていく、か」

その時、人は生きた意味を失う。記憶を”過去”として扱った時、それは”私”では無くなる。

だから生きろ、と。

走り続ける、と。

孤独さえ愛し笑ってられるように、戦え。

そうして全力で走り抜けた先に必ず答えはあるから、と。

……その唄は綴られていた。

「……………」

「……………」あの、そんなに酷かったですか？ 私の歌詞
何も言わなくなった私達に初音は不安そうな眼をする。

「……………」いや、最高だよ。コレ」

「そ、そうですよ！ 凄いです初音ちゃん。アタシだってこんな歌詞書けるか、分かんないですよ！！」

問われて、そして慌てて、私とユイは感想を述べた。……実際、荒削りな所はあるけど初音の唄は”いい歌”だった。

……ただ、これは私とユイの気持ちの問題。

無関係なのは分かっている。

けど、これを見て聞いて、あの娘を思い出さずにはいられない。この唄はあの娘の人生そのもの、と言っても差支えなかった。

いつだって”独り”で、”誰か”の為に戦っていた私達のリーダーを思い出さずにはいられない。

そういえば……………。

聞いてから二週間。

”闘い”は始まっているのだろうか？
なら、もしかしたら……………。

誰かこっちに帰ってくるかもしれない。

「……………よし、じゃあ次の歌は初音のこれでいくぞ？」
そう思った時にはもう口から言葉が漏れていた。

「え…………マジですか？」

驚いた様に初音とユイが見つめるが、もうこれは私の中で決まっ
てしまった。

「ああ、真剣^{マジ}だ」

彼女を迎え入れる様な唄を創ろう。

この歌詞の様に

これは挑戦だ。

世界に対して、そして私に対しての挑戦状。

過去を清算する事は出来なくても、今を変える事が私には出来る。
だから刻もう。

この歌を。

「よし、じゃあ詰めるぞ」

「……………了解ですよ、まさみちゃん」

「私もやります、岩沢さん！！」

決意を新たに、彼女達は歩み出す。

それはきつと楽しい時間であり、苦しい時間でもある。

だからこそ、それは尊いのだろう。

『新曲』……………End

また会えたら会いましょう？

夏休みの日記。平成1 年8月 日（土）。

今日は、お家の近くで女の人を拾いました。名前はゆりっぺ。なんでも生き倒れ、というモノに遭遇したらしくお家が無いそーです。可愛かったのでゆりお姉ちゃんに頼んでお家に運びました。……なんとなくゆりお姉ちゃんと名前にてるなーとは思いますが綺麗さは断然ゆりっぺの方が上です。というより優しいし、料理も上手で本当にお姉ちゃんになってくれたら、嬉しいのにな。明日はみんなでプールに行きます。ゆりっぺ泳ぐの得意そうなのでいまからとても楽しみです。

仲村カンナ

*

いつの間にか駆けだしてた。

あなたに手を引かれてた。

昨日は遠く。

明日はすぐ

そんな当たり前に心が躍った。

*

目覚めればそこは、よく知っている天井だった。
当然だろう。

なんせ、一生の半分をここで過ごしてきたんだから。

……望むなら、こんな夢幻では無くて現実で、生きている間にこの幸せを知っていればよかった。我ながら無茶だとは思うが、それこそがきつと”夢”だったのだから。

「……………うにゆう、ゆりっぺ……………」

でも……………。

例え幻想でも今触れているこの温かさは本物だ。…………私にとっては過去でも”私”としては確かな今だ。

「…………お姉ちゃんが、護ってあげるから」

だから彼方は笑ってなさい。

「……………仲村ゆり」

自分が自分の頭を撫でている異常なこの状況を私は嬉しく思う。
ちりん。

何処かで風鈴が鳴っていた。

さあ、終わらせましょう。

この愚かな旅を。

*

目覚めた私は、四人と朝食を済ませ、市内のプールへとやってきていた。その理由は朝、テーブルに私用の水着が置かれていたから。成る程、お膳立ては出来ているという事だ。

外に出てみれば案の定、沢山の”人”が町を歩いていた。……昨日までは私の家族しか存在し得なかった町に人間が居る。その事実が指し示す事は一つしかない。

上等じゃないか。

神め。

私は負けはしない。絶対にこの運命を覆して見せる。

「夏だ！」

「水着だ！」

「プールだ！」

そんなお約束な事を言いながらシオン、サクラ、カンナは水の中に飛び込んでいく。……監視員に怒鳴られているが、それもまた一つの夏の思い出だろう。

「……それで”ゆり”はあんな風に飛びこまない訳？」

「私は一応お姉さんですから、ちゃんとお手本にならなきゃ……」

……相変わらず我ながら意地っ張りなモノだ。

「そう……」

「えっ……？ うわぁっ!？」

お姫様だつこで”ゆり”を持ち上げ、私はプールサイドまで歩いていく。

「……………まさか」

わないので、あの子達が逃げ続ける限り何所までも追っただろう。…
…水には入らない様だから余程間抜けじゃない限りは捕まらない。

更衣室に戻り着替えて私は入口に向かう。

「あれ、もう出て行かれるんですか？」

「ええ、もともと子供達の送り迎えが目的でしたので」

不思議そうな顔をする受付嬢NPCに淀みなく答えて私は施設を出た。……事前にあの子達には夕方になったら四人で戻って来い、と告げてある。

さて、準備は整った。

あとは、私の過去を清算するだけだ。

*

待ってる気がした。

呼んでる気がしたんだ。

震え出す今この時が……。

見つけた気がした。

失われた記憶が呼び覚ました。

物語、永遠の、その終わり。

*

「さて、これで一応の未練は無くなったわね」

町を独り歩きながら一人ごちる。

……面と向かってサヨナラと言えないのが残念ではあるけど……。

「……まあ、私にはそれが似合いか」

それがゆりっぺさんクオリティーってね。

なら、最後はやっぱりコレなんだろう。

「じゃあね、また会えたら会いましょう？」

私の可愛い子供達……。

その呟きは夏の大きな青い空に吸い込まれて消えていった。

届く事のない、その願い。

まったく摩訶不思議な人生だった。

それももうすぐ終わってしまう。

なのに……どうして……。

「こんなに嬉しいんだろう」

零れる涙を私は拭わない。

これがきつと生涯最後の涙。

壊れた人生、歪んだ心。

そんな異物が流した最後の気持ち。

それを確かに私は愛おしく思った。

「ただいま、我が家」

帰ってくれば、まだ彼らはいない。
なら好都合だ。

逃げも隠れもせずに私は迎えてやろう。

「さて……コーヒーでもいれましょうか」

ちりん、と何所かで風鈴が鳴った。

さあ、始まりを終わらせよう。

終わりが始まったこの場所で。

『また会えたら会いましょう?』……End

またね

夏休みの日記。平成1 年8月 日(日)。

今日は、お家の近くで拾ったゆりっぺも一緒に市民プールに行きました。ゆりっぺには沢山泳ぎ方を教えてもらおうと思っていたのですが、監視員から逃げ回っている内にゆりっぺはいなくなっていました。今日はあんまりゆりっぺとは遊べませんでした。明日もまだ夏休みなのでいろいろして遊びたいです。それにしてもお昼に食べたメロンパンは美味しかったな！。

仲村カンナ

*

「おわったー！！」

今日は夏休み最後の日。宿題の代わりに溜まりに溜まっていた絵日記をようやく書き終え、私は歓声を上げる。……ゆり姉やサクラはずるい。肝心な所でボーとしてるくせに、こういう事はちゃんとやっていて休みの最後はいつも私だけがこうして夜九時まで起きている事になる。

しかしこの作業は実は中々楽しいと私は思う。……普段遊んでばかりだから、たまに自分の遊びを振り返ってここはああしておけば良かったなー、と思ったりするのだ。

「まあ、慣れてるからね」

ゆり姉やサクラには決して分からない楽しさだろうコレは……。そうして書き終えたばかりの日記を初日から読み返していく。バーベキュー、水遊び、テレビゲーム、料理にキャンプ、お祭りなど

今年も我ながらよく遊んだ。

「……………あれ？」

と、私は自分の書いた日記を読み返し、ある二日間でフツと首を傾げた。

「ゆりっぺ” って誰？」

そこには私が拾ったお姉さんの話が書かれている。……これはサボリ始める前の日記だ。しかしこんな出来事があっただろうか？確かにこの日は朝から夕方まで姉妹弟で市民プールしみいに居たが……。

「……まあ、いいか」

大方、知らないお姉さんと意気投合していたんだろう、と決めつけ私は次の曜日に眼を移す。……ほら、やっぱり月曜日からはこのお姉さんは登場しない。

夏の刹那の出会い。ただそれだけ。
しかし一つ心残りがあるのなら

「なんだ、日記に書くくらいならちゃんと写真取っておけば良かった」

それくらいのモノだ。

「おーい、カンナ！！　いつまで起きてるんだあ？　早く寝ろよー

！！」

「はあーい」

おっと、そういえばもう九時過ぎだ。……明日からは学校。お父さんもああ言ってるし、そろそろ寝なきゃね。一度下に降りて歯磨きとトイレを済ませ、私はベットに潜った。

毎年、夏休み最後のこの寝るまでの数分は少し寂しい。……けど目覚めればきつと明日が在るから怖くはない。

「あーあ、楽しかったな」

口に出せばそれは過去になってしまふのは分かっている。……でも、だからこそ声に出す。

過去は記憶だ。けして無くなったりはしない。だからこそこうして刻みつけるのだ。

頭には無く、心に。

望むなら、この思いを永遠に。

手の平の樂園はいつでも私の中にある。

「だから……お休み」

「ええ、おやすみなさい」

神流。

そう誰かに言われ、頭を撫でられたのは薄ぼんやりと覚えている。けれどそれが誰だったか……。

夢の中に入ってしまった私には最後まで分からなかった。

「……………またね」

『またね』……………End

後悔しなさいよ

長閑な夏の昼下がり、四人の男達とはある家への前へとやってきた。……夏だというのに全員が全員、上下長袖というその異質な集団は家の表札を確認すると互いに目配せしあい、下種の笑みを浮かべる。

男達は犯罪者だった。

昨日から子供しか居ないというところあるお金持ちの自宅。……この世の中であつて防犯装置の一つも仕掛けていない間抜けの家。何度も何度も人様の財産を強奪し、その背徳の優越感に染まりきつてしまつた男達にとつてここは既に他者の家では無く、”宝の山”としか映つていない。

その子供達も朝の内に何処かへ出かけてしまった。……一つ誤算があるとするれば、子供が標識通りの四人では無く五人だった事。そしてそのうちの一人が丁度”食べごろな”少女だった事くらいだ。惜しい事をした、と少し男達は後悔している。多少、人目はあれどやはり朝の内に襲っておけば、今頃自分達は御馳走にありつけていたかもしれない……。

……男達は下種であり屑だった。

それが誰の人生を狂わせて、誰の人生を終わらせるかすら考えない。……いや、考えれない。甘ったれた思想に染まりきり、努力無き成功を達成してきた男達にとってこれはゲームだった。

殺人すら許されるゲーム。そんなある筈の無い妄想に男達は囚われている。

大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫、大
丈夫

頭に浮かぶのはそんな根拠のない言葉ばかり。

大丈夫。

自分達はこれまでも成功させてきた。

大丈夫。

そればかりではなくたまの”御馳走”まで頂いてきた。

大丈夫。

自分達は間違いなく愛されている。

大丈夫。

誰かって？

大丈夫。

それは勿論、神様さ！！

大丈夫！！

そうして玄関のカギは開け放たれた。男達はまず、リビングへ向かう。……まずは残っている家の人間が居るかどうか。それが男なら殺す。女なら縛って後程犯す。その動きに淀みは無い。

彼らはこの時、猟犬だった。……自らの欲望の為に他者を喰い殺そうと奔る涎を垂らした醜悪な獣。その言葉が四人にはピタリと当てはまる。

勢いよく、リビングの扉を開け、そこで男達は今大最高の笑顔を浮かべた。……朝、確認した少女だ。

彼女が何故か家に戻ってきている

！！

その赤毛ショート少女はソファに座り、カップを片手に雑誌に目を落していた。その耳にはイヤホンが装着されており、余程の音量で音楽を聴いているのか、男達に気付いた様子は無い。……それは絵になっているからこそ、余計痛ましかった。

こんな将来望まれる美少女が次の瞬間にはその人生を終わらせられるかもしれない。

それを阻止できない事がこんなにも情けない……。

しかしこの時の気持ちを男達に聞けば間違いなくこう言うだろう。

それが最高ののさ、と。

そう言っつて塵共は笑うだろう。

ああ、情けない……。

本当に情けない……。

こんな地獄を見る事しか出来ない自分が情けない。

そうして少女に男達の手が延ばされる。……もはや伝えられるのはここまでだ。

もう……。

「ねえ、一つ聞いていいかしら？」

と、その時唐突に少女は口を開いた。……莫迦な。

ありえない。

少女は男達に気付いていた。だというのに逃げ出さない。その場を動きもしない。……男達はバットも、スタンガンも、違法エアガンすら所持している。

なのに何故、慌てない。死ぬのが怖くないのか？ それとももうイカレテしまったのか……。

「なんだ、姉ちゃん俺達に気付いてた訳？」

「ええ、まあね」

男達は驚きこそしたが、今すぐ少女を襲う事はしなかった。それは慈悲では無い。男達はこの瞬間、喰う獲物との対話を楽しんでいるのだ。

それで答えてくれる訳？

少女が自分達を恐れる事もせず、ただ質問に答えろ、と要求してくる。

こいつ女王様かよ。

マジ受ける！！

たまんねえなあ！！

それを勘違いした男達は口々に歓声を上げた。……こいつらは真正銘の莫迦だ。

男達は気付かないのか。

少女の目は既に年相応のモノではない。

完全に狩る者の目だ。

自分達の立場が既に逆転している事に男達は気付かない。

気付かないから……。

「まあ、聞いただけ聞いてやるよ？」

ほら言いな、そんな口が聞けるのだ。

そう……、と少女は存外冷めた口調で呟いた。数秒ばかり天を仰ぐ。……声が出ない口元が諦めた様に”莫迦な奴”と動いていた。

「じゃあ、一つ。……ねえ、理由”ある”殺人って許されると思う？」

そうして紡がれたその言葉は間違いなく真正銘最後の通告だった。逃げる。零れた言葉は既に少女に向けられた言葉では無い。

男達に向けられた言葉だ。

「……それ知ってさ、姉ちゃんはどうにかする訳？ 俺達を？」

男の一人が面白そうに顔を近づけて呟く。少女は顔を顰める事すら、逃げる様子は無い。

「それで如何なの？」

ただ、答えだけを少女は求める。

「あつたり前じゃん。許されるよ。そんな事」

その問いかけにもう飽きてしまったのか、男はそれを当然だ、と答えた。そしてこれまでもそうしてきた、と笑った。

泣き叫ぶ子供を叩き殺して、嫌がる女性を犯し殺して、呆然とす

る老人を滅多刺して殺してきた、と男達は嗤った。

そしてこの後、あんたもそうなるんだ、と男達は晒った。

「そう……」

しかしそれを聞いても少女は眉一つ動かさない。……ただ男達の言葉になんの感慨も受けず。流した。

それは獲物態度ではない。

それが気に食わないのか。

「なに、もう諦めた訳？ あんたさあ、これから自分がどうなるか分かってんの？」

「勿論よ」

「へえ……なに？ もしかしてあんたさっきから誘ってる？」

「ええ、分からない？」

その少女の言葉に男達は顔を歪めた。それは嗤い顔。最高だ、とも思っているのだろうか？ 彼らは……。

断言してもいい。彼らの”誘う”と少女の”誘う”は完全にベツモノだ。

そんな都合のいい事が世の中にある訳が無い。なんで分からない。どうして気が付かない。

彼女の晒い貌に。

少女はゆっくりと胸元のボタンを開けていった。その誘うような動きに男達は無言で牽制しあった後、一人の男が手を伸ばす。少女はその男の指を掴むとゆっくりと胸の方へ持っていく、触れる直前で腕を止めた。

そうして男の顔を覗き込み

「ねえ、本当に後悔しない？」

そう赤らめた貌で呟いた。

「勿論」

……いつから、少女と恋仲になったのか？ 男は馬鹿正直に答える。

その答えにニツコリと少女は嗤い。

「……………そう、なら殺さなきゃね」

その掴んだ指を思いつきり手の甲へと倒した。
ボキリ、と軽い枝の折れた様な音が家に響く。

「う、あ…………？」

「お願い、死んで」

その事実にも男が気付き。一拍遅れて激痛が奔り叫び出しそうになった時、既に少女の指は男の両目に突き刺さっている。

ゼラチンを潰した様な音。その二重のコントラストに…………。

「う、うぎゃああああああああ！！！！！！」

”痛み”の悲鳴を男は上げる。

「…………そんな声、アンタが上げる資格なんて無い」

しかしそれが少女には気に食わなかったようだ。目に突っ込んだ指を無理やり手元に引き寄せ、寄って来た顔を思い切りよく膝で打つ。

ぐちゃり、と文字通り”潰れた”音を上げて男は動かなくなった。
ゆらり漂鬼の様に立ち上がり少女は今この時の光景に呆然として
いる男、三人に視線をくれる。

「情けない」

本当に如何して

私はこんな奴らに人生狂わされたんだろう？

その眩きを一人”減った”獲物達は如何取ったのだろうか。声に
ならない叫びを上げ、男は持っていたバットをスタンガンでナイフ
を振りかぶる。

「あぐ、ぎゃあああああああああああつあああつ

！！」

その瞬間にスタンガンの男は膝を折った。別段、少女は何かした
訳ではない。骨すら折っていない。

やった事は一つだけ。

その喉元にバターナイフを放っただけ。

「抜くと死ぬわよ」

事実だけ告げる少女は既にナイフを持つ男に向かっていった。……
ありえない。別段訓練した訳でもないだろうに少女の動きは一種の
芸術すら連想させる。

怖くないのか？ ナイフを振りかざす男に如何して彼女は向かっ
ていけるのか。

ナイフを突き出して来る男。その刃をいなし、少女は男の足を踏
む。

グキ、とまた骨の折れた様な音がした。……よく少女を見ればそ
の足元は何故か日本なのにブーツ。……この子は日常的に戦場にて
もいたのか？

「らあっ！！」

踏み足からさらに一步踏み込み少女は勢いよく身体を回す。それ
は中国武術ならば轉身脚、プロレスならバックスピン

要は後ろ回し蹴りだった。

一説によれば、踵で蹴る技は人類が手にした究極の打撃技の一つ
であるという未開もある。……なんせ、達人は素足でコンクリート
を粉碎するのだ。それを一概に誰が嘘だと否定できる？ つまり少
女の蹴りの威力はそれ程だった。

テーブルに勢いよく倒れ込み、血を流しながら男は動かなくなる。それを冷めた目で見つめていた少女は？ 然と立ち尽くしていたバットを持つ男に視線を向けた。

「……どう？ しつぺ返しを受けた気分は？」

血まみれの少女、しかしそこに少女が負った傷など一つもない。圧倒的だった。

そこで男は初めて知る。

自分は既に狼では無くなっている事を。

既に自分は羊だったという事を。

それを自覚して逃げ出す程の知能が男にあつたらどれだけ幸せだったろうか？

……残念だ。

結局塵であり屑であり下種である男はとうとうその事実が付かなかつた。

最早、何の優位も持たないバットを振りかぶり、男は人ならざる声を上げ、少女に向かう。

それは見るに堪えない愚行。思わず近くにあったゴムボールを手に取り男の顔面に投げた。

「んあつ！？」

「莫迦、よそ見るなよ」

それだけで気が逸れてしまう男にそう呟く頃には

彼女は既に懷に居る。

ブーツが直角に膝に入り、男の関節が折れる。叫ぶ暇すら少女は与えない。そのまま男の袖を掴み、一気に踏み込んで

「後悔しなさいよ」

関節を封じて、男を背負い上げた。

受け身すら取らせない。

それは一種の執念じみた攻撃。

狙ったのか、テーブルに打ちつけられ、男は他者同様沈黙する事になった。

「それで後は隠れてるアンタだけよ」

出てきなさい、と少女は言った。”私”のいる方向を指さして。

「……どうして分かったのかしら？ 意外と上手く隠れていたつもりなのけど？」

「は？ あんな声出してれば嫌でも気付くわよ」

物陰から姿を現しつつ、そう尋ねれば返ってくるのは100%の答え。……まったく優秀すぎる。

「それでアンタ何者よ？」

「まあ、そういきり立たなくてもいいんじゃない？ ゆりっぺ？」

私がそう彼女 仲村ゆりに問いかければ彼女は勿論、怪訝そうな顔をする。

「アンタ本当に ！！」

「話はそこに転がってるゲテモノ片づけてからにしましょうよ？」

そんな彼女を片手で制して、私は太腿からM1911を抜いた。

私の目の前には彼女の背後で立ち上がっている喉にナイフが刺さった男。その男の両膝に鉛玉をブチ込む。

「 ！！」

喉元に血が詰まっていたのか、男は叫び声と共に血を吐きだし、今度こそ気を失った。

「

「詰めが甘いわよ？ ここは死後の世界と違って死んだら終わりなんだか注意しないとね？」

「.....アンタ、一体何者よ」

「ふう……だからこれを片付けてから話しましょう？ まさかこんな血生臭い場所で語り合いたいの？」

とんだ性癖ね、そう言うとか心外だ、と彼女は怒る。

「そんな趣味無いわよ！！」

「そうね、態々来るのが分かってて、血が飛び散らない様に辺りにシート敷きなおしてる彼方だもの。当然よね」

「……………せめて名前くらい教えないさい。彼方は誰？」

遠回しにだが”神なら殺す”とその瞳は告げている。……………まあ、

それくらいなら名乗っても大丈夫だろうか？

「そうね、自己紹介くらいするべきだったわ。御免なさい」

それでも結構動揺してるのよ？ と告げ、私は彼女の瞳を見る。

「私の名前は朱鷺戸沙耶。彼方と同じ」

反逆者よ。

そう、言葉を溢した。

『後悔しなさいよ』……………End

後悔しなさいよ（後書き）

書いてるうちにこの男達が腹立たしくなってきたまさかの惨劇話に……。

感想お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0064m/>

AngelBeatsMy Song

2011年1月23日17時52分発行